
月読の奏

南瓜縮也

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

月読の奏

【Nコード】

N8317W

【作者名】

南爪縮也

【あらすじ】

王国軍の兵士ジュールは、突如出現した【ヤツ】と呼ばれる人外の化け物との死闘の中で、自らの体に異変を感じる。

神話に隠された秘密と二つの大きな科学理論が反発する狭間で、ジュールは多くの困難に直面するが、自らに課せられた宿命に足掻くよう彼はその一歩を前へと踏み出す。

「驚いたな貴様。その光る右目、月読の胤裔か」

ヤツが口にしたその言葉を聞いた瞬間から、ゆがんだ運命の歯車がゆっくりと動き出した

更待月の夜戦場（前書き）

突然王国に出現した【ヤツ】と呼ばれる人外の化け物の脅威に、人々は恐れをなしていた。

王国は軍を派兵し、ヤツの討伐に動く。

だが尋常でないヤツの強さに、軍の若き隊士たちは舌を巻いた。それでも決死の覚悟で戦い続ける隊士たち。

多くの犠牲を出しながらも、激闘を戦い抜く隊士たちはあと少しというところまでヤツを追い詰めていた

更待月の夜戦場

「全員後方に下がれ！」

フアラデー小隊長は小銃を抜きながら叫んだ。

そんなフアラデーを突然影が包んだ。

ゾツとした彼が振り向いたそこには、人の形はしているものの、3メートル程の巨体全てを黒毛で覆う、人外の化け物が月明かりを背にして立っていた。

フアラデーは怪物に向け小銃の引き金を引いた。

「ドサツ」

小銃の発射音とは明らかに異なる、重く鈍い音が足元から聞こえた。

小銃を構えたままのその右腕は、根元から千切れ地に落ちていた。

「おおおお」

フアラデーは苦痛に顔を歪めながらも、残された左腕で刀を抜き化け物に切りかかった。

化け物はその一撃をかわすと、そのままフアラデーの背後に素早く回り込んだ。

「やめろーっ」

ジュールがそう叫ぶのと同時に、化け物は鋭い爪を持つその右腕をフアラデーの背中めがけて突き立てた。

一瞬時間が止まったかのように凍りついた。

月の光に照らされたフアラデー小隊長の体は、人の3倍はあろう化け物の太い腕に貫かれ、奇妙に折れ曲がっていた。

十数分前

「……全員無事だな」

小隊長のフアラデーは廃墟の壁を背にしながら、月夜に浮かぶ若

い隊士一人一人の顔を確認した。

それらの顔には極度の緊張と疲労がうかがえたが、衰えのない戦いへの意志も感じられた。

フララデーは崩れかけた窓から、廃墟の中をゆっくりと覗き込む。薄暗いながらも月明かりが少し差し込んだ廃墟の中は、十分に見渡すことができた。

そしてその中に【ヤツ】の存在を確認した。

微かに震えた声で、静かに発せられるフララデー小隊長の指示が、インカムを通して隊士たちに届く。

「ジュール、お前はテスラを連れて左側の入り口に向かえ。ヘルツとガウスは裏口だ。俺は正面から行く。配置についたら合図するまで待機しろ。勝負は一瞬だ、気を抜くなよ」

隊士たちの体力はとうに限界を超えていた。若さゆえの気力と集中力でここまで来たのだ。

引き返すことの出来ない状況の中で、若い隊士たちの気持ちを繋ぎ止めるために、フララデー小隊長は力強く言った。

「ヤツに今までどれだけの仲間が殺されてきたことか。確かにあの強さは異常だ。だがそんなヤツとこれだけ戦いながらも、全員無事なのは決して運が良かっただけじゃない。」

自らにも言い聞かせるように、小隊長は続けた。

「自分達の力を信じるんだ。今確実にヤツを追い詰めている。俺たちならやれる。ヤツを倒すんだ！ この機会を逃したらまた大勢の人がヤツの手にかかるだろう。そんなことは絶対にさせてはいけない」

夕暮れ時に人ごみ溢れる市街地で突然始まったこの戦いは、月の明かりが輝きを増した頃、人気の無い廃工場に戦場を移し、あと少しというところまでヤツを追い詰めていた。

ただ当初四小隊いた部隊は、今やこの一小隊を残すのみになっていた。

左側の入り口についたジュールは、共に行動しているテスラの顔色の変化に気づき、声をかけた。

「どうしたテスラ。どこか痛むのか」

「ジュール。違うんだ、ごめん。僕は怖くてたまらない」

「心配ない。さっき小隊長が言った通り【ヤツ】を追い詰めているのは俺たちのほうだ。ここまでやれたんだ。お前ならやれる」

「僕はただ必死にみんなについて来ただけだよ。付いていくことに必死で、周りで大勢の人が傷ついていても気にならなかった。ううん、戦いに集中することで気づかないようにしていたんだ。でもここに来て急に怖くなってしまった……」

ジュールは怯えるテスラに優しく話した。

「怖いのはみんな一緒だ。でももう少しだ。この壁の向こうにヤツがいる。でもヤツは深手を負っているし、かなり消耗しているはずだ。俊敏なヤツの動きに切れがなくなってきたのは明らかだし、フラデー小隊長の下でみんなが協力し、お互いをカバーし合えば絶対に倒せるはずだ」

同期入隊であり、訓練所時代からの親友であるテスラを、ジュールは温かく励まし続けた。

「自信を持つんだ！ この小隊で一番強いのはお前なんだ。それはみんなも良く分かつるし、頼りにしている。だがもしもの時は俺がお前を守ってやる。大丈夫、心配するなテスラ。絶対に死なせやしない」

「ありがとう、ジュール……」

空元気だが、テスラは強がるように微笑んだ。

ジュールは装備したインカムから全員が無事配置に着いたことを確認し、フラデーの合図を待った。

（今まで使い物にならなかったインカムが、ここに来てようやく電波が改善されて正常に機能するようになった。俺たちに運も向いてきた。やってやるさ！）

ジュールは刀を強く握り、必死に自分自身に言い聞かせた。

今まさに命懸けの戦闘が始まるうとしている中で、弱気になつて
いるテスラを励ますために強気なことを言ったジュールだが、彼自
身もまた、その喉はカラカラに乾き、刀を握るその手の震えは収ま
ることを許さなかつた。

気持ちを落ち着かせるため、ジュールは水筒を取り出し水を一口
飲んだ。

欠々に取った水分が体中に染み渡るのを感じながら、深呼吸をし
た。

ジュールは、今にも折れそうな心に無理やり蓋を閉め強がる自分
とは対照的に、正直に自分の弱さをさらけ出すテスラを少しだけ羨
ましく思った。

水筒をテスラに手渡しながら、ゆっくりと入り口の中を覗き込み、
深手を負い蹲るヤツの存在を確認した。

額から止め処なく流れる汗を拭いながら、ファラデー小隊長の指
示を待った。

インカムからはヤツの様子を伺い、突入のタイミングを図るファ
ラデーの小さい呼吸だけが聞こえていた。

周囲に緊張が走る。

ジュールは再度ヤツを確認するため、廃墟の中を覗き込もうとし
た。

「カラン……」

後方より無機質な音が鳴った。

ジュールは振り向き、音の鳴った場所を見た。

そこには水筒を地面に落とし、血の気の引いた顔をしているテス
ラの姿があつた。

ジュールはすぐ様振り返り、廃墟の中を見た。

にヤツの姿は無かつた。

だがそこ

「全員後方に下がれ！」

フアラデー小隊長は小銃を抜きながら叫んだ。
そんなフアラデーを突然影が包んだ。

ゾツとした彼が振り向いたそこには、人の形はしているものの、3m程の巨体全てを黒毛で覆い【腐った豚】のような顔を持つヤツが、月明かりを背にして立っていた。

フアラデーはヤツに向け、小銃の引き金を引いた。

「ドサツ」

小銃の発射音とは明らかに異なる、重く鈍い音が足元から聞こえた。

小銃を構えたままのその右腕は、根元から千切れ地に落ちていた。

「おおおおお」

フアラデーは苦痛に顔を歪めながらも、残された左腕で刀を抜きヤツに切りかかった。

ヤツはその一撃をかわすと、そのままフアラデーの背後に素早く回り込んだ。

「やめろーっ」

ジュールがそう叫ぶのと同時に、ヤツは鋭い爪を持つその右腕をフアラデーの背中めがけて突き立てた。

一瞬時間が止まったかのように凍りついた。

月の光に照らされたフアラデー小隊長の体は、人の3倍はあろう太いやつの腕に貫かれ、奇妙に折れ曲がっていた。

「うああああああ」

尻餅をつきながら叫ぶテスラの悲鳴が、廃墟と化している工場に響き渡る。

混乱したジュールは何が起きたのか現状を把握することができず、ただフアラデーと、その体を背中から無造作に貫くヤツの姿を見ていることしかできなかった。

「……しよ、小隊っ。何をしている。今は作戦中だっ！ 目標を叩けっー！！」

ファラデーは薄れ行く意識の中で、血を吐きながら懸命に叫んだ。
「ジュールっ、お前はつくよ」ギヤヤオオオオオオっ！」

ファラデーの言葉を遮り、爆発音のような巨大な叫び声を上げた
ヤツは、躊躇なくその首をはねた。

凍りついていた時間が高速で動き出す。

「ヘルツ！ ガウス！ 戦闘隊形【ホーネット】正面からヤツを叩
き潰す！」

ヤツがファラデーの首を落としたことが、逆にジュールを冷静に
させた。

ジュールは無残にも切り落とされたファラデーの首を見ることで、
ヤツに対する憎しみが増大し、その感情が必ずヤツを倒すという戦
闘における集中力を高めることになった。

咄嗟に放ったジュールの指示に対し、即座に反応するヘルツとガ
ウス。

二人はジュールより歳下であり軍における階級も下であったが、
幾度の作戦を共にしてきたジュールの指示に対し、自然と体が反応
した。

ジュールは拳大の黄色い玉をヤツに向け投げつける。

さらに小銃を両手に素早く構えると、ヤツに向け鉛玉を浴びせた。
放たれた銃弾の一発が、先に投げられた黄色い玉に当たった。

玉は空中で弾け、激しい閃光が周囲を包んだ。

ヤツはたまらず目を押さえながら引き下がる。左足に深手を負っ
ている状態にもかかわらず、小隊長の体を盾にしながら、ヤツは右
足一本で10m後ろにある崩れかけた塀の影まで飛んだ。

そんなヤツに、抜刀したヘルツが猛然と走り込む。

ホーネットは敵に対し、複数人が一直線に連続攻撃を加える戦術
だ。

小隊一俊足のヘルツは、裏口から一気に廃墟を走り抜け、さらに
後方に飛んでいるヤツが地面に着地する前に切りかかった。

だがその瞬間、ヘルツは大きくはじけ飛んだ。

ヤツは右腕に刺さっていたままの小隊長の体を力任せにヘルツに向け投げ捨てたのだ。

小隊長の体と共に吹き飛ぶヘルツ。それでも吹き飛びながら小銃を1発放った。

銃弾はヤツの右足に当たり、体勢を崩した。

そこに二番手として小隊一怪力のガウスが駆け込み、ヤツの頭部を渾身の力で切りつけた。

ヤツは素早く反転し、その攻撃を背中を受けた。

「痛っ！　なんて硬い体してやがるっ」

ガウスの太刀は確実にヤツを捕らえたが、背中を覆う鉄のような硬い肉に押し返えされた。

振り向き様に繰り出すヤツの反撃の拳を紙一重でかわし、痺れを感じる自らの腕に構うことなく、ガウスは全体重を刀に乗せもう一太刀を上段から振り下ろした。

「獲った！」

勝利の笑みを浮かべたのもつかの間、ガウスの顔は一瞬で青冷める。

無情にも鎖骨の辺りで切りつけた刀は折れていた。

「グオオオオオオオっっ！」

ヤツは衝撃波のような叫び声をあげせ、ガウスに向け右拳を振り下ろした。

「ダーン！」

遠く後方から銃声が聞こえ、それと同時にやつは激しく体勢を崩した。

そこに三番手のジュールが刀を抜き飛びかかる。

ジュールの繰り出した突きは、ヤツの防御より早く、その左目を貫いた。

叫び声を上げ大きくのけ反りながらも、ヤツは左腕で強引にジュールをなぎ払おうとした。

額をかすめながらもヤツの腕をかわしたジュールは、橙色の玉を

取り出し、まだ鎖骨のあたりに刺さったままの折れたガウスの刀めがけて投げた。

玉は刀に当たって炸裂し、ヤツの全身に電撃を走らせた。

ジュールは動きの鈍ったヤツの足に刀を突き刺した。

刀は足の甲を貫き、地面深くまで達した。

「くたばれ！」

ヤツの喉元に小銃を向ける。だがヤツは刀の突き刺さった足に構うことなく、その足でジュールに蹴りを入れた。

「ぐはっ」

吹き飛ぶジュール。だがヤツの足元には拳大の赤色の玉が落ちていた。

ガウスは廃墟の壁に身を隠しながら、その落ちている赤色の玉めがけて小銃を發した。

「ズガアアアーン！」

爆発が起こり、辺りは噴煙で立ち込めた。

「これでダメなりや笑うしかないぜ」

ヤツがいたであろう場所を見ながらガウスは呟く。

「ガウス、上だ！」

ジュールの声に反応し、ガウスは咄嗟に身をひるがえした。

鋭い爪を立てた腕を振り下ろし、ヤツが頭上より舞い降りる。

間一髪攻撃を避けたガウスは、そのまま渾身の回し蹴りをヤツの脇腹に浴びせた。

蹴りの入ったその脇腹は、先ほどの爆発で大きく損傷していた。

鈍いうめき声を上げながら、ヤツは動きを止めた。

「うおおおおっ！」

勝負所と感じたガウスは、その損傷している脇腹めがけ、持てる力全てをつぎ込み鉄甲をはめた拳を連続で繰り出した。

6発目の打撃を受けたヤツの体は完全に【くの字】になった。

そこを見逃すガウスではない。とどめの一撃をヤツのアゴ目掛け

て放つ。

アゴを捕らえたガウスの拳は、そのまま上空に突き抜けた。

が、同時にガウスの体も上空に吹き飛んだ。

ヤツは自らのアゴが跳ね上げられると同時に、膝蹴りをガウスのアゴに浴びせていた。

お互いのアゴの砕ける鈍い音がすると共に、ガウスは空中で気を失い、そのまま地面に倒れ込んだ。

完全に足にきているヤツだったが、ふらつきながらも倒れているガウスに近づき左腕を振り上げた。

「ダーン！」

銃弾がヤツの左肩に命中し、そのまま崩れるように倒れた。

倒れながら銃弾の飛んできた方向を、ヤツは残された右目で睨んだ。視線の先には小隊一の狙撃の名手マイヤーの姿が小さく確認できた。

100mは離れているであろう、崩れかけた木造の塔の3階にある小さな窓からライフルの銃口がヤツを狙っている。

ファラデー小隊長はヤツを追い詰める途中、スナイパーであるマイヤーの特徴を生かすため、あらかじめ戦場の全域が見渡せるこの位置に彼を向かわせていた。

ただマイヤーは先の戦いの中で、ヤツから受けた攻撃により左目を失っていた。

引き金を引く度に気を失いそうになる激痛を顔面に感じ、その左目を覆う包帯は真っ赤に染まっていたが、それでも彼は冷静に狙いを定め、ためらうことなく引き金を引いた。

ライフルから放たれた強弾は、ふらつきながら立ち上がったヤツの左こめかみをかすめた。

「左目を失った影響か。弾が少し右にズれる」

マイヤーはヤツから目を離すことなく、冷静に状況を分析しながらライフルに弾を込めた。

「俺に気づいているヤツを、近距離からのサポート無しで死止める

のは不可能だ。どうする……」

常に平静を保ち、ペースを乱したことの無い彼であったが、この時ばかりは引き金にかける指先に今まで感じたことの無い緊張が走った。

だが突然、ヤツの視線がマイヤーから外れた。

「今だ！」

指先に力を込めようとしたと同時に、信じたくない状況が視界に入り、背中に冷たい汗が一気に溢れる。

ヤツの向けた視線の先には、腰が抜け、ただ呆然と涙を流しているテスラの姿があった。

「何やってんだ、あいつは」

マイヤーはヤツにライフルの照準を合わせながらも、窓から身を乗り出し懸命に叫んだ。

「テスラ立て！ 立って刀を抜くんだ！」

テスラは若いながらも剣の達人だ。その腕は厚さ5ミリの鉄板を平然と切り捨てる程に。

軍のトップである総指令官を父に持ち、幼い頃から剣を叩き込まれた。教えられた技は砂が水を吸ごとく容易に全てを吸収した。まさに天才だ。その上努力家でもあった。決して自分の腕に満足することはなく、日々思考を重ね、更なる極みを目指していた。

そんな国一番の呼び声高い剣の使い手であるテスラだが、同時に国一番の優しい心の持ち主でもあった。

訓練ではまさに神業的な刀さばきを披露していても、普段は虫をも殺せぬ性格だった。

目の前で現実に起きている血まみれの戦いに、彼の心は粉々に崩れていた。

叫ぶマイヤーの声はテスラに届かない。

脇腹を押さえ、足を引きずりながらもヤツは着実にテスラに近づいている。

「テスラ！頼むから立って刀を抜け！ テス……！」
マイヤーの目には、30センチはあろう廃墟の残骸を無造作につ
かみ、自分めがけて投げつけるヤツの姿が写った。
空気を切り裂く轟音を響かせ、投げられた残骸は一直線にマイヤ
ーに向かった。

向かってくる残骸にライフルの照準を即座に合わせ、弾丸を放つ
た。

弾丸は残骸に命中した。だが粉々になった残骸の破片は、それで
も彼に向かった。

「くそっ……」

窓から乗り出していた身を必死に塔の壁に隠す。直後に残骸の破
片が壁に降りそそぎ、激しい音を立てた。

木造の塔の壁には、無数の風穴が八チの巣のように開いた。

「ヘルツ、動けるか」

ジュールは脇腹を押さえ蹲るヘルツに言った。

「大丈夫だ。肋骨が何本かいったみたいだが問題ない」

そう応えるヘルツの顔色を見る限り、決して無事でないことが分
かる。

それでもジュールは指示を出した。

「ヤツの右に走り注意を引け。俺はヤツの死角から攻める。赤玉と
ガウスの攻撃でヤツの脇腹はボロボロだ。残りの赤玉はあと一つ。

こいつを確実にくらわせるしかもう、ヤツを倒す手段が無い」

「了解。けどジュールさん、あんたこそ大丈夫か。辛そうだぞ」

「お前より一本多くアバラが折れてるだけだ。これ以上ヤツがテス
ラに近づくと赤玉が使えない。行くぞ！」

同時に二人は走り出す。

ヘルツの走りにいつもの速さが無い。

折れた肋骨が肉に食い込み、地面を駆ることに激痛を感じる。

流れ出る鼻血で息ができず、みるみる顔が青冷める。

ヤツはそんなスピードのないヘルツに気づき、彼めがけて廃墟の破片を立て続けに投げつけた。

いくつもの豪速の破片がヘルツに向かう。

そんな追い詰められた極限の状態が、逆にヘルツの才能を開花させた。

集中力を高めた彼は、痛みを無視して一気にスピードを加速させ、襲い来る破片を稲妻のごとくかわした。

そして両手に短刀を握りながら廃墟の壁を利用して、ヤツめがけて大きくジャンプする。

ヤツは人間離れたスピードで向かってくるヘルツをなぎ払うように右腕を振り抜いた。

だがそこにヘルツの姿は無かった。

ヤツがその腕を振るよりも早く地面に着地し、滑り込むようにヤツの股間を潜り抜ける。

そしてヤツの右足にある銃弾を受けた傷跡をめがけ、短刀を突き刺した。

そのままヤツの右側に回りこみ、ヤツの鋭い視線が自分を追っているのを確認すると、わざとヤツの視線が自分から離れないよう、後方にジャンプした。

ヤツは足元にあった1m程の大きな廃墟の残骸を両手で持ち上げ、ヘルツに投げるべく振りかぶった。

その瞬間ヤツの死角である左後方から、左手に小銃を握るジュールが赤玉をヤツの脇腹めがけて投げた。

小銃を赤玉に向ける。

だが突然ジュールに廃墟の残骸が襲い掛かった。

ヘルツに向け残骸を振りかぶったヤツは、その重さに耐えられず、振りかぶった残骸はそのまま後方にいたジュールに向け飛んだ。

「ふざけるなっ」

ジュールは飛んでくる残骸を避けようと横に飛んだが、残骸はジュールの体をかすめ、地面に激突した。

残骸はジュールを軽くかすめただけであつたが、その体を吹き飛ばすには十分だつた。

ジュールは数m離れた壁まで飛ばされ、激しく体を打ちつけた。

「くそつたれが……」

左手にあつたはずの小銃も、どこかへ飛ばされていた。

ジュールの姿が吹き飛ぶと同時に、後方に飛んだヘルツは瞬時に向きを変え、ヤツに向け突進した。

一直線に駆けたヘルツは地面に落ちる前の赤玉をつかみ取り、そのまま止まらずヤツに向かつて駆けた。

自らに向け突き出されたヤツの腕をも駆け上がり、そのままの勢いでヤツの顔面にひざ蹴りを入れる。

さらに空中で身をひねり、ヤツの右足に突き刺さっていた短刀に飛び蹴りを入れた。

「ギャヤー！」

短刀は右足を貫通し、ヤツは悲鳴を上げた。

着地したヘルツはまるでつむじ風のように回転し、ヤツの損傷している脇腹に自らの拳を手首が埋まるまでねじ込んだ。そして腕を引き抜くと同時に、一歩後方へ大きくジャンプした。

ヘルツが拳をねじ込んだヤツのその脇腹には、赤玉がめり込んでいた。

ヘルツは手にしていた最後の短刀を、赤玉めがけて投げた。

が、そのまま静かに倒れた。

まさに疾風迅雷ともいえる華麗な連続攻撃は、大きなダメージをヤツに与えた。だがそれと引き換えにヘルツの足は完全に砕けていた。

バランスを崩しながら投げられた短刀は、無情にも赤玉を逸れヤツの腕に刺さつた。

「まだまだっ！」

そう気合を入れ直すヘルツだが、彼の足はその意に反し、動くこ

とを拒否した。

ヤツは腕に刺さった短刀を引き抜き、動けないヘルツに対し狙いを定め、ゆっくりと振りかぶった。

「やられる……」

そう感じて目をつぶるヘルツに、突然何かが覆いかぶさった。

「グサツ！」

短刀が肉に突き刺さる音が聞こえ、ヘルツは静かに目を開いた。

そこには自らを覆い隠すジュールの姿があり、その肩には短刀が深く突き刺さっていた。

「ジュールさん！」

「伏せていろっ」

ジュールは起き上がるうとするヘルツを強引に押さえつけた。次の瞬間、

「ダアーン！」

後方よりライフルの発射音がしたのと同時に、赤玉の爆発する轟音が鳴り響いき、周囲はその爆風で吹き飛んだ。

風穴の開いた木造の塔から、血まみれのマイヤーがライフルを構えていた。

大きなダメージを受けつつも、どうにか致命傷を免れたマイヤーは、今にも途切れそうな意識の中で、ぎりぎりまでチャンスを待ち、一瞬の隙を突くように赤玉に向け引き金を引いた。

そして赤玉が爆発したのを確認すると、彼は静かに気を失った。

「……ールさん。すっかりしろ、ジュールさん！」

気を失っていたジュールは、ヘルツの呼びかけで目を覚ましたが、爆風の衝撃で視界が揺れた。

どうにか五体そろってはいるが、爆発による衝撃と火傷によって全身から発せられる激痛は、意識を保つことに抵抗しながらも、意識を失うことを拒絶した。

「やっ、ヤツは……、ヤツはどうなった……」

力無くヘルツに問うジュールの視線の先には、粉塵ふんじんの舞う中にぼやけて見える仁王立ちにおうたちのヤツの影があった。

「やった……、やったのか……」

問いかけとも一人ごとともれぬ言葉を発しながら、ジュールは激痛を堪たえて上半身を起こし、影を見据みすえた。

その影にはまったく動く気配がなかった。

どれくらい時間が経ったのだろうか。

周囲を覆っていた爆発の粉塵ふんじんが消え、ついにヤツの顔を確認することができた。

その顔を見たジュールとヘルツは愕然がくぜんとした。

ヤツは生きていた。残されたその右目はまだ光を失っていないなかった。

「うおおおおお」

ジュールは肩に突き刺さっている短刀を引き抜きながら、強引に立ち上がるうとした。

傷口から噴き出した真っ赤な鮮血は、緑色の制服をみるみる赤黒く染め上げていった。

全身の骨がきしみ、息をするだけで死にそうなダメージを受けているその体で立ち上がったジュール。

その時、彼の体の中で何かが起きていた。

彼の右目は青白い光を放ち、聞こえる鼓動こどうは大地を揺るがすかのようであった。

そんなジュールをただ呆然ぼたんと見上げるヘルツは、まだ生きてはいないものの、動くことのできないヤツよりも、異様な威圧感いあつかんを放ちながら無理やり立ち上がった、血と埃ほじまみれのジュールのほうを恐ろしく感じた。

何より青白く光るジュールの右目は、見た者の魂を地獄の底に突き落とす【修羅しゆら】の物に思えた。

「ジュールさん、あんた……」

ヘルツの声を無視して、ついにジュールは走りだした。

邪魔な痛みを置き去りにして、ただヤツに向かい真っ直ぐに走る。そのままヤツに体当たりをすると、力なくその巨体は倒れた。ジュールはそのまま馬乗りになると、両手で短刀を握り締め、頭上に振り上げた。

「うおおあああ！」

短刀を振り下ろそうとした瞬間、ジュールとヤツの視線が交錯した。

ヤツのその眼差しからは、人に対する異常なまでの恨みや憎しみが感じられたが、それ以上にジュールには何とも言えない哀しみが感じられた。

そしてその哀しみが、なぜかジュールの心に深く突き刺ささり、短刀を振り下ろすことが出来なかった。

「どうしたジュールさん！ 早くヤツに止めをさすんだ！」

ヘルツの声が聞こえたが、ジュールは動けなかった。

「お前は、お前はなぜこんなことをする……」

ジュールはヤツに問いかけた。自分でもなぜそうしたのか分からない。ただ聞かずにはいられなかった。

そんなジュールの問いかけに、ヤツが静かに口を開いた。

「驚イタナ、キサマ。ツクヨミノ胤裔力……」

「……………」

唐突の出来事に、ジュールは戸惑う。

「今ハマダ【ツクヨミノカナデ】ヲ、感ジテイナイカ……」

「つく、よ、何？」

驚きと、意味の分からない言葉にジュールは混乱した。

ヤツは馬乗りになっているジュールの体を軽く押し退けた。

ゆっくりと立ち上がるヤツを、ジュールはただ呆然と見つめていた。

そんなジュールにヤツは言った。

「イズレ分カル。オ前ナラ、オ前ニナラ……」

「なっ、何を言ってるんだお前は」

流れる雲が月を隠し、辺りは影に包まれる。

ジュールの言葉にヤツは何も答えなかったが、ただジュールの目を少し見つめた。

その目から訴えかける何かをジュールは感じたが、この時はまだその意味が分からなかった。

ヤツはゆつくりと向きを変え、ボロボロになった体を引きずりながら影の中に消え去ろうとした。

ジュールはただ、静かに去り行くヤツを見ていることしか出来なかった。

「トスっ」

薄暗い影の静寂の中で奇妙な音が鳴り、ヤツの足が止まった。月を隠していた雲が、ゆつくりと晴れていく。

月明かりによって次第に浮かび上がるヤツの背中に、不気味に光る刀の切っ先が突き出ていた。

次の瞬間、その刀は音も無くヤツの体から引き抜かれ、横一線の閃光が走った。

ヤツの体は後方に倒れ、その反動でジュールの足元に何かが転がってきた。

「！」

そこには切り落とされたヤツの首が転がっていた。

開かれたその目はまだ、自らに起きた事実に気づいていないかのように見開いていたが、その目の光は完全に失われていた。

ジュールはヤツの体のほうに視線を戻した。

そこには刀を抜いて立っているテスラの姿があった。

ヤツの血を振り払った刀を、静かに鞘にしまうテスラにはどこか落ち着きがあり、恐怖で怯えるあの面影はどこにも見当たらなかった。

「テスラ、お前……」

ジュールはテスラの放つ、冷たい異様な何かを感じた。

だがそれと同時に別の違和感を感じた。

ふと首の無いヤツの体を見ると、全身の毛が抜けて行き、その大きな体がみるみる縮んでいくのが分かった。

「何だ、どうなっているんだ……」

気がつくと、ヤツの体は人の体になっていた。

そして切り落とされたヤツの首もまた、人のそれに変わっていた。体全身に寒気さむけを覚えながらジュールは力尽ちからつき、その場で気を失った。

夜空から降り注ぐ月の明かりは、ヤツの体から流れ出てできた血溜まりに反射し、終わりを告げた戦場を赤く染め上げていた。

冴返りのホーム

「ツクヨミノ胤裔いんえいヨ。イズレ分カル。オ前ナラ、オ前ニナラ……」
ヤツは静かに言い放ち、影の中に消えて行く。

「待て！ 待つてくれ」

ジュールは叫びながらその後を追った。

しかしヤツは離れて行くばかりで追いつけない。

「キン……」

甲高い鉄の音が鳴ると共に、横一線の閃光せんこうが走った。

ジュールは追い駆ける足を止めた。

そんな彼の足元に、ヤツの首が転がる。

切り落とされたその首は、みるみると人の首に変化していく。

ジュールは、どこか見覚えのある姿へと変化していくその首から目を離せずにいた。

恐怖で震えるジュール。

見覚えみおぼがあるはずだ。

そう、完全な人のものへと変化したその首は、ジュールの首であった。

「うあああああ」

飛び起きるジュール。息は荒く、全身に汗を掻かいていた。

「くそ、またこの夢か……」

あの月夜の戦いからすでに半年が経過していたが、ジュールは同じ夢を数え切れないほど繰り返して見ている。

すでに日は昇り、活気づく街の音が窓の外から聞こえる。

「めずらしく寝入ってしまったな。それにしても何故あの夢ばかり何度も見るんだ……」

顔を洗いながら、繰り返して見る夢を思い返した。

右目の奥に少し痛みを感じた。

あの夢を見た後は決まってる。目覚めの悪さから来るものなのだろうか。

軽めの朝食を取りながら、久しぶりの休日についてしか時を忘れ、あの日のことを考え込んでいた。

（ヤツとは一体何なんだ。ヤツの言った言葉の意味は何だ。俺にどんな関係があるんだ）

考えれば考えるほど意味が分からず、ただいたずらに時間だけが過ぎていった。

ジュールはあの日の事を、誰にも言えずにいた。

戦場で気を失い、気が付いたときには病院のベットの上だった。

体全身を包帯で包んだ彼は、先程と同じ夢を見て目が覚めた。

現実と夢が交錯し、何が本当で何が偽りか分からず頭の中が混乱したが、皮肉にも実の兄の様に慕っていたフアラデー小隊長の葬儀に参列することで、現実を把握することが出来た。

それでもジュールに対するヤツの言葉の意味や、ヤツを冷酷に始末したテスラの姿が脳裏に焼きついたまま離れなかった。

さらにあの戦いについて、不思議なことに軍から何の報告も要求されなかった。

確かに目標としていたヤツを倒し、その目的を達成したわけだが、その過程で多くの市民が犠牲となり、また作戦に従事していた三小隊が全滅し、残った隊も隊長を失い、生き残った隊士もほとんどが瀕死の重傷を負ったという、軍にとって甚大な被害を与えたこの戦闘に対し、何も聞かれないことが余計に彼の心に疑問を抱かせた。

ただ分かっていることは、自分同様に負傷を負ったヘルツ、ガウス、マイヤーの3人についても、何も聞かれていないということ。

そしてあの戦闘の後、初めに駆け付けた後続部隊が一般の部隊でなく、国王直属の近衛部隊 通称【コルベット】であり、テスラはそのコルベットと共に事後処理に携わったということだ。

（テスラは何か知っているはずだ）

ジュールはそう確信めいたものを感じていながらも、直接テスラ

に問うことができなかつた。

なぜなら、入院中のジュールを見舞いに来たテスラはいつもの優しい彼であり、自分の不外無さを責め続けた。

「ごめん、ジュール」

そう言つて謝るテスラの穢れを感じさせない瞳を見ると、ジュールは何も言えなくなつた。

だがテスラが優しい言葉を掛けるほどに、ジュールは戸惑い、複雑な気持ちになつた。

「トントン」

扉をノックする音が聞こえた。

「今日俺が休日なのは、誰にも言つてないはずだが……」

どことなく警戒心が強くなっているジュールの気持ちとは裏腹に、呑気な声が聞こえた。

「ジュールさ〜ん、ご在宅ですか〜」

やっぱ居ないか

久しぶりに聞いたその声が、ジュールに少しだけ元気を与えた。

「ヘルツか、久しぶりだな」

扉を開けるとそこには、半年振りに会うヘルツの姿があつた。

「おつ、ラッキー。ジュールさん居てくれたよ」

「足のほうはもう大丈夫みたいだな。散らかつてるが、まあ入れよ」

「いや、ここでいいつす。あんま時間無いんで。挨拶に來ただけですから」

「どうかしたのか？」

数ヶ月に及ぶ過酷なりハビリを乗り越えたヘルツの足は、完全に回復していた。

そんな彼は職務に復帰することになり、新たな配属先が決まつたことをジュールに伝えるに來たのだ。

「とりあえず南部の街【ラングレン】にある軍支部にこれから列車で向かいます。出発時間に余裕が無いんで」

「そうか、ずいぶん急だな。せつかくだから駅まで送るよ。今日は非番だしな」

手早く身支度を済ませたジュールは、ヘルツと共に駅へ向かった。

昨日まで温かい日が続いていたが、今日に限って今にも雪が降つて来そうな、どんよりと曇った空をしていた。

真冬の寒さが身に凍みだが、それでも久しぶりに話すヘルツとの会話にジュールは居心地の良さを感じた。

「南部のラングレンなら、だいぶ暖かいだろうな」

「そうでしょうね。この寒さは古傷に堪えるし、ちようど良かったのかも」

「それにしても、あれ程の重傷がよく半年で回復したな」

「へっ、地獄のようなりハビリでしたよ。二度と御免ですね。でもそれを言うならジュールさん、あんたこそタフですね。俺から見ればあなたの体も相当酷く感じたけど、十日もしないで退院しちゃうんだからなあ」

「……………」
ヘルツの言葉を聞いて、ジュールは歩みを鈍らせた。

ジュールの体は自分でも信じられない程の早さで回復した。

折れた肋骨に全身の火傷。さらに肩に深く突き刺さった短刀の傷も、目を疑うほどの早さで治っていった。

その異常とも言える回復力の高さもまた、彼を不安にさせる原因の一つになっていた。

「すみません、無神経な事を言ってしまった。気にしてたんですね

……………」

「いや、いいんだ。悪いのは俺のほうだ。最近の俺は頭も無いのに考え過ぎだな」

旅立つヘルツに要らぬ気遣いをさせてしまったことに、ジュールは申し訳なく感じた。

「お〜い！」

突然二人を呼ぶ声がした。

振り向くと、青い制服姿のガウスが息を切らせながら走り寄って

来た。

「おうガウス、久しぶりだな」

「ハアハア、ジュールさん、お久しぶりです。ハアハア……、ヘルツも一緒にちょうど良かった」

息を整えつつ、ガウスは言った。

「ヘルツ、お前薄情うすけいだな。今日が出発の日だって、なんで教えないんだ」

「別にこれが一生の別れじゃないんだ。たいした事じゃないだろ」

「バカ野郎！ 入隊以来ずっと一緒にやってきた仲じゃないか。城で会ったテスラさんに言われて知ったんだぞ。とりあえず駅に向かえば追いつくかと思って急いで来たんだ」

「スマン、悪かったよガウス。城の警備隊に配属されたばかりで何かと忙しいいそがと思ってな。なにより別れ際にお前の阿呆面あほうづら見ると、気分良くこの街から旅立てない気がしたんだ」

「なんだと！」

「まあ二人とも、その辺でいいだろ。これからは別々の道を進むことになるが、お前たちは共に死線をくぐり抜けてきた仲間なんだ。別れのときくらいお互い素直になれよ」

三人は共に経験した軍での思い出話をしながら、駅につくまでの短い時間を楽しんだ。

慌あわただしく人々が行きかう中、中央に大きな女神像が立つ駅前ロータリーに着いたところでガウスが言った。

「俺はここでお別れだ。勤務中に無断で抜けて来てるし、ジュールさんも居ることだしな。ここからタクシーで城に戻るよ。元気でな、ヘルツ」

「ああ、忙しいのに見送りに来てくれてすまなかったな。お前こそ体に気を付けろよ、妻子がいるお前の身に何かあれば、お前一人の問題じゃ済まないんだからな」

「実は女房の腹ん中にもう一人いるんだ。家族ってもんは良いもんだけ。お前も南国でいい嫁見つけれよ！」

「心配しなくても、とびつきりの美人と一緒にになってやるぜ。後で腰抜かすなよ」

「そう言えばジュールさん。春にはあんたも所帯持ちだな。うちのと違って綺麗な奥さんで羨ましいぜ」

「煽てるなよガウス」

ジュールは少し顔を赤らめながら二人に言った。

「お前の時ほどじゃないが、ささやかだけど式は上げるつもりだ。

その時は当然二人も呼ぶつもりだから来てくれよ」

「楽しみだな。じゃあ次に再会するのは春か。案外早いな」

「そう思うと、なんだかお別れムードもしらけてくるな。じゃあな、ヘルツ。」

簡単な別れの言葉を口にし、ガウスはその場を去っていった。

アダムズ王国。

驚異的な科学立国として知られるこの国は、隣接する国々よりも遙かに豊かであり、また活気に満ち溢れていた。

【首都ルヴェリエ】の中心には、現国王であるアルベルト王の住む強大なアダムズ城がそびえ立ち、その城下町にあるアダムズ中央駅は国最大の駅であり、全ての列車の始発駅として溢れんばかりの人数で賑わっていた。

「フアラデー小隊もバラバラになっちゃいましたね。俺、結構気に入ってたんだけどなあ」

ホームに着いたヘルツは、少しの間見納めになるアダムズ城を遠目に眺めながら、思い出に浸るように言った。

小隊長であるフアラデーが殉職したことで、その後の隊士たちの回復に時間差があったこともあり、小隊は完全に解散していた。

家族を持つガウスは、もとより希望していた比較的勤務条件が容易なアダムズ城の警備隊に配属された。

マイヤーは彼自身が小隊長となり、部隊を指揮する立場として東部の街へ向かった。

テスラは国王直属近衛部隊コルベットに配属。そしてジュールは軍総指令直轄戦闘部隊【トランザム】に配属されていた。

「それにしてもジュールさんとテスラさんは凄いな！ その若さでそれぞれ軍の最高部隊に配属されたんだから。何だか俺も鼻高いつすよ。フアラデー隊長もきつと喜んでるはずです」

その言葉にジュールは軽く微笑んだ。しかし心の中では反対に、この配属にも疑問を感じていた。

コルベットとトランザム。王国の双壁を成す最強の二部隊ではあるが、その実態は犬猿の仲であり、いつ衝突してもおかしくないほどの険悪な状況に置かれていた。

これはアルベルト国王とテスラの実父である総司令アイザックの関係悪化によるものとされ、さらに皇太子であるトーマス王子がアイザック総司令と親密な関係であることが、状況をさらに複雑にさせていた。

何よりジュールは、テスラ自身が父の指揮するトランザムでなく、あいたい相対するコルベットに所属したことが気になって仕方なかった。

（テスラとアイザック総司令の関係は良好なはず。だがあの戦い以来、何かは分からないがテスラは変だ……）

ホームにはすでに、白い蒸気をもうもうと上げ、出発の準備が整っている列車があった。

「ジュールさん」

考え込むジュールの顔を心配そうに見つめながら、ヘルツは言った。

「ジュールさんは早々に退院しちましたし、その後すぐにトランザムに配属されて全然機会がなくて……」

雑音でざわめき立つホームで、別れ際に突然切り出したヘルツの言葉に、ジュールは耳を傾けた。

「このままずっと自分の胸にしまっておこうと思った。とても現実とは思えなかった。何度も夢であってほしいと願った。でもあの出来事は真実で……」

ヘルツはぐつと唇を噛み締めた。

彼もまたジュールと同じく、あの日から胸にしまい続け、今まで誰にも言えずにいた事があった。

「ジュールさん、やっぱりあんただけには話しておきたいことがあるんです」

そして一呼吸おき、覚悟を決めたようにヘルツは話し出した。

「ヤツとの戦いが終わった後、俺もジュールさんと同じように力尽き、気を失ってしまった。でもあんたが意識を無くした後で、コルベットが到着するまでの短い時間に起きた事を、俺ははっきりと覚えてる」

ざわめく駅の騒音にかき消されることなく、ジュールの耳にはヘルツの話す言葉だけが鮮明に聞こえた。

あの戦場でテスラがヤツの首を跳ね、その姿が人のものに変化するのを確認したのとほぼ同時に、ジュールは気を失った。

それを見ていたヘルツは声すら出すことも出来ず、終わりを告げた戦場をただ呆然と見ていた。

そんな彼の体も、激闘の影響で全身に激痛が走り、意識が途切れそうになった。

だがその時、月明かりに照らされたジュールの体は、一瞬銀色の輝きを放った。

「何だ……」

ヘルツは激痛に耐えながらも、目を凝らしてジュールの体を見た。赤玉の爆風からヘルツを庇った時の衝撃で、ジュールの背中には焼けただれ、ボロボロのはずであった。

そして短刀を引き抜いた肩の傷からは、とめどなく赤い血が流れ出ていたはずだった。

しかしヘルツが見たジュールの背中には傷跡一つ無く、また肩から流れ出る血は完全に止まっていた。

「目の錯覚か……いや、そんなはずは。うっ……」

悲鳴を上げる体に、ヘルツは一瞬気を失いそうになる。

必死に痛みを堪えながら目を開けると、いつの間にかジュールの横にテスラが立っていた。

ジュールを見つめるテスラの眼差しから、どことなく違和感を感じたヘルツ。

それでもこの後、テスラは瀕死のジュールを介抱するものと、ヘルツは疑わなかった。

「えっ……」

テスラは静かに刀を鞘から抜いた。

そしてその刀を逆手に持ち直すと、自らの顔の高さに構えた。

刀の向け先は間違いなくジュールであり、その刀は月明かりを浴びて怪しく輝いていた。

「なっ、何をしているんだ、テスラさん！」

必死に止めようと叫ぶヘルツ。

その声を無視するかのように、テスラは静かに言った。

「ごめんね、ジュール」

「やめるんだ、テスラさん！ やめろっ！！」

ヘルツの叫ぶ制止の言葉は意味を成さず、テスラは刀をジュールに向け振り下ろす。

だがその瞬間、

「ズガガガン」

突如として発生した猛烈な突き上げられる衝撃によって、大地は大きく揺れた。

体勢を崩したテスラの刀は軌道を逸れ、ジュールの体を外し地面に突き刺さった。

揺れが収まり、ジュールの無事を確認すると、ヘルツはほっと胸を撫で下ろした。

しかし次の瞬間、ヘルツは今まで感じたことのない、すさまじい殺気を全身で感じた。

恐る恐る振り返り、殺気を感じる場所に視線を向けた。

廃工場の屋根の上に、月を背にした【ヤツ】の姿があった。

現れたヤツは全身を銀色に輝く毛で覆う、精悍な【狼の顔】をした姿であり、その背中には巨大な翼を持っていた。そして大地から刀を引き抜くテスラを睨みつけるその右目は、地獄の炎のように真っ赤に輝いていた。

そんなヤツからヘルツは目が離せなかった。どこか気品漂う、銀色に輝くその美しい姿に見とれていた。

気づくと不思議なことに、纏わり付くようなおぞましい殺気は消え、代わりに深い愛情から生まれる安らぎのような温かい感覚を感じていた。

ヤツはジュールを見ていた。その眼差しはとても優しいものだった。そしてどこか哀しいものでもあった。

「ダダダダダッ！」

後方から激しいマシンガンの銃声が鳴り響き、数え切れない銃弾がヤツに向け飛んだ。

ヤツは巨大な翼を広げ、悠然と夜空に飛び立ち銃弾をかわした。

「現れたぞ【ラヴオアジエ】だっ！ 逃がすな！」

黒い制服に身を包んだ九人の兵士が現れた。

そう、彼らは国王直属の近衛部隊コルベットの隊士たちだった。

アダムズ王国の誇る最新の装備を武装した彼らは、人間とは思えないスピードで走りラヴオアジエと呼ぶヤツを追った。

強力なナパーム弾やビーム砲が発射されたが、ヤツは容易にそれらをかわした。

ヤツは攻撃を仕掛けるコルベットをあざ笑うかのように、上空を優雅に旋回していたが、突然向きを変え急降下をはじめた。

ヤツの目指す先にはテスラがいた。

凄まじいスピードで向かってくるヤツに対し、テスラは冷静に居合いの体勢で待ち構える。

「ガキンッ」

二人が交錯すると同時に、鈍い鉄の音が鳴った。

テスラの刀は粉々に砕かれ、その体は数メートル吹き飛ばされた。ヤツはそのままの勢いで上空に舞い上がるうとした。が、巨大な翼の一枚が切り落とされていた。

飛立つことの出来ないヤツは大地を転がり、廃工場の壁をなぎ倒しながらようやくその体を止めた。

粉々に舞い散った刀の破片が月明かりに反射し、周囲を幻想的^{げんそう}な風景に仕立て上げていた。

ヘルツは、目の前で起きている現実とは思えない出来事に言葉を失った。

「チャンスだ！ 戦闘隊形【アントリオン】 チームは弾が尽きるまでラヴォアジエを打ち続ける！ チームは【プラズマ・トマホーク】の準備を即座^{そくざ}に整えろ」

隊長らしき人物の指示が飛び、コルベットは一糸^{いし}乱れることなく作戦を遂行する。

前後左右から、翼の切り裂かれたラヴォアジエと呼ぶヤツを取り囲み、ガトリング砲による一斉射撃が始まった。

轟音^{こうおん}を響かせ、数万の弾丸がヤツに向け打ち続けられる。

その攻撃に対し、ヤツは自身の周囲に目に見えない球体状のバリアを形成して身を守った。

「あれが【迦具土^{かぐつち}】の力か。だがその力も永久なものではない。打ち続けるんだ！」

鳴り止まぬ発射音で襲い掛かる数多の強弾は、着実にヤツを追い詰めていく。

ヤツの張る迦具土^{かぐつち}と呼ばれるバリアは、徐々にではあるが確実に小さくなっていった。

しかし撃ち続けるガトリング砲にも変化が表れ始める。

銃身は次第に赤々と色づき、白煙を上げた。

そして四方向からの攻撃の内、弾が尽きたことと銃が破損したことで、二方向の攻撃が停止した。その時、

「プラズマ・トマホーク、放てっ！」

ガトリング砲での攻撃の間、ヤツの四方に人の身丈ほどの金属の支柱が大地に突き立てられていた。

隊長の攻撃命令が下ると、ヤツを中心に支柱同士が電極となり、凄まじい高圧放電が発せられた。

「グギヤアアア」

迦具土は消え去り、もろに電撃を受け絶叫するラヴォアジエ。

それでもヤツは電撃に耐えながら、何処どこからともなく小さな白い玉を取り出した。

「何をするつもりか分からんが、そのまま放電を続ける！」

コルベットの隊長は攻撃の続行を指示し、ヤツの仕草を注意深く監視しながらビーム砲を構えた。

ヤツは電撃を受け続けながらも、赤い目を鋭く光らせると、取り出したその白い玉を勢いよく地面に押しつけた。

「ビキーン」

鼓膜こまくを突き破るような高周波の衝撃が、ヤツを取り囲む者全員の脳に直接響き、同時にプラズマ・トマホークからの放電が止まった。突然の衝撃で一瞬気が遠のいたコルベットの隊士たちは、膝をつき攻撃の手を止めた。

その中でコルベットの隊長だけは、必死に衝撃に耐え、ヤツに向けて構えていたビーム砲の引き金を引いた。

だがどう言う分けかビーム砲は機能せず、発射されなかった。

「ヤツめ、電子兵器の制御を狂わせたのか。ならば！」

隊長は背中に背負っていた長刀を抜き放ち、ヤツに向けて瞬足に駆け出した。

「対ラヴォアジエ用に開発された大刀【十拳封神剣】が一つ、モデル【天乃尾刃張】、その威力いりよくその体で思い知れ！」

猛然もっげんとヤツに詰め寄る隊長。構えた長刀は不気味に紫色の光を放つ。

「グオオオオっ！」

向かってくるコルベットの隊長をその赤い目で睨みながら、ヤツは低い唸りうな声を上げた。

もう一步というところまで隊長が近づいた瞬間、突如ヤツの体を業火が包んだ。

炎に構わず、隊長は長刀天乃尾刃張をヤツめがけて振り抜いた。真つ二つに切り裂かれる炎。

だがそこにヤツの姿は無かった。

「どこだ！」

隊長が頭上を見上げると、炎の塊が天高く舞い上がっていた。夜空に浮かんだ炎の塊は、そのまま空中で形を変え、再び翼の蘇えったラヴオアジエの姿になった。

「くそつ、【火之夜藝】の力が……」

そう呟くと、隊長は力なく倒れ込んだ。

空中に留まりながらそれを確認したラヴオアジエは、視線を他に移した。

視線の先には【ジュール】の姿があった。

名残惜しそうにその姿を見つめるラヴオアジエ。

「ダダダダダッ」

そこに息を吹き返したコルベットの隊士たちが、マシンガンで攻撃を仕掛けてきた。

ヤツは攻撃をかわしつつ、蘇えった翼を羽ばたかせ、そのまま夜空の彼方へ飛んでいった。

現実離れた目の前の出来事に、ヘルツは全身の痛みも忘れ、ただヤツが消え去った空を見続けていた。

そしていつの間にか、眠るように意識を失っていた。

ヘルツの話の聞き、ジュールは息を飲んだ。

「信じられないかもしれないが、今話したことは本当です。痛みで何度も気を失いそうにたっただけ、あの時現れたヤツの姿は、今でも鮮明に思い出すことができる」

そう言うヘルツの目が、嘘でないことを物語っている。

ヘルツの話の聞いたジュールは、完全に言葉を失っていた。

そして右目の奥に感じている痛みが、ズキズキと強さを増している。

「でもねジュールさん。今日あなたに会って一つ分かったことがある……」

ヘルツは黙り込むジュールに続けた。

「正直あの日以来、あなたに会うのが恐かった。あのラヴォアジエと呼ばれるヤツが、あなたを見る目は特別なものに思えた。それに俺たちと戦ったヤツが最後にジュールさんに言ったあの言葉……。何だかジュールさんが俺たちと違ったものになってしまっくんじゃないか、そう思えて仕方なかった。ジュールさんの体、ボロボロでも動ける状態じゃなかった。それなのに起き上がって、走り出して。動けないでいるヤツよりも、敵であるはずのヤツよりも、あの時のジュールさんはとても恐しく思えて。それにあの光る右目は……」

ヘルツは、胸に詰まっていた思いを吐き出すように、一気に話した。

「だから出発の日の今日、最後にあなたの顔を一目見て、あなたと話をして、あの日感じたことを、今もまだ感じてしまうのか確かめなかった。あなたが本当に変わってしまったのか確かめたかった。そして分かった」

ヘルツはにっこりと微笑んだ。

「ジュールさん。あなたは何も変わっていない。やっぱりあなたは俺の知っているジュールさんその人だ。少し体は頑丈がんじょうになったかもしれないが、あなたから伝わってくる感じは何もかわっていない。」

俺は頭悪いけど、ガキの頃から不思議と勘かんを外したことがない」

汽笛きてきが鳴り、間もなく列車が発車することが、流れてくるアナウンスで告げられる。

「困ったことがあれば俺に声かけろって、いつもジュールさん言ってましたよね。でもねジュールさん。あなたの方こそ、何か気になることがあったら、自分一人で抱え込まずに、俺たちに相談してく

ださい。みんなあなたの事を心配しています。東部に向かう前、俺の見舞いに来たマイヤーさんはジュールさんの事をすごく気にかけていました。口には出さないけど、ガウスだって同じです。あいつは顔を見ればすぐに分かる。それに、さっき俺とガウスに言いましたよね。俺たちは共に死線をくぐり抜けて来た仲間だって」

「ヘルツ、お前……」

「ヤツが言った言葉の意味は分からない。それにラヴォアジエのあの眼差しの意味することも知らない。だけどジュールさんはジュールさんだ。たとえあなたが何者であろうと、俺は、俺たちはあなたの味方だ。戦場ではいつも先頭に立ち、誰よりも危険に身をさらして、俺たちを守ってきた。危なっかしくて見てられなかったけど、追いかけるジュールさんの背中では心強く、どんなに苦しい時でも、進むべき道を示してくれた」

ジュールから目を離すことなく、ヘルツは話続けた。

「それにジュールさん、あなたはその身を犠牲にして俺を守ってくれた。俺にとってあなたは命の恩人だ。それは紛れも無い真実だし、俺のあなたに対する信頼と感謝の気持ちは揺ぎ無いものです。あなたは俺にとって誰よりも輝いて見える、憧れの存在だ。それはこの先もずっと変わりはないでしょう」

ヘルツは今にも溢れ出そうな涙を、その瞳に浮かべていた。

「苦しみに耐え続け、無理やり前に踏み出すばかりじゃ、この先とても正気を保ってなんかいられやしない。だからこそ、悩みがあるなら相談して欲しい。自分一人で抱え込まないで欲しい。あなたも【人間】なんだ。この先も変わらず、ずっと俺の目標であってほしい。だから……」

声を詰まらせたヘルツの目からは、大粒の涙がこぼれ落ちていた。

「ありがとう、ヘルツ」

ジュールは、心の底から感謝の言葉を述べた。

ヘルツが必死に打ち明けたその思いは、ジュールの心に十分過ぎるほど沁み渡った。

「お前こそ、ラングレンに行って何かあれば、すぐ俺に相談しろよ」
ジュールは微笑み、ヘルツに優しく言った。

「その笑顔が見れて、安心です」
出発を知らせる汽笛が鳴り、ヘルツは列車に乗り込んだ。

「もつともつと腕を磨いて、いつか俺もトランザムに行きます。それまで待つてください」

「ああ、楽しみに待つてるよ。お前の強さなら、すぐに来れるさ！」
再度汽笛が鳴り、列車はゆっくりと走り出す。

列車の窓を開け、ヘルツは最後に言った。

「お元気で、また春に会いましょう。それと……」
少しためらったが、ヘルツは続けた。

「テストさんには気をつけてください。あの人からは、よく分からないけど違和感を感じます。表面上は以前と変わらないけど、あの日ジュールさんに刀を向けたこと、そしてコルベットに入ったこと……」

言葉に詰まるヘルツの思いに、ジュールは優しくも力強く答えた。
「分かった。大丈夫、心配するな。確かにテストのことは俺も気懸かりだが、あいつも俺たちの仲間だ。あいつが何を考えているのかは分からないが、近い内にちゃんと話してみる。何かあればお前たちと相談するさ」

列車は走るスピードを徐々に上げ、小走りで走るジュールとヘルツの距離をあけた。

「ありがとうヘルツ、全て話してくれて。元気でな、また会おう」
「ジュールさんこそ、お元気で！ 結婚式、楽しみにしています！」
ヘルツは走る列車の窓から身を乗り出し、敬礼をした。
それに応えるよう、立ち止まったジュールも敬礼をした。

いつの間にか、右目の痛みが引いていることにジュールは気付いていた。

どんよりとした曇り空の下、粉雪が舞い降り始めていた。

走り去る列車を見えなくなるまで眺め、友との別れに一抹の寂しさを感じていたが、それでも何故かジュールの気持ちは少し晴れた気分だった。

ヘルツから聞いた話を少し思い返した。

ラヴォアジエと呼ばれるヤツが、自分に対してなぜ優しくも哀しい眼差しを向けたのか。その理由はまったく分からなかったが、なぜかジュールは安らぎを感じた。

「けっこう降って来たな。この感じだと、だいぶ積もりそうだな」
ジュールは次第に強まる雪を見ながら、帰り路につこうとした。その時、

「ジュール。ジュールじゃないか」

人ごみの消えたホームで、一人の老人がジュールに声をかけた。

「あっ、グラム博士」

真っ白い髭をたくわえた小柄なその老人は、微笑みながら、ゆっくりとジュールに近づいて来た。

霞色の神話

ジュールは不意に現れた老人に少し戸惑ったが、その表情は親しみて綻んでいた。

「お久しぶりです【グラム博士】、元気そうですねによりです。でも昼間からこんな人目の付く場所に出歩いてちやまずいですよ。もっと自分の立場を弁えて下さい」

「いやいや、ラングレンから古い馴染みが来ていてな。そいつを見送っていたところじゃよ。それに穴倉に籠ってばかりじゃ息苦しくうて敵わんよ。そう言うお前こそ、こんな所でどうしたんじゃ」

「ヘルツがラングレンに転勤になったんで、それを見送りに来てたんです」

「ほう、あの駆けつこの早い小僧がのう。仕事とは言え、付き合いが長かっただけに残念じゃな。」

「ええ。でもあいつなら何処に行っても一人でやっていけるはずですよ」

「そうじゃな。ところでジュール、お前今日は暇か？　久しぶりの再会じゃ、暇なら少し付き合わんか」

「別に構いませんが、俺一応軍の人間なんで。誰かにお尋ね者の博士と一緒にいるの見られると、あんまり具合良くないから、どこか人目の付かない場所へ行きましょう」

二人は足早にタクシー乗り場へ向かったが、あいにく行列ができていた。

行列の最後尾にならびながら、ロータリーの中央に立つ女神像を見て博士が言った。

「来年の今頃は【ルーゼニア教創設千年の記念祭】で首都ルヴェエリ工は更に賑やかになるじゃろうのう」

「そうですね。俺はルーゼニア教の信者じゃないけど、千年祭は楽しみにしてますよ」

「お前は どうしてルーゼニア教に入らないんじや？ アダムズ王国唯一無二の教えじゃぞ。国を支える軍人なら尚更入ったほうがよかるうに」

「博士に言われたくないですよ。育ての親の博士自身が入ってないのに、どうして俺が入るんですか。それに何だか神様に縋るっていうのが、どうも生に合わないって言うか。最終的には自分自身の力で乗り越えるしかないんじゃないかって思うし、そうするとなかなか信じる気にもならないですよ」

「ほう、大した考えじゃな。じゃがわしはなジュール、あの女神ヒュパティアのなんとも言えない切ない表情を見ると、その教えはどうあれ、ルーゼニア教に入っても良いかと思えてしまえてのう」

「でもそれはあの女神像の顔がそう見えるだけでしょ。それだけで入会するっていうのは馬鹿げてますよ」

「お前はルーゼニア教を発祥させた女神ヒュパティアが、人間に対しなぜその教えを広めたか知っているのか」

「教えを広めた理由は知りませんが、愛・勤・節の【心の三分】くらいは知ってますよ。確かにこの教えは良いことだと思いますが、これだけ科学が発達した世界で、いつまでも神様を崇めるのはどうしたもんかと」

「科学者のわしがルーゼニア教を肯定し、軍人のお前が否定するのもおかしなものじゃな。じゃがなジュール、これだけ科学が進歩しても、まだまだ解き明かすことのできない事が、世に数多くあるのも事実じゃて」

話の途中ではあったが、順番が来たためタクシーに乗り込んだ。

博士が行き先を説明している間、ジュールはタクシーの中から、女神像の顔を眺めた。

ルーゼニア教を創設したとされる女神ヒュパティアは、アダムズ王国に伝わる神話にて【天地開闢の三柱】と呼ばれ、世界を造った三神の内の一であり、その中でも人間を含む、全ての動植物を生み出した【生産の神】として崇められていた。そんな女神像の眼差

しは確かに切なく、またどことなく哀しく感じられた。

そして何故だかその感覚が、ヘルツから聞いたラヴォアジエと呼ばれるヤツが、自分に対して向けた眼差しと重なって思えた。

（確かにヤツの正体もよくわかつていないし、世の中は科学で解明できていない事のほうが、まだまだ多いのかもしれない。ヘルツの外したこのない勘だって何の根拠も無いし、それに俺の体も……）

ジュールは女神像を見つめながら、月夜の戦いで短刀が刺さった肩を強く握った。

「そう言えばジュール、お前もつすぐ結婚式じゃな。いつの間にかお前も大人になったのう」

「あつ、そうですね。ぜひ博士にも参加してほしいですけど、お尋ね者の博士を呼ぶわけにはどうも……」

グラム博士から突然振られたの結婚の話に、ジュールは少し困惑した。

「気にするな。お前たちが幸せなら、わしはそれだけでええ。幼き頃よりお前達二人を見てきたわしじゃ。今更何も心配しておらんし、式など出ても退屈だけじゃ。結婚式など、神よりも非科学的じゃしな」

「ハハツ、愛情は古来より科学で解き明かせない、一番の謎ですね」
他愛のない話をする二人を乗せたタクシーは、徐々に降り方を強める雪の中を、目的地に向けて走った。

しばらくするとタクシーは、首都ルヴェリエの中でも最も疲弊しているスラム街に到着した。

高度な文化を構築するアダムズ王国は、大多数の国民が高い水準の生活を営んでいる。しかし、その流れから取り残された一部の民達は、こうしたスラムで貧しさを共有し、お互いの傷を舐め合うように生活をしていた。

街の安全を守るはずの警察部隊の目が届きづらいこともあり、非

常に治安が悪く、また街全体が不衛生であり、様々な病が蔓延する
など、一般の市民からは遠く距離を置かれていた。

だがそれが逆に、犯罪者や訳有りな者が身を隠すには最適な場所
でもあった。

今にも崩れそうなるビルが密集する場所で、グラム博士はタクシー
を止めるよう指示した。

タクシーを降りた二人は、そのビルの中の一つに入った。

薄暗く湿った空気の充満するビルの中は、何か腐ったような異
臭が漂い、とても人が住む場所とは考えられなかった。ただ、博士
の後について歩くジュールの足取りはとても軽やかだった。

なぜなら荒みきったこの街は、ジュールがまだ幼き頃、グラム博
士と共に過ごした場所でもあった。

「この胸クソ悪い感じ、懐かしいな。十年ぶりだけど、この街はホ
ントに何も変わってない。でも博士、いつこの街に戻ったんです？」
「半年ほど前じゃな。ちとフアラデーに用事があったのう。じゃが
あいつは死んでしまっただけから……」

グラム博士は言葉に詰まり、少し無言になった。

階段で四階まで上がり、か弱い蛍光灯の明かりが照らす廊下を少
し歩くと、全面錆だらけのドアの前で止まった。

博士はそのドアのカギを開けると、ジュールに言った。

「さあ、入れ」

錆だらけのドアは見た目からの予想に反し、軽い力で開いた。

部屋に入るとそこは、狭いながらも小さな研究室になっていた。

「大した設備は整ってないんじゃが、今はここがわしにとっての城
じゃな」

ジュールはふと壁に貼ってある写真を見た。

少し古い写真だったが、そこにはグラム博士とフアラデー、そし
てジュールの知らない二人の男性が写っていた。

二人の内の一人は浅黒い肌をした健康的な顔立ちであり、もう一
人は対照的に青白く痩せこけた顔をしていた。

そしてジュールは後者の男性をどこかで見たような気がしたが思
い出せなかった。

「ほれ、ジュール」

グラム博士は呼びかけたジュールに向け、親指の先ほどの大きさ
をした小さな赤い玉を投げ渡した。

「何です、これ？ また訳の分からないもの作ったんですか」

「何を言うちよる、お前十分世話になつとるじゃる。そりや見たま
まの爆弾じゃよ。大きさは今までの十分の一じゃが、威力は倍じゃ。
飛躍的に軽量化とコンパクト化を成し遂げたのと同時に、性能まで
上げたのじゃ」

「凄い、これ凄いですよ博士！」

「説明はまだ途中じゃて。こんなことで驚いてたら最後までもたん
ぞ」

ニコニコしながら博士は続けた。

「赤・青・黄・緑・橙・灰の全ての玉で同様の変化をとげちよる。
まあお前の言うちよった科学の進歩とゆうやつじゃ。さらにそれだ
けじゃない、おまけも付けとる」

「何ですか」

「今までの玉は直接その玉を銃で撃つなどして、衝撃を加えて初め
て発動したものじゃ。これは戦闘状況においては使用者や部隊にリ
スクが有り過ぎる。そこでじゃ」

博士は黄色の玉を取出し、一瞬その玉を壁に擦りつけた。

「3 , 2 , 1 ……」

そう言うってから博士は黄玉を放り投げた。投げられた玉は空中で
凄まじい閃光を放った。

「急に何するんですか、眩しいですよ！」

まさかと思いき前にも目を閉じたジュールであったが、それでも強
い光を感じ、たまらず叫んだ。

「まあまあ、そう目くじら立てるな。聞くより見るが易しじゃから
のう。見ての通り、時限タイマー機能を追加したのじゃ」

目を丸くするジュールに対し、グラム博士は得意げに言った。

「手に持つ赤玉を見てみるのじゃ。玉に一周細い線が描いてあるじやろ。この線の方向に玉を壁に擦りつけるなどして摩擦熱を加えるのじゃ。熱を加えたら3秒後に発動じゃ。もちろん今まで通り、直接衝撃を加えることで発動させることもできるのじやが、対象が小さくなったから狙うのが大変じゃろうて」

グラム博士は机の引き出しを開け、一冊のノートを取出した。

「このノートに作り方が書いてある。これを【ヘルムホルツ】に渡すのじゃ」

「ヘルムホルツにですか。あいつは軍人でありながら【アダムズ王立協会】の会員ですよ、いいんですか？」

「今やこの国の科学者で、わしが信頼できるのはあやつだけじゃ。

あやつはお前と同じでこのスラムの出じやろ」

「確かにヘルムホルツは良いやつだし、ガキの頃に俺とマイヤーと一緒にこの腐った街で育った仲です。でも王立協会は、自らの発明品が戦争の道具になることを嫌った博士を追放し、さらに犯罪者扱いまでしている組織ですよ。その一員であるあいつに、こんな重要なものを渡していいんですか」

「お前はわしのことを誤解しちよる。わしはただ逃げ出しただけじやよ。アダムズ王立協会はこの国の科学者団体の頂点であるのと同じ時に、国の行政にも大いに影響をもっておる。協会での立場が上がれば上がるほど、自分の意思とは関係無く、そんな政治活動にまで首を突っ込まなければならんのじゃ。わしは政など真つ平ごめんじや。じゃが辞めようにもわしは協会のことを深く知り過ぎてしまった。そんなわしを協会が黙って見送るわけ無いじやろ。わしは怖くなくて逃げ出したのじゃ。それにのう」

博士は何かを話そうとしたが、気難しい表情で話題を逸らした。

「これ以上話すとお前の軍人としての立場が悪くなるかも知れん。まあどんな組織にも裏の部分はあるものじゃ。知らなくて良いもの

は、知らぬほうぐええ」

煮え切らない表情をするジュールに、博士は言った。

「そう心配せんでも大丈夫じゃ。仮にこのノートが他人の手に渡ったとしても、大したことはない。所詮しよせんわしの作ったこれらの玉は時代遅れの産物じゃ。現在この世界で最高の頭脳を持つ科学者【ラジアン博士】が次々に開発している電子兵器の前では、だれも見向きせんじゃろ」

「でも博士の作った武器があつたからこそ、俺たちはヤツを倒すことができたんですよ」

「じゃがその戦いでファラデーは死んだのじゃろ。あいつもまた、このスラムの者じゃ。残念じゃよ……」

グラム博士は壁に貼つてある写真を哀しげに見つめた。写真に写っている四人の顔は、とても楽しそうだった。

ファラデーはジュールよりも一回り年上だったが、同じスラム出身ということ、軍では特にかわいがられた。

厳しさの中にも愛情があり、ファラデーは多くの部下から慕したわれていた。戦闘技術も非常に高かった彼は、コルベットやランザムから幾度いくどとなく配属を打診たしんされていたが、なぜかそれを受け入れようとしなかった。

常に戦場で若い隊士の先頭に立ち、的確に任務を遂行すいこうする彼のことをジュールは尊敬そんけいし、兄の様に慕したっていた。

そんな彼がああ夜、無残に首を切り落とされ絶命けつめいしたことを、ジュールはまだ少し信じられずにいた。

ジュールは徐ゆるに博士に尋ねた。

「博士、【ヤツ】とは一体何者なんですか。博士なら何か知ってるんじゃないですか？」

ジュールからじつと見つめられた博士は、少し困惑こんわくした表情を浮かべ黙もくっていたが、その訴えかける視線の力に屈くつしたのか、ゆっくりと話し始めた。

「お前も知つとるようにヤツとは人外の者の総称じゃ。わしら人間はその想像を超え、かつ危害の対象となるものについて、忌み嫌う性質を持つておる。特にヤツの化け物じみた容姿が人々にとつて、恐怖の対象としか写らず、何のためにヤツが存在するのか考えもせんで、その存在自体を軽蔑視するために【ヤツ】と呼んだ」

「でもヤツは、多くの人の命を残酷に奪っている」

「ヤツが初めてこの国で目撃されたのは、二十年以上前のことじゃ。現在までに十体ほどのヤツが確認されとるが、人の命まで奪つたのは一番初めに出現したヤツと、お前たちが倒したヤツの二体だけじゃ」

「……」

「それ以外のヤツは、まったくと言っていいほど人に対して何の危害も加えていない。いやむしろ人を助けた記録も残っておるくらいじゃ。全てのヤツが消息を絶っている今となつては、本当か否か定かではないがのう」

「確かに今回現れたヤツも、初めは人に対して危害を加えることはなかった。ただ今までと異なる点は、同時期に分かつているだけでも三体のヤツが現れています。一度に複数のヤツが現れたことは過去においても一度もありません。三体のヤツがそれぞれなを目的としているのかは不明ですが、二番目に現れたヤツが初めに人を傷付けた。それを機に他のヤツも人に対し危害を加えるようになった。そして我々にヤツの抹殺命令が下つたのです」

「二番目に現れたヤツが危害を加えたのは、協会の科学者じゃつたと聞くが本当か？」

「ええ、本当です。ただあまり上層部の方ではなかったらしく、名前までは覚えていません」

「所説によれば、ヤツの知能は成人の人間と変わらないということじゃ。闇雲に人を襲うとは考え辛いのじゃが」

「我々軍人は上の指示に従うだけで、ヤツの気持ちまでは考えません」

その言葉とは裏腹に、ジュールはヤツの最後に口にしたあの言葉の意味を考えていた。

今回三体のヤツが同時期に出現したわけだが、初めの一体以外は出現後早々に姿を消した。だがその一体だけは首都ルヴェリエの中心に残り人を襲っていた。

「ヤツについてはまだまだ謎が多い。それはヤツとの接触が極めて少ないことも要因の一つじゃ。じゃがお前達はヤツを倒した。これは過去においても初めてのことじゃ。その死骸を調べれば何か解るかも知れんがのう」

「でもヤツは死んだ後、人の……」

ジュールは言葉を飲み込んだ。

首を落とされ、息絶えたヤツの姿が人のものへと変化したことが、ジュール自身今だ半信半疑だったため、その事を博士に伝えることに躊躇した。

「まあ良い。いずれ事の真相は誰かが解き明かしてくれるじやろうて。ただ一つ言えることは、人は身勝手な生き物じゃということじや。人知を超える存在が目の前に現れたとして、それが女神ヒュパティアのような美しい姿をしておれば、神と崇めるじやる。逆にヤツのような醜い姿をしておれば、その容姿から悪魔の化身であるかのごとく、理由も無しに排除の対象にしてしまい、事の真相を見極めようとしなない。寂しいものじゃ」

ジュールは博士の言った言葉にうなずいた。ヤツの行動には何か理由があつたはずだ。あの夜のヤツの眼差しからは、訴えかける何かが伝わってきたし、その理由が知りたかった。そしてその理由を知れば、最後に口にしたヤツの言葉の意味が分かる気がした。

そんなジュールはふと、ヤツのこと優しく想い語るグラム博士を不思議に感じた。

「でも博士。どうして博士はヤツのことを、そんな風に想うのですか」

博士は何かを思い出すように言った。

「……そうじゃな。わしは自分が小さい頃に読んだアダムズ王国の神話が好きでな。これはルーゼニア教の教えにも語られている事なのじゃが、わしの心の深層にこの話が根付いているからかも知れん」

神話やルーゼニア教において、天地開闢の三柱とは至高の神と呼ばれる【絶対神ソクラテス】と、その弟で征服や統治の神と呼ばれる【想起神プレイトン】そして生産の神の【女神ヒュパティア】の三人を示唆する。

絶対神ソクラテスと女神ヒュパティアは夫婦であり、天界で暮らしていた。

その時大地はまだ現在ののような型を留めていなかったが、想起神プレイトンはその大地に暮らしていた。

ある日プレイトンはこの大地を今後どうしていくか相談するため、ソクラテスとヒュパティアを呼び寄せた。

ところがプレイトンは、大地に降り立ったソクラテスの首を絞めて殺してしまう。プレイトンは兄の妻であるヒュパティアに対し、密かに思いを募らせていた。そして兄を殺し、自分の妻となるようヒュパティアに言った。

しかしヒュパティアはプレイトンのそんな想いに応じるはずもなく、ソクラテスの亡骸を胸に泣いた。

七日間泣き続け、流れ出たヒュパティアの涙は大地を覆い、やがてそれは海になった。

ヒュパティアの涙は枯れ果てたが、最後に左目から三粒、右目から五粒の七色に輝く涙が零れ落ちた。

その涙がソクラテスの亡骸の上に落ちると、涙から新しい神々が生まれた。

左目から流れ落ちた涙はそれぞれ、銀の鷲、黒い獅子、紫の竜の姿をした神となり【燦貴神】と呼ばれた。

右目から流れ落ちた涙は、狼の頭を持つ修羅、鴉の羽を持つ夜叉、白面金毛九尾の狐、一角尾蛇の虎、そして星の弓を持つ熊の姿をし

た神となり【護貴神】と呼ばれた。

燦貴神は攻撃神となり、プレイトンと激しい戦いになった。
護貴神は守護神として女神を守った。

プレイトンは想いが届かないことに嘆いたが、燦貴神に対抗するため、三人の巨人の姿の神を生み出した。

百年にも及び戦いは続いたが、決着は着かなかった。

このままでは、いつまでたっても戦いが終わらないことを感じたヒュパティアは、ついに自らプレイトンに立ち向かう決意をした。

そんな女神は別れを告げるように、亡骸であるソクラテスの鼻に優しく口づけをした。

すると突然ソクラテスの体が眩いまでの光を放ち、巨大な剣へと姿を変えた。

その剣は大神剣【素盞王】と呼ばれ、ヒュパティアはその大神剣でプレイトンを倒した。

しかしプレイトンが死んだことで、三人の巨人が暴走を始めた。燦貴神は巨神の暴走を食い止めるため、必死の攻撃を加えた。

やがて燦貴神は力の弱った巨神を食い殺し、百年ぶりに、大地に平静を取り戻すことができた。

だが今度は巨神を食べた燦貴神が暴走を始める。燦貴神は食い殺したはずの巨神に、心と体を支配されていたのだ。

ヒュパティアは護貴神にその身を守らせつつ、天に向け祈りを捧げた。

すると天高く輝く太陽より、三本の【光の矢】が放たれ、暴走する燦貴神を打ち抜いた。

光の矢に体を打ち抜かれた燦貴神は【鏡】の形にその姿を変え、神の力は封印された。

ヒュパティアは身を守らせた護貴神についても、いつ暴走するか分からないと、天に向け祈りを捧げた。

すると今度は夜空に輝く月より、五本の光の矢が降り注ぎ、護貴神の体を打ち抜いた。

護貴神もまた、その姿を【勾玉】まがたまの形に変え、神の力は封印された。

その後燦貴神の封印された鏡は【天照の鏡】あまてらすと呼ばれ、護貴神の封印された勾玉は【月読の勾玉】つきよみと呼ばれた。

ヒュパティアは大地にある最も高い山の頂に神殿を建て、そこに天照の鏡と月読の勾玉、それに大神剣素盞王すさのおうを祀まつった。

やがてヒュパティアの流した涙からできた海より、人間を含む様々な生命が誕生する。

ヒュパティアは人間に対し、自ら体験した苦しみ、悲しみ、憎しみの感情を抑制よくせいするために、愛・勤・節の【心の三分】の教えを唱となえた。

『人の心には愛情・勤勉・節制があり、その調和を図ることで苦しみ、悲しみ、憎しみの感情を抑えることができる。自分や他人に対し愛情を育はぐみ、自分に課せられた仕事に一生懸命取り組み、決して他人を侵害しんがいしてはなりません。そうして皆が調和を図れば、世界の平和は永遠のものとなるでしょう』

この教えの流れを組むのがルーゼニア教であり、この国の礎いしとなっていた。

「神話にもあるように、女神ヒュパティアの流した涙から生まれた神々は、人よりも獣けものの姿に近いのじゃ。それ故ゆえわしはヤツのことを考えると、人外の悪魔というよりも、本当は人間よりも【神聖な血筋の持ち主】なんじゃないかと思えてしまふのじゃよ」

「最後に神々の力を封印した鏡と勾玉、それと大神剣はどうなったんですか」

「神殿に雷が落ち飛び散ったとか、盗賊によって持ち出されたなど所説あるんじゃが、世界の各地にバラバラになったことは共通しておる。じゃがこれもお伽噺おはなしの範囲であって、実物を見たものはおらん」

「そうですか……」

「どうした、何か気になることでもあったのか？」

ジュールは神々の力が封印されたとされる、神器のことが気になっていた。特に月読の勾玉のことが。

ヤツが口にした【ツクヨミノ胤裔】いんえいという言葉と、神話に出てくる【月読の勾玉】という神器。そして博士の言った【神聖な血筋の持ち主】という言葉。ジュールはそれらが繋がっているような気がしてならなかった。

「グラム博士、【ツクヨミノカナデ】ってご存知ですか？」

無意識にジュールはヤツが最後に口にした言葉を博士に訪ねた。

博士は少し驚きの表情を見せつつジュールに言った。

「ほう、お前も少しは神話を知っているようじゃのう。それらの神器には続きがあつてな。【ツクヨミノカナデ】とは【月読の奏】のことで、月読の勾玉に封印した神の力を解き放つものじゃとされておる。言い伝えでは勾玉と同じ大きさの胎児たいじを宿す妊婦が、満月の光を浴び光輝く月読の勾玉を見ると、その胎児に神の力が宿ると言われておる。月読の奏がどういったものかは不明じゃが、神の力が宿った者がそれを【感じる】と、その者は封印されし、神の力を自由に使うことができるということじゃ」

「【感じる】ってというのはどうゆうことですか？」

「それは分からね。神話にもルーゼニアの教えにも【感じる】という表現しか伝えられていないからのう」

「結局は伝説の中の話というわけか……」

少しは何か手がかりが得られるかと期待したジュールであったが、曖昧あいまいさの残る後味あとあじの悪さを感じた。

それでも彼は神話の中に、自分が無意識の内に追い求めている【何か】があるのではないかと思えた。

「ずいぶんと辛気臭ひくちかしい話になってしまったのう。話を戻そう。わしがお前をこの研究室に呼んだのは、新しい玉の作り方を記したノートをヘルムホルツに手渡すよう頼むこと。そしてもう一つ」

グラム博士は厳重なセキュリティが施ほどこされた、金庫のような鋼鉄

の箱のカギを開け、その中から見たことの無い色をした玉を取りだした。

「わしが現在開発しておる四つの玉じゃ。二つはすでに完成しておる。一つは発動させるのに条件付きじゃがほぼ完成じゃ。残り一つはあと少しといったところかのう」

グラム博士は、取り出した四種類の玉をジュールに手渡した。

手渡された玉は、白い玉が七つ、桃色と銀色の玉がそれぞれ五つ、そして金色の玉が一つであった。

「それらの玉はお前が持つておれ、ジュール。そして時が来るまで大切に閉まっておくのじゃ」

そう言うなり博士は玉を保管するためのカバンを、半ば無理やりジュールに押し付けた。

「そんな大切な玉なら、ご自分で持つていけばいいじゃないですか。何か責任を押し付けられてるみたいで嫌ですよ、俺」

「わしは時機にルヴェリエを離れる。この研究室も処分し、わしの痕跡こんせきもあとかたなく消すつもりじゃ。じゃがせつかく作ったその玉を捨てるわけにもいかんし、わしが持つていても、いつ協会の者や警察部隊に連行されるかわからんからのう。最近まは協会の目を撒くのがしんどくてな。なるべく身軽でいたいんじゃよ」

「ですが博士……」

ジュールは少し嫌な予感がした。何故だかもう、博士とは二度と会えない様に思えた。

「ジュールよ」

博士は困惑するジュールの気持ちを察したのか、優しく語りだした。

「わしら科学者は万物において、何かと理屈りくつをつけたがり、また根拠きよを求めるものじゃ。では何故そうするのか。それは安定を図るためなのじゃよ。現実世界における全ての物理現象は、何かしらの理論や法則の元に成り立っておる。その理論ないし法則を導き出すことが、言い方を変えると安定を図ることになるのじゃ。そして安定

を図ると安心する。この安心感を達成感と感じる者も多いが、それは同一であって、むしろ科学者はその安心感がたまらんのじゃよ。一度その感覚を味わうと、また別の安心感を求め、まだ安定していない不安定要素を探す。そうして次々と新しい理論を導き出し、それが科学の進歩として今に至^{いた}つておるのじゃ。じゃがこれは決して科学者だけに言えることではなく、一般の者たちにも言えることじや。この世の中にはまだまだ原因不明な事や、想像を絶する現象が多々あり、そういった意味不明な、言わゆる不安定要素に人々は不安や恐怖を感じておる。常に不安や恐怖と隣り合わせの環境の中で生きて行くために、人々は無意識に安定を図^まつておる。その一例が宗教じや。人々は原因不明な不安定要素を無理やり安定させるため、逆に【神】という不確定要素を祀^{まつ}り上げバランスを図^まつておる。それが心の安定に繋^{つな}がり、そこから感じる安心感が、信仰^{しんこう}という形になつておる」

「……………」

「わしも若い頃は、その安心感という麻薬に取りつかれてのう。誰も解き明かせなんだ難問^{われさき}があれば、我先^{われさき}にその問いにのめり込み、その解を導き出しては安心感と達成感を味わつておつた。そして難しい問題を解明すればするほど、周囲からも称賛^{せうさん}され、心地よい気持ちになつた。歳が変わらん【世界最高の天才】と謳^{うた}われるラジアン博士に負けんと、周りが見えぬほど夢中になつて研究に没頭^{ぼつとう}した。そしていつしか周囲はわしのことを【世界最高の鬼才^{きさい}】と呼んでおつた。有頂天^{うちやうてん}じゃつたよ。グラム博士ならどんな物もすぐに現実の物にしてしまつと煽^{おた}てられ、様々な開発を行つた。わしの作つた物は世の為になると疑わず、望まれた物を次々に形にした。じゃが気付けば、わしの生み出した発明品は、その用途^{もち}を応用され、殺人兵器として軍の武器に姿を変えていた。

わしの発明した物が、多くの人の命を奪つていく。いつしかそう思うようになり、わしは何も考えられなくなつてしまった。人といふのは冷たい生き物でな、そうなると周囲の人間はわしにまったく

目を向けなくなりおった。わしは自分の存在価値を見失い、また人間不信にも陥り、自暴自棄になった。人の心はどう足掻いても、解き明かすことはできず、意味の分からない不安と焦りで、完全に自分を見失っておった。そして死を決意した」

「博士……」

「じゃがわしは小心者でな。自殺するのが怖く、誰かに殺めてほし
と思ひ、気が付くとこのスラムに来ておった。今日のように雪の降
つておる寒い日でのう。長い時間スラム中を歩いたのじゃが、寒さ
のせいか人っ子一人おらんでのう。歩くのにも疲れ、どこかで休み
そのまま凍死するのも良いかと思つておったが、どこからともなく
赤子の泣く声が聞こえてのう。気が付けば、その泣き声のするほう
に足が動いておった。小汚いドブ川に掛かる橋の下にその赤子は捨
てられておつてのう。寒空の下、死ぬこと以外未来のないこの赤子
が不憫に思え、一思いに楽にしようと、わしは懐から持ち合わせて
おった短刀を取り出した。今思えば、なんてことをするんだと冷静
に考えられるが、その時のわしは完全にどうかしておつてな。じゃ
が赤子に向け短刀を振り上げると、何とその赤子は微笑みよつてな
まさか自分を殺そうとしている相手に対し、その赤子は感謝してい
る様にわしには思えた。わしはそんな赤子に、短刀を突き付けるこ
とができなかつた。孤独感に苛まれ無力な自分が嫌になり、自分勝
手に命を絶とうとしたわしに、わしよりも遙かに孤独で無力なその
赤子の微笑みは、なぜか安心感を抱かせてくれた。そしてその安心
感は、今までわしが感じたどの安心感よりも心地よく、温かいもの
じゃつた。そうになると、今まで死のうとしていたことが急にバカバ
カしく思えてのう。思い直し、わしは生きることにした。そして
この先生きる糧としてこの赤子を、わしの子として育てようと決め
た。そう、その赤子が【ジュール】お前じゃ」

グラム博士は今まで黙っていた、ジュールを育てた理由を初めて
語った。

ジュールは博士のことを良き父であり、また偉大な科学者だと思

っていた。そして博士は誰よりも強い人だと思っていた。そんな博士が意外な弱さをさらけ出し、かつ大きな挫折させつをしていたことを知り、少し驚いた。

「もちろん独身だったわしは、子育てなど経験が無い。何をしても苦勞が絶えなかった。科学者のわしは、お前が泣き止まないとなぜ泣くのかどうしてもその原因を探ってしまった。じゃが赤子に理屈はないのじゃ。時間はかかってしまつたが、共に泣き、共に笑う。そうしてただ親の愛情を注ぎ続ければよいのじゃと、わしは気付いた。温かく見守りながら、子供の成長を身近に感じる。そんな感覚が、科学の追及ついきゅうしかして来なかつたわしを、ずいぶん人間らしく変えてくれた。全てを科学の力で解き明かすことができる、疑わなかつたわしの考えが、いかにちつぽけなものだということをお前は教えてくれたのじゃ。全てを型に収めることは、とても安定しているように思えるが、実は無理やり全てを型に収めるほうゆがが歪ゆがんでいることであり、実際そんなことは不可能なのじゃ。大切なことは、全てをありのまま受け入れることなのじゃよ」

優しく語る博士の言葉の一つ一つから、ジュールは自分に対する博士の愛情の深さを感じ取った。

そしてジュール自身も、博士に対する敬意と感謝の気持ちを正直に伝えた。

「グラム博士が俺の本当の父親でないことは、ずいぶん前から知っています。それでも俺にとって、あなたはこの世で最も尊敬する人間であり、唯一の【家族】です。俺をここまで育ててくれて、本当に感謝してます」

「嬉しいことを言うてくれるのう。ただ一つだけ、お前に母親の愛情を教えるあげることができず、すまんと思うとる。どうもわしは奥手でな。おなごが苦手なのう」

「俺には博士のような【父親】がいてくれただけで、それだけで十分過ぎます。気にしないでください」

「歳を取ると涙もろくなつていかん。次は涙を堪こたえる薬でも発明し

ようかのう」

ヘルツに続き、全てを話してくれたグラム博士に、ジュールは心から感謝した。

そして自分が思っている以上に、周囲の人から大切にされていることを改めて感じ取った。

「ところでジュール。ファラデーはお前に何か言うちよったか？」

何か思い出したのか、グラム博士は写真の中のファラデーの顔を見て、ジュールに問うた。

「隊長が俺にですか？ 個人的には特に何も言われてませんが……」
ジュールはふと、あの日ファラデーが小隊に出した指示について思い出した。

「そう言えば、あの日のファラデー隊長の読みは冴さえていました。ヤツがルヴェリエの中心街に突然現れ、俺たちにその追撃命令ついききが出たとき、他の小隊はいつも通り電子兵器を主体に装備を整えていました。俺たちの隊だけは隊長の指示で、刀や火薬の銃、それに博士の開発した玉型兵器を装備して現場に向かいました。さらに隊長の指示の下、俺たちの隊は密集隊形みっしゅうたいけいで作戦にあたりました。ヤツとの戦闘が始まると、どういうわけか電子兵器が機能せず、またインカムなどの無線も使用できなくなり、それらを主体としていた俺たち以外の小隊は、次々とヤツにやられていきました。逆に俺たちは密集隊形であったことで、ヤツからの攻撃をそれぞれが援護えんごすることができ、また装備していた武器も問題なく使えたことで、最終的にヤツを倒すことができました。どうしてあの日に限って、ファラデー隊長がそうした指示を出したのかは分かりませんが、そのおかげで俺たちは今、こうして生きられているのかもしれない」

「本当に、お前個人に何か言ったりはしなかったのじゃな」

先程までの穏やかな表情とは違い、鋭い口調とがたずで尋ねる博士に、ジュールは少し圧倒された。

「……ヤツが隊長の体をその太い腕うでで貫いた時、俺に何か言ったよ

うな気もしますが、あの時は気が動転してよく覚えていないんです。その後すぐ隊長は首を撥ねられて……。何か気になることでも？」

「いや、何もなければ良いのじゃて」

ジュールは博士からは何か、自分に隠している事があるのではと感じたが、彼はあえてそれを聞かなかった。

「そろそろ帰ります。ルヴェリエを発つ前に、もう一度会えますよね」

「そうじゃな。ここを離れると、しばらく会えんからのう。その前に都合をつけて、連絡するから待っておれ。それにしても駅で偶然にも今日、お前に会えたことを嬉しく思うぞ。この奇跡とも言つべき偶然もまた、科学の理の外側じゃな」

「俺も思いがけなく博士に会えたことを嬉しく思います。ノートの内容は確実に届けますので心配いらなです。それじゃ、連絡お待ちしています。寒いですから、体調に気を付けて下さいよ。もう歳なんだから」

「お前も元気でな、ジュール。【アメリカ】にもよろしく伝えてくれよ」

ビルを出ると、そこは一面の雪景色へと変わっていた。

何となくジュールは後ろめたさを感じ、博士の研究室があるビルの四階辺りを振り返って見た。

「考え過ぎか……」

ジュールは振り返り、まだ誰も歩いていない雪の積もった道に、足跡を残しながら家路についた。

ジュールから博士のいるビルが見えなくなった頃、そのビルを取り囲む複数の黒い影が現れた。

黒い影は、全員揃いの黒い制服を身に着けていた。

そしてその中には、テストラの姿も含まれていた。

余寒の王国

満開の梅の花が人々に春の到来を感じさせていたが、この日は冷たい雨が朝からしとしとと降っていた。

ジュールは、アダムズ城内にあるトランザムの待機所で、他の隊士と共にトレーニングを行っていた。

アダムズ軍総指令直轄戦闘部隊トランザムは、ジュールを含む総勢十名の小所帯ではあったが、コルベットと同じく、全員が軍全体より選抜された、選りすぐりの精鋭集団であった。

ただコルベットが貴族や上流階級出身の隊士によって組織されているのに対し、トランザムはその身分は問わず、ただ腕のみが選抜の対象であった。

それゆえに気性が荒く、人間性や協調性に問題のある隊士が多かったため、軍の中でも浮いた存在になっていた。

それでも、その凄まじいまでの【強さ】がその他全てを補い、存在意義を確固たるものにしていった。

「どうした新入り、女の事でも考えてるのかっ」

「べつ、まだまだです。もう一手お願いします！」

口の中に溢れた血を吐き捨てながら、ジュールは木刀を持ち直し、先輩隊士に向かった。

末席のジュールは、何かと先輩隊士より嫌がらせの様な訓練を受けていたが、持ち前のタフさと負けん気の強さで、それらの訓練を耐え抜き、日増しにたくましさや強さを強めて行った。

そして強引に底上げされる強さを、彼自身も感じ取っていた。いや、強くならねば自分の居場所が無くなることを彼は自覚しており、夢中で剣を振った。

そんな日々成長を遂げるジュールを、いつしか他の隊士たちも一目置くようになっていた。

何度叩きのめされても弱音一つ吐かずに立ち向かうジュールの姿

を、少し離れた所から見つめる二人がいた。

一人は軍のトップであり、テスラの父である【アイザック総司令】。そしてもう一人が烏合の衆であるトランザムをまとめ上げる隊長であり、アダムズ軍最強の男と呼ばれる【英雄ドルトン】であった。そんなドルトンの名は諸国に響き渡り、その鬼神のごとき強さは生きながらに伝説になっていくほどであった。

「ジュールのヤツ、少し見ない間にまた腕を上げたようだな。なあドルトン」

「いや、まだまだです。ジュールを見て半年経ちますが、未だあいつの伸び代が見えません。故にあいつにはもつと上を目指してもらわねば困りますし、このまま精進し経験を積みあげれば、あいつはいつか俺を超える存在になれるでしょう」

「ほう、英雄ドルトンにそこまで言わせるか。まあ訓練所時代からあやつに気を留めていた、私の目に狂いはなかったとも言えるがな。ハハッ」

意気揚々と笑いながら、アイザック総司令はその場を後にした。

「ガキン！」

ジュールは試合っていた先輩隊士の木刀を跳ね上げ、その喉元に切っ先を向けた。

「まっ、参ったぜジュール。今日はこの辺で終いにしようや……」

「ハアハア、ありがとうございました。ハア……」

ジュールは、着実に強くなっている自分に高揚感を感じた。荒く苦しい呼吸でさえ、なぜか心地よく感じた。

それを見ていたドルトンは、自らの予想以上のスピード成長するジュールに目を細めながら、頼もしさを覚えた。

「ジュール、顔を洗ったら俺のところに来い。科学部隊のところに行く」

「ハッ、ハイ。すぐに行きます」

ジュールは配属以来ほとんど口を訊いたことの無いドルトンに、緊張しながらも名前を呼ばれた嬉しさに気持ちが高ぶった。

王国の英雄であるドルトンはジュールにとって雲の上の存在であり、そんな彼に声をかけられた事は、ジュールにとってこの上ない至福しふくであった。

科学部隊に向かう途中、緊張しながら付き従うジュールに対し、ドルトンは優しく語りかけた。

「お前とこうして話すのは初めてだな。お前を監督する立場として、もっと早く話しをしたかったが忙しくてな。なかなか時間がとれず、済まなかったな」

「そつ、そんな。とんでもありません。俺なんかに気を使わないで下さい」

「ハハハッ。そう緊張するな。隊長が部下と話するのは当然のことだ。お前のことは以前よりアラデーから聞いていてな。不器用だが、根性の座った生きの良い若いのがいると、前々から推薦されていたのさ」

「アラデー隊長から……ですか」

「俺とあいつは、同じスラム街出身でな。子供の頃は、二人でよく無茶をしたものさ。俺のほうが少し歳上だが、あいつはいつも俺に負けんと背伸びばかりしていた」

「ドルトン隊長も、あの街で育ったのですか」

「お前も同郷どうきょうらしいな。不思議なことにお前を見ると、懐かしい感じがするよ。」

「……胸クソ悪い感じですか」

「ハハッ、別に変な意味じゃない。お前は俺の昔にそっくりなんだ。あの腐った街を抜け出し、何の後ろ盾もなく、その身一つで駆け上がろうと必死にもがく。そんな姿が昔の俺と重なって見えるのだらう」

「買い被りかぶ過ぎです。俺はとても英雄になれるような器うつじゃありません」

「英雄になるかどうかは、お前が決めることじゃない。歴史のちが後に決めることだ。それにお前こそ自分を過少かしょうに思い過ぎだ。変に期待

をかけるわけじゃないが、俺とファラデーが気に留めた男だ。もつと自分に自信を持って」

「そんな……」

根拠はどうあれ、尊敬する二人より認められていたことに、ジュールは顔を赤らめながら嬉しさを噛みしめた。

科学部隊は軍で使用する武器や防具、また様々な道具を開発・改良している部隊である。

そのトップには、世界最高の天才と呼ばれるラジアン博士がおり、軍の組織でありながら、王立協会とも深い関係にあった。

科学部隊の中でも、さらに最新鋭さいしんえいの兵器開発を行っている上層部隊を通称「カプリス」と呼び、最高頭脳を結集したカプリスは、次々と強力な武器を世に送り出していった。

当然軍の最強部隊であるトランザムで使用する武具は、全てカプリスで開発されたものであり、科学部隊に到着した二人は、迷うことなくカプリスの研究所に向かった。

「お前は特注していたバトルスーツを取りに行け。俺は別件でラジアン博士のもとに行く。後で俺もそっちに行くからそれまで待つてろ」

ドルトンと別れたジュールは、勝手の分からない研究所をうろついていた。

場所を聞くにも白衣をまとった研究者たちが、それぞれ自分の世界に没頭ぼつとうするよう研究に勤いそしんでいたため、何となくジュールは声をかけづらかった。本当にここは軍なのかと疑いたくなるほど、異次元の世界に足を踏み入れた感覚だった。

そんなジュールの肩を、ポンポンと誰かが叩いた。

振り向くとそこには、ガウスよりも巨漢きょかんで武骨ぶこつな、一見とても科学者に見えない男が立っていた。

「なにウロウロしてんだ、ジュール。スーツ取りに来たんだろ。こちだ、ついて来い」

「お、おう。ヘルムホルツか。助かったぜ。それにしても相変わらず愛想あいそうの無いやつだな、お前」

ジュールは黙々と進むヘルムホルツの後を追ひ、研究所の隣となりに併設せうされる、倉庫のような施設の中に入った。

入口に透明な袋に詰められた、トランザムのもとは分かる赤色のバトルスーツが一着壁に掛けられていたが、それ以外施設の中はガラシとしていた。

「お前、そこに掛けてあるスーツに着替える。その後は思い切り施設の中を動いてみるんだ。この施設には色々なセンサーが付いていて、お前の動きを分析してスーツが最適な状態になっているのか確認する」

「へえ、凄いいもんだな。でも立ち合いはお前一人なのか？」

新しいスーツを手に取りながら、この広い空間に、自分とヘルムホルツの二人しかいない事が少し気になった。

「不満か。お前になんぞ、俺一人で十分だろ。それにそのスーツを作ったのは、俺だしな」

「ほう、たいしたもんだな。どれだけの性能か、楽しみだよ」

ジュールは、少しきつめなスーツを着るのに手間取った。

「初めはきついが、すぐにお前の体の形に定着する。このスーツは俺がお前専用で作った完全なプロトタイプさ。現在軍で使用されているバトルスーツの中でも、最新最強の性能を誇るほこスーツに仕上げている。今回お前にこのスーツを渡したのは、新開発のこのスーツの性能を実戦で検証するためだ。そして問題がなければ、その後量産へと移行する」

「なんだよ、それじゃ良い実験台じゃないか」

「当たり前だ。そうでもなければ、こんな最新技術を駆使くしして作られた大切なスーツを、どうしてお前なんかに渡さねばならん」

「正直に言ってくれなせ。まあ、お前のそういふ何でも馬鹿正直に話すところは、嫌いじゃないがな」

「俺だって鬼じゃない。最初に言ったはずだ、このスーツは【お前

専用】だと。昔から見えてきたお前の特徴を生かすよう計算して作っている。そしてグラム博士の新技術によって小型化された玉型兵器を無理なく装備でき、使いやすさを追求したベルトも同時に作製した。すでに玉型兵器は装備済みだ、確認してみる」

手渡されたベルトは、腰に巻くベルトと肩に掛けるホルスターが結合した構造になっており、小型のケースがいくつも取り付けられていた。そしてそのケースの中に、小型になった多数の玉型兵器が仕込まれていた。

「これは咄嗟の時に使いやすいな。でも装備されてるこれらの玉も、お前が作ったのか？」

「俺は本来防具専門なんだが、今回はすべて俺一人でやった。博士のノートには丁寧過ぎるほど細かく詳細が書いてあったから、思いのほか簡単に作れたよ」

「それにしてもこのスーツ、軽いし動きやすいな。でもこんな薄い物で、防御力は大丈夫なのか？」

「バトルスーツは戦闘時において、制服の下に装備するものだ。それゆえあまりゴツくできん。むしろ薄く軽量化が望まれる。今お前が着ているスーツは、カプリスが最近開発した【KSR35】という新素材で作られている。」

これは超軽量纖維素材に強度物質を組み合わせたもので、一般の隊士が身に着けているスーツに対し、約5倍の防御力を誇っている。小銃程度なら、ほとんどダメージを受けないはずだ。だが特筆すべきは防御力ではなく、身体能力加速機能だ。この機能はアダムの基本理論である【光子相対力学】の作用を用いて、装着した者の身体能力を高める働きを持っている。

ただし反動も大きく、使用者に相応の肉体的負担がかかる。そのためこの機能の付いたスーツは現在、屈強な肉体を持つ精鋭集団である、コルベットとトランザムにのみ配備されている。それでも現状では使用者の負担を考え、約2.5倍程度の能力アップに機能を抑制している」

「それで、このスーツはどうなんだ？」

「KSR35はその軽さと丈夫さに加え、優れた緩衝機能が備わっている。そのため装備した者への肉体的負担を、著しく低下させることができるんだ。机上での予測では、少なくとも3・5、いや4倍はいける筈だ。ただ実際のところは使ってみなければ分かんない」

「そこで俺が実際に使ってみるといわけか。ところで左の手首についてるこれは何だ？」

ジュールは左手首の部分に付いている、ダイヤルのような突起物を指さし尋ねた。

「そのダイヤルを回すことで、機能の出力を制御することができる。初めは3倍の設定になっているが、あとはお前が耐えられる範囲で出力を上げてみる。最大で8倍まで上げられるが、タフなお前でも5倍は無理だろう」

一通りの説明をヘルムホルツから聞いたジュールは、施設の中を縦横無尽に走ってみた。

左手首のダイヤルを制御し、3・5倍、4倍と出力を上げて行く。それをセンサー越しに観察していたヘルムホルツは、徐々にマシンガンを取り出しジュールに言った。

「避けてみる、ジュール！」

ジュールに向け、おびただしい数の銃弾が向けられた。

数発の銃弾が彼の体をかすめたが、どうにか全弾を避けることができた。

「これならどうだ！」

今度は小型のビーム砲を構え、ヘルムホルツは容赦なくジュールに向け、その引き金を引いた。

「くそっ」

ジュールは信じられないスピードを発揮し、ビームをかわした。勢い余ったジュールの体は、施設の壁に激突した。

「さすがだな、ジュール！ 良くかわせたな！」

めずらしく声を高良げるヘルムホルツに、ジュールは怒鳴った。

「馬鹿かお前！ まさか本当に俺を殺すつもりか？」

「スマンスマン。だが人間は危機的状況にならないと、真価を發揮しないからな。済まなかったよ」

ジュールは全身の筋肉が千切れたかのような激痛を感じ、少しの間動くことができなかつたが、身体能力加速機能の凄まじい性能と、その副作用ともいふべき肉体への反動を身をもって学習した。

ふと左手首を見ると、出力は6倍を示していた。

施設のセンサーより得られたデータを確認しながら、ヘルムホルツは静かな声で休息しているジュールに言った。

「ジュール。今この施設の中は完全に密室であり、盗聴される心配もないから聞くが、お前から渡されたグラム博士のノート、俺以外誰にも見せてないよな」

「当然だろ。博士との約束を、俺が破るとでも思ってるのか！」

「しばらくの間、あのノートに書かれた技術は公表しないつもりだ。あの小型化の原理は凄い。ただその手法に少々問題がある。もし王立協会の人間にこの技術が知れると、非常にまずいことになる……」

「どついうことだ？」

馬鹿正直な性格だけに、ヘルムホルツの表情が物語る深刻さがジュールに伝わって来た。

「あまり詳しいことを説明しても、お前じゃ理解できんだろう。ただ博士が行っていた研究は、現在のアダムズ王国の科学を真つ向から否定することにもなり兼ねない技術だ。それにこの技術は……」

「ドンドン！」

ヘルムホルツの話を遮るように、施設のドアを叩く音がした。

「恐らくドルトン隊長が来たのだろう」

「やはり研究所で話すのはリスクが高いな。ジュール、お前近いうちに時間つくれるか？」

「構わないが、そんなに重要なことなのか……」

神妙な面持ちで黙ってうなずきながら、ヘルムホルツは施設のド

アを開けに向かった。

ドアを開けると、身の丈たけほどある長刀を背にしたドルトンが立っていた。

「どうだジュール。新しいスーツの調子は」

「えっ。ああ、凄いスーツですよ。ただ使いこなすには少し時間がかかりそうです、体への負担も大きいし……」

ジュールはヘルムホルツの話の続きが気になったが、とりあえずこの場を凌しのごうと、ドルトンに言った。

「隊長の要件は済んだのですか。こちらも終わりましたので、そろそろ待機所に戻りましょうか」

まだ完全に痛み of 引かない体で、急ぎ帰り支度したくを整えながら、ジュールはヘルムホルツに言った。

「なあヘルムホルツ、今晚飲みに行かないか。久しぶりに会ったんだし、たまには昔話でもしようぜ」

「そうだな。今日のデータも渡さなきゃならんし、仕事が終わったら、トランザムの待機所に行くよ」

ジュールはヘルムホルツが作ったスーツとベルトを持ち、ドルトンと共にカプリスの研究所を後にした。

ただジュールには、この国の科学を否定するほどという、グラム博士が行っていた研究がどういったものなのか、気になって仕方がなかった。

アダムズ軍は大きく二つに分けられる。

一つは街の治安や城の警護などを行う【警察部隊】であり、もう一つはジュールやテスラの所属する、他国との戦争やテロリストとの戦闘を受け持つ【軍事部隊】である。

警察部隊はその性質より、国の様々な場所に拠点きょてんを持ち、市民の平和な暮らしを維持するよう務めていた。

それに対し軍事部隊は、国の中心である首都ルヴェリエ、そして東西南北に位置するそれぞれの主要都市に、その拠点を構えるのみ

である。中でも軍事部隊の双壁そうへきをなすコルベットとトランザムは、王族の暮すアダムズ城内に、その拠点を構えていた。

城に戻ったジュールとドルトンが、トランザムの待機所手前にある、少し広めのホールに差し掛かると、何やら人集りひとだかが出来ていた。「どうしたんだ？」

ドルトンはその場に居合わせたトランザムの隊士に尋ねた。

「どうもこうもないですよ、いつもの身内同士の喧嘩けんかです。勘弁かんべんしてほしいですよ、まったく……」

人集りの中心には、皇太子殿下こうたいしでんかである【トーマス王子】と、コルベットの隊長である【トウエイン将軍】の姿があつた。

トーマスは現国王であるアルベルト王の一人息子であり、トウエインは国王の妻であり、トーマスが幼少の頃に病死した、母である王妃の実弟であつた。

トウエインは王族でありながら、戦術に秀でた才能を持ち、その能力の高さと実力で、軍のNo.2である將軍職に上り詰めていた。両者は叔父おじと甥おいの関係であつたが、幾度いくどと無く対立を繰り返していた。

「やあ、ジュール。久しぶりだね」

「お、おう。久しぶりだなテスラ。元気そうだな」

人集りの中にはもちろんコルベットの隊士もおり、そこにいたテスラはジュールの姿を見つけると、人込みをかき分けながら近寄り声を掛けてきた。

「テスラ、お前最初からここにいたのか？ 俺は今来たばかりなんだが、今回は何の騒ぎさわぎなんだ」

「【リーゼ姫】のことだよ。コルベットとトランザム、どっちが姫の警護をするかで揉めてもいるみたいだよ」

リーゼ姫は、アダムズ王国の東に隣接りんせつする小国【パーシヴァル王国】の王族だ。

アダムズ王国とパーシヴァル王国は、古くから友好的な関係を築い

ており、活発な交易（こうえき）を行っていた。

そんなパーシヴァル王国は5年ほど前、軍を統括（とうかつ）する【ボアア将軍】による突然のクーデターによって、王族は皆殺しにされた。

その後ボアア将軍は指揮下の軍勢と共に、王族で唯一生き残ったリーゼ姫を連れ、アダムズとパーシヴァルの国境の山岳地帯（さんかく）にある【プトレマイオス遺跡】に立て籠もった。

プトレマイオス遺跡は神話にて、女神ヒュパティアが建て、神器を祀（まつ）ったとされる神殿であった。

しかし現在は廃墟と化し、神話にて語り継（つ）がれるような雅さ（みやび）は、微塵（みじん）もなかった。

そんな遺跡に立て籠もったボアア将軍は、パーシヴァル王国の要請（せい）により、リーゼ姫の救出に来たアダムズ軍に対して、その攻撃に対する決死の抵抗を行った。

しかし将軍はどうしてこのような一連の事態を引き起こしたのか、その行動理由を明確にすることは一切なく、また姫の身柄（みから）に対しても何の要求も行わなかった。

その為なぜ姫を連れ去り、こんな辺境（へんきょう）の遺跡に立て籠もるのか、アダムズ軍には理由が分からなかった。

そして理由の分からないこの戦いを、いつしか人々は【ボアアの反乱】と呼んだ。

圧倒的な軍事力を誇るアダムズ軍の攻撃によって、ボアア将軍の率いる反乱軍は、容易に壊滅すると誰もが予想した。しかし科学者としても名高いボアア将軍は、アダムズ軍の最新兵器をもともせ（じんたい）ず、自ら考案した特殊兵器を使用し、逆にアダムズ軍に甚大な損害（せんがい）を与えた。

独自の文化を構築していた小国のパーシヴァル王国は、アダムズ王国と親密な関係を築いてはいたものの、科学分野においても、アダムズに無い独特な技術を持っていた。

そんなパーシヴァル王国が持つ、独自の科学技術の発展をけん引していたのがボアア将軍であり、この反乱で将軍は、今まで自らが

培つてきた全ての知識と技術力を、敵対するアダムズ軍に叩きつけた。

見たこともない武器によるゲリラ的な攻撃に、アダムズ軍は苦渋を強いられた。

当初の予想を裏切り、ポーアの反乱は開始から四年もの歳月を費やしていた。

そしてジュールやアラデーも軍の一員として、リーゼ姫奪還のためにこの場所で、凄まじい戦闘を繰り広げた。

いつ終わるとも分らない泥沼の戦いになっていたポーアの反乱は、意外な形でその幕を閉じる。

軍事に大きな差がありながらも、互角の戦闘を繰り広げていた反乱軍は、とある満月の夜にポーア將軍を含むほぼ全ての幹部兵士が、突然の自害を血行した。

翌朝、残りの反乱軍兵士はその全員が無条件で降伏し、人質だつたりリーゼ姫もまた、無事に保護された。

その後降伏した反乱軍兵士の一部は、アダムズ軍の拘置所に送られたが、残りの大部分はポーア將軍並びに幹部兵士に強要されたこととされ、咎めを受けることなくパーシヴァルへ戻つた。

ただし、再度同じ様な事態が起こらないよう暫定処置として、アダムズ王国がリーゼ姫の身柄を一時保護するとともに、パーシヴァル王国にアダムズ軍を駐留させることとした。

ポーアの反乱が終結して一年が経過したが、その間アダムズとパーシヴァルに目立つた出来事はなく、現在まで平穏が保たれている。ただポーア將軍が何を目的として、このような事態を引き起こしたのか、それだけは今も謎のままであった。

トーマス王子とトウェイン將軍の言い合いは平行線をたどり、一向に収集の目途が立ちそうになかったが、そんな王族同士の喧嘩を放っておくわけにもいかず、周囲の者たちは半ば呆れて二人を見ていた。

特にトランザムの隊士たちには迷惑極まりなかった。

荒くれ者の隊士たちではあったが、トランザムを抱えているのは総司令のアイザックであり、王国最強の精鋭部隊として、その任務には誇りとプライドがあった。

だがアイザックと親交を密にする王子は、幾度となくトランザムを私的な事情に使用し、さも自分の私設部隊のごとく、隊士たちを顎で使っていた。

トーマス王子は科学こそ苦手としていたが、非常に頭がよく、特に経済学においては非凡な才能を備えていた。

そのため近隣諸国との交易には積極的に取り組み、アダムズ王国の発展に大きく貢献していた。

ただあまりにも頭の切れが良すぎたため、自分以外の皆全てが愚か者に見え、その言動にはいつも人を見下す様な所があり、人望は極めて希薄であった。

特に見た目が武骨なトランザムの隊士たちには、低能無知を決めつける発言を連呼し、そのくせ無理難題な任務を押し付けては、不適な笑みを浮かべていた。

そんな王子に対し、隊士たちの不満は極限までに達しており、『俺たちは王子の犬か！』と、耐え難い屈辱に怒りを露わにした。

アイザックやドルトンは、そんな隊士たちを不憚に思いながらも必死になだめた。

「トーマス王子！ いい加減にして下さい。他国の王族を警護するのは、コルベットの任務であると法で決まっています。これは国王がお決めになったことで、いかに王子が反対されても、覆るものではありません！」

トウエイン將軍の発言にコルベットの隊士のみならず、トランザムの隊士までもがうなずいていた。トランザムにしてみれば、余計な仕事を増やされなくなかったし、これ以上王子に振り回されるのは懲り懲りだった。

だがそんなことにはお構いもせず、トーマス王子は言った。

「私とリーゼ姫はいずれ夫婦となる身です。未来の夫が警護して何の問題がありませんよ」

「それは王子が勝手に決めたこと。リーゼ姫が誰と結婚するかなど、そんなことは何ひとつ決まっていはいない！」

怒りが頂点に達しそうなトウエイン將軍とは逆に、なぜかトーマス王子はその顔色一つ変えず、むしろこのやり取りを楽しんでいるかの様であった。

その証拠に王子は軽い笑みさえ浮かべていた。

「ああ言う王子の肝の据わっているところは嫌いじゃないんだが、そろそろ頃合だな」

そう言って、ドルトンは言い合いを続ける二人のもとに向かおうとした。すると、

「みな様、どうかお静かになりましたか？」

透き通る様な声が聞こえ、ホールに集まる人々はハッととなった。

そこには紛れもない、話の当事者となっている【リーゼ姫】の姿があった。

小柄であり、年齢の割に少し幼く見える顔立ちであったが、その容姿はまるで女神が甦ったかの様に美しく、慎ましくも艶やかであり、なにより微笑む彼女の笑顔は、見る者に何とも言えぬ安らぎを与えた。

リーゼ姫は王族でありながら、決して傲りが無く、身分に差別なく手を差し伸べることができる、真に清らかな性格の持ち主であり、育ちの良さを感じさせつつも、性別や年齢、身分に関係なく誰からも好感を持たれていた。

なにしろポーアの反乱で肉親を殺され、四年もの間人質として監禁されていたにもかかわらず、その悲しみや苦勞を一切表に出さなかった。

「リーゼ姫！ 侍女も連れずこのような場所へ、どうなさったのですか」

トーマス王子は素早く姫のもとに駆け寄り、膝間づいた。

「申し訳ありません。はぐれた愛犬を探していたら、わたくし自身も迷子になってしまいました。アダムズ城はとても大きいので、途^と方に暮^ぼれていたのですが、何やら大勢の人の声が聞こえましたので、こちらに参りました」

「そうでしたか。ならばその愛犬、私が必ずや探し出し姫のもとにお届いたしましょう。愛犬というほどではありませんが、奇^き遇^ぐなことに私も犬を飼っていますので、その犬たちに探させましょう。私の【犬たち】は鼻が利きますので」

そう言うなり、トーマスはドルトンに目配せをした。

「やれやれ……」

ドルトンはため息をつき、それに気づいたトランザムの隊士たちは、一斉にその場から逃げ去ろうとした。

「そうだ！ 良いことを思いついたぞ」

突然声を張り上げたトーマスに、隊士たちの足は止まった。

「リーゼ姫。実は今トウエイン將軍と、あなたの警護について話し合っていたのですが、なかなか話がまとまらず、困っていたところなのです」

「まあ。わたくしの為に、そのような事をしていただかなくとも……」

「そうはいきません。あなたは我が王国にとって、とても大切なお方なので、お守りするのは当然です。ただ、いつまでも話し合いに時間をかけるのはバカバカしいので、そこをうまく解決する方法として、おもしろいゲームを思いつきました」

「ゲーム？」

首をかしげ、困った表情を浮かべる姫をよそに、王子は得意げに言った。

「はい、そのゲームに勝ったほうが、姫を警護するのです。いかがですか、將軍」

「いったいどんなゲームのですか？ あまり気が進みませんが、王子と言い争っていても終わりが見えませんので、その内容によっ

てはお引き受けしてもよろしいですが」

さすがのトウエイン將軍も、姫の御前でこれ以上王子と揉めるのは得策でないと判断し、とりあえず王子の話の話を聞くことにした。

「さすがは將軍。やはり軍人のトップたるものそうでなくては。では説明いたしましょう！」

トーマス王子はホール中央にある、鋼鉄製の巨大な球体のオブジェの前に足を運んだ。

「この鉄の球体。誰が何を意味して造ったのかは知らないが、温もり一つ感じさせない無機質なこの像に、私は昔から嫌悪感を感じていた。いつか処分するつもりでいたがその前に、この像の良い使い道を思いついた」

王子は鉄球をコンコンと軽く指で弾き、周囲の視線を独り占めしていることに酔いしれながら、話を続けた。

「聞いた話によると、この鉄球は2トンほどの重量があるものらしい。そこでコルベットの諸君、君たちの中でこの鉄の塊を、得意の剣術で破壊できる者が居たならば、私は黙って姫の護衛役から身を引こう」

突拍子の無い王子の提案に、それを聞いていた者たちは失笑で呆れかえる思いだったが、黙って話を聞いていたトウエイン將軍は、ついに怒りを爆発させ王子に詰め寄った。

「そんなバカな話がありますか！ こんな鉄の塊、大砲でも壊れはしない！ こんな馬鹿げた話、ゲームどころかただの戯言に過ぎません。これ以上はさすがに付き合いきれませんぞ！」

それを聞いていたジュールも、不可能極まりない王子の提案したゲームに、度が過ぎると腹立たしさを感じた。

「いくらなんでもフェアじゃなさ過ぎだ。冗談にもほどがある。なあテスラ、お前もそう思うだろ」

「……」

テスラは無言だった。というより、彼の意識は別のところに向いていた。

「なんて綺麗なんだろう……」

「テスラ、お前なに言ってるんだ？」

「リーゼ姫だよ。あんなに美しい人を、僕は今まで見たことがない。まるで女神様のようだ」

完全にテスラは、姫に心を奪われているようだった。

「本当にきれいな人だな。それに顔色もすっかり良くなって、元気そうだなによりだ。テスラは姫の奪還戦に参加しなかったから知らないだろうが、反乱軍が降伏して姫を救出したとき、あの方は消衰しきっていてな。げっそりと痩せていたし、青白い顔をして放心状態だった。そう言えば、姫は俺たちと同じ歳らしいぜ」

あまり異性について人前で語らないテスラが、我を忘れて美しい姫を見つめるその姿に、ジュールは微笑ましさを感じた。

姫について話す二人をよそに、相も変わらず人集りの中心で、王子と將軍の衝突は続いていた。

「王子、もうそろそろ宜しいですか。あなた様が何と言おうと、姫の警護は我々が行います。それ以上でも以下でもない。姫の御前でもありますから、もうこの辺で終わりにしましょう」

「いや將軍、私は至つてまじめですよ。アダムズ王国は、数々の不可能を可能にしてきた。その国を守る最高の集団であるあなた達なら、私は決して不可能では無いと思っている」

「無茶苦茶な屁理屈を言わないでください。不可能を可能にしてきたのは科学での話です！」

戦場では、どんな苦境に陥つても顔色を変えたことの無い將軍が、烈火の如く真っ赤な顔で言い返した。

そんな將軍を見て、トーマス王子は少しだけ何か考える素振りを見せた。

「確かに、この鉄球をただ破壊しろと言うのは少々乱暴でありましたかな。では一つおまけを付けましょう」

そう言うと、王子は自らの腰にさげていた雅やかな刀を手を取っ

た。

「この刀はラジアン博士が【神の力】を封じ込めて作ったと言われ
る十拳封神剣の一つ、名を【蛇之麗正】おんなのあいらまほといいます。この刀は強力
な電磁波を発することができ、その威力は百の大砲に匹敵すること
のこと。挑戦者にはこの刀を貸して進ぜよう。いや鉄球を破壊できた
ならば、姫の警護役とともにこの刀も授けよう」

周囲に微かなどよめきが起きた。

【十拳封神剣】は天才ラジアン博士が、今までの生涯で最も尽力を
注ぎ開発した十本の刀であり、国宝級の扱いを受けていた。

刀であるにもかかわらず秘める威力は未知数であり、本当に神が
封じられているのではと恐れられるほどであった。

その刀を授けるとい言葉に、コルベットやトランザムの隊士た
ちは目の色を変えた。

腕に自信のある彼らだからこそ、王子の掲げた伝説ともいえるそ
の刀が、喉から手が出るほど欲しかった。

だが目の前にある大きく丸い鉄塊を見ると、その現実^なに気が萎え
た。さすがに誰もが不可能だと思っただ。

あきらめの表情を見せる王国屈指の手練れ達に、王子はまたも不
敵な笑みを見せ、嫌味の様に続けた。

「どうした、誰か挑戦する者はいないのか。それでもこの国最高の
戦士なのか」

不愉快なほど傲慢な王子に、ジュールは心底嫌気がさした。

そんな王子の悪態にまったく気を留めず、今だ一筋に姫を見つめ
るテスラを見て、ジュールは少しかう様に言った。

「なあテスラ、お前挑戦してみないか」

「え、なに？」

「王子の提案したゲームだよ。王子の持つてる刀で、あの鉄球を破
壊するのさ。そうすれば姫の護衛役と国宝の刀が手に入るそうだ。
それに、姫の前で良い所を見せる絶好のチャンスだぞ」

「姫の護衛役！ そんな大切な事、なんで黙ってるんだよ」

そう言うなり、テスラは人込みを掻き分け、王子のもとに歩み寄った。

「お、おいテスラ。本気でやるのか」

冗談半分で言っただつもりが、本気になるテスラにジュールは驚き、少し戸惑った。

王子の前に進み出たテスラは、トーマス王子に改めて確認した。

「王子。その刀でこの鉄球を破壊したら、本当にリーゼ姫の護衛役を任せられるのですね」

「ほう、アイザック総司令のご息がお出になられるか。この国一番の剣の使い手として名高い、そなたが挑戦するからには私もそれに応えねばなるまい」

少し下手に言いながらも、不敵な表情はそのままに、王子はテスラに蛇之麿正を手渡した。

国王を親に持つトーマス王子と、軍の総司令を親に持つテスラは、幼少の頃からの顔見知りであった。

幼き頃よりトーマスは、皆を不快にさせる天賦の才を備えており、五つ年下だったテスラは、からかう相手として恰好の餌食であり、幾度となく嫌がらせを受けた。

しかし、なぜかテスラはそんな王子の態度に何の感情も抱かず、また何をしてもしも反応の無いテスラに対し、いつしか王子は距離を置くようになっていた。

ひよんな場所で再会した二人だが、相変わらずテスラは王子に対し何の感情も抱かなかった。

テスラの頭は美しいリーゼ姫の事でいっぱいであり、ただでさえ興味のない王子のことなど、どうでも良かった。

そんなテスラであったが、手渡された蛇之麿正を鞘から引き抜くと不思議な感覚を感じた。

軽く素振りをしてみると、蛇之麿正は目には見えない微小な振動を発生させ、その感触はテスラの体に伝わった。

「……………」

テスラは蛇之麿正を手に少し考えている様子だったが、ゆつくりと歩きだし姫の前で止まった。

「リーゼ姫。ここに居られては少々危険です。もう少しお下がりください」

姫が安全な場所に移動したのを確認すると、テスラは鉄球の前に立ち、中段よりやや下目に拔身の刀を構えた。

張り詰めるような空気に、周囲は緊張で包まれ静まった。

テスラが醸し出す異様な雰囲気^{かも}に気押され、王子までもが息を飲んだ。

ジュールは、目を閉じて集中力を高めるテスラを見つめ、その瞬間を待った。

静かに蛇之麿正は高周波振動を発し始めた。

そしてテスラの集中力が高まるのに比例するかのよう^に、高周波は増大していき、その振動はいつしか激しい電磁波を発した。

「バリバリバリッ！」

目の眩むほど光輝く刀身から、凄まじい放電と風圧が発せられ、周囲の者達は立っているのさえ困難であった。

「凄いな。まるで目の前に【嵐】が集約し、留ま^とっている様だ」
近くにいるドルトンの声が聞こえたが、ジュールはテスラから目を離さなかった。

風圧はさらに強まり、窓ガラスのいくつかにひびが入った。

次の瞬間、

「くる」

ジュールがそう感じたと同時に、テスラは目を見開き、蛇之麿正を鉄球めがけて振りぬいた。

「ズガガガーン！」

目の前に雷が落ちたような、凄まじい轟音と衝撃が起きた。

ホールの中は爆撃を受けたかの様に何もかもが散乱し、テスラが刀を振り抜いた方向にある壁には、巨大な穴が口を開けていた。

あまりの衝撃で目の前で何が起きたのか把握するのに少し時間がかかったが、ホールにいる者すべてが目にしたのは、紛れもなく粉々に破壊された鉄球の残骸であった。

ただ呆然と立ち尽くす王子。

まさに神の発した一撃の様であった。

いかに凄まじい能力を秘めたとはいえ、たかが一本の刀にこれほどの威力があるなど、だれも想像できないことであり、また初めて手にした刀の能力を、ここまで引き出したテスラの剣士としての腕前に、ジュールは舌を巻く思いだった。

「ま、まさかあの鉄球を……本当に、破壊するとは……………」

王子は心が抜け落ちたかのように、力なく言った。

「刀を鉄球に叩きつける瞬間に、電磁波で空気中の水分を加熱し、瞬間的に熱膨張させて鉄球に高負荷をかける。そこに高周波振動を叩きつければ、あとは勝手に鉄球が粉々になるだけです。もし届くのであれば夜空の星でもこの鉄球の様に粉々にできるでしょう」

テスラは自らが実践した方法を淡々と語った。

そしてここにいる最高・最強と呼ばれる隊士たちは、それがどれほどの能力であり、決して己では真似できない神の領域と言ってもいい技術を目の当たりにし、脱帽する思いだった。

「トーマス王子、約束通り鉄球を破壊しました。これで姫の護衛役は、我々コルベットにお任せ下さいませね」

テスラはそう王子に告げると、少し離れた壁に半身を隠し、恐る恐る様子を伺うリーゼ姫に目を向けた。

「ハハハハツ。真に素晴らしい見事な剣技であったぞテスラ。だが最初に言ったように、これはゲームだ。ただの余興であって、本当に姫の警護を譲るわけなからう」

「何ですと！」

この期に及び言い訳がましく戯言を言う王子を、テスラは鋭く睨み付けた。

その目には明らかに殺気が込められており、それに連動する様に

蛇之麿正は高周波を発した。

「やめるテスラ！」

叫んだジュールは咄嗟に自分の持つ刀に手を掛け、殺気に怯む王子の盾となる様に立ちはだかった。

「何を考えているんだテスラ、冷静になるんだ」

視線を交わしながらも、黙り対峙する二人。

テスラの目は明らかに殺意に満ち溢れており、その殺気は王子のみならず、なぜかジュールにさえも向けられていた。

ジュールはその殺気を真正面から受け止め、テスラが思い留まる様、必死に願い信じた。

「そこまでだ、二人とも」

ドルトンは威圧感のある低く重い声で、睨み合う二人に制止を促がした。

そして別人の様に縮み上がっている王子のもとに歩み寄り、赤子を諭すように言った。

「見苦しいですぞ王子、約束通りここは姫の警護を彼らに任せるのです。そしてあの刀もテスラに渡しなさい。彼は正々堂々と、王子のほうから持ちかけた【ゲーム】に臨み、見事それを成し遂げたのです。ここはご自分の言った事に責任を持ちましょう。負けを素直に認め、その相手を心から称賛することが出来る様になれば、今後国を背負うあなた様にとって大きな財産となることでしょう。またそうすることで、あなたの器の大きさを、壁の陰から見守る姫に見知らせることにも繋がるはずですよ」

王子は神妙な面持ちで少し考えた末、潔く諦めの言葉を発した。

「最高の科学と最高の剣術の成せる技か。まあ良い、今回は完全に私の負けだ。姫の警護役からは身を引き、その刀もテスラ、約束通りお前に譲ろう。所詮私がそのような刀をぶら下げていても、無用の長物だしな」

テスラは刀をひき、鞘に納めた。

ほっと胸を撫で下ろし、ジュールは一息ついた。

それでもテスラが、王子はおるか自分に対してまで本物の殺気を向けたことに、彼は困惑した。

「申し上げます！」

一人の一般隊士が、血相をかえてホールに駆け込んできた。

「ヤツです、ヤツが現れました！ それも二体同時です！ 二体のヤツは王立協会本部の【エクレイデス研究所】を強襲し、【何か】を強奪した模様。その後二手に分かれ、一体はルーゼニア教総本山【金鳳花五重塔】に、もう一体はルヴェリエ中央大路の【羅城門】に現在立て籠もっている様子。また未確認情報ですが、現在も王立協会本部のエクレイデス研究所において、銀色の体をした巨大な翼を持つ【化け物】がいるとの報告も受けています。コルベット・トランザム両部隊におきましては、至急出動お願いいたします」

急転する事態に隊士たちの顔つきは、一瞬にして戦場のそれに変わった。

「まさか二体のヤツは、何らかの目的を持ち、共同で行動をしているというのか？」

今までにない状況に、ドルトンは不安と疑問を感じた。

「その様な詮索は後にしろドルトン。急ぎスクランブルだ。我々はエクレイデス研究所に向かう。お前たちトランザムは、二体のヤツのもとに向かい対処にあたれ！」

有無を言わさぬ勢いでトウエイン將軍はドルトンに指示し、また自らが指揮するコルベットに対しても急ぎ戦闘準備を整え、現場に向かうよう指示した。

ジュールは銀色の化け物について、ヘルツが話したラヴォアジエと呼ばれるヤツの事ではないかと思った。

不確定な情報でありながら、トウエインがコルベットをエクレイデス研究所に向かわせようとしていることが、ジュールの考えをさらに確信めいたものに近づけた。その時、

「銀色の体をした巨大な翼をもつものとは【大きな鷲】の姿をなさ

っていませんでしたか」

報告に来た一般隊士に、血相を変えたリーゼ姫が詰め寄り問いかけた。

「申し訳ありませんが、その様な連絡は受けていません。何しろ研究所は現在その一部が炎上しているらしく、事態が把握しきれない状況にあります。何処どこからなぜ炎が発生したのかも不明ですし」

「そうでございますか……」

リーゼ姫は落胆らくたんの色を見せた。

「ただ、エクレイデス研究所には、何重もの自己防衛機能が備わっております。逃走した二体のヤツもそれら強力な防衛機能による攻撃を受け、ある程度のダメージを受けているものと思われます。未確認の化け物も今だ研究所に留まっているというのであれば、それ相応の攻撃を受けているはずであり、深手を負いその場から離れられないでいる可能性も考えられます。いや場合によれば、すでに死亡しているかもしれません」

「死っ！ そ、そんな……」

一般隊士の報告に青ざめた姫は、崩れ落ちる様に気を失った。

それに気づいたテスラは、倒れ込む寸前の姫の体を抱き抱えた。

そして彼は騒ぎに駆け付けた数名の侍女たちに姫の体を丁寧ていねいに預けた。

「テスラ、お前も早く皆と共にエクレイデス研究所に向かえ！ 私
もすぐに行く」

テスラは將軍の指示が耳に入りながらも、少しの間名残り惜しなごりおしそうに姫を見つめた。

細くて小さな姫の体を抱きしめた感触が、テスラにはこの世のものとは思えぬほど心地よく感じた。

「全員急ぎS級戦闘配備だ！ 目標は逃走した二体のヤツ！」

ドルトンはトランザムに対し指令を出した。

「リュザック。お前はトランザムの指揮をとり、南方の羅城門らじょうもんに向かえ。俺はジュールと二人で東方の金鳳花五重塔きんほうけごじゅうのとうに向かう」

「面倒だけどやるしかないか。けんど隊長、戦力のバランスが釣り合っていないけどいいんですかい」

ドルトンの指示に対し、リュザックは尋ねた。

酒好きの彼は一見不真面目に見えるが、その実力はドルトンに次ぐものであり、状況判断能力に長けた強者であった。

「五重塔のほつが距離がある上に、この時間だと向かう道が込み合っているはずだ。少数で行動したほつが機動性が良い。ジュールをサポート役にし、俺がヤツを叩く。なにか不満があるか」

「いや、何もありませんで。了解しました」

準備を整え終えた隊士たちは軍の特殊車両に乗り込み、目的地に向け次々に出発した。

まだ夕刻であったが、弱い雨の降る生憎あいにくの空模様のため、すでに辺りは暗くなっていた。

ヘルムホルツより渡された最新のスーツと各装備を施したジュールは、ドルトンと共にそれぞれが軍のバイクまたがに跨り、雨の中を五重塔めがけてアクセルを開けた。

ドルトンの予想通り、五重塔に通ずる道はかなり渋滞していたが、二人の操るバイクはその僅わずかな隙間を、全速力で駆け抜けた。

ルーゼニア教の総本山である金鳳花五重塔きんぼうけごじゅうごのとうに着くと、すでに一般の二小隊が到着していた。

だがそれらの隊士達は、五重塔に入り込むヤツとの戦闘により複数の負傷者を出しており、無事な者も一般市民の護衛と非難補助で手一杯な状況だった。

それでも市民の非難はひとまず無事に完了したらしく、五重塔に人影は見られなかった。

薄暗い雨の中、ジュールは目前にそびえ立つ五重塔を見上げた。

ルーゼニア教の総本山として、いつもはその信者で賑にぎわっているはずのこの場所は、今は不気味に静まり返り、ただ雨の打ち付ける音だけが聞こえていた。

ジュールはなぜか、これから始まるうとしている戦いが、自分の運命に大きく係あがっていきそうな気がした。

それはどう足掻あがいても逃れることのできない過酷な宿命であり、踏み出せばもう後戻りできないと直感した。

言葉で表すことのできない不安に駆かられ、ジュールの足はその一步を踏み出すことに躊躇ちゅうじゆした。

「覚悟はできたか、ジュール！」

一般隊士より一通りの現状報告を受けたドルトンは、そう言うてジュールの背中を強く叩き、長刀を背負った。

その刀が間違まちがいなく十拳封神剣の一つであることを、ジュールは容易に想像できた。

そして背中から伝わってきたドルトンの力強さは、躊躇するその一步を踏み出すのに、十分なほどの勇気を彼に取り戻させた。

「行くぞ！」

二人はヤツの立て籠こもる、金鳳花五重塔きんぼうげごじゆうのむかしのとうに突入した。

春荒の塔

金鳳花五重塔きんぼうけ いくじゅうのいんはその名の通り、金鳳花の花びらに似た形状の屋根を5枚もつ、浅黄色あさぎいろをした五階建ての塔であり、始めに二人が進入した一階は、広い礼拝堂れいはいどうになっていた。

塔の中は薄暗く、どういう訳か天井の照明類は脆もろくも破損し、あちこちで火花が散っていた。

それでも非常用のバッテリーを搭載した照明が所どころ点灯していたため、最低限の視界は保っていた。

注意深く礼拝堂を観察したジュールは、ドルトンに言った。

「ヤツの気配を感じません。もっと上の階にいるのでしょうか」

「外にいた一般の隊士の報告だと、ヤツは屋上で【何か】をしていたらしい。その後ヤツを見失ったが、塔から抜け出した形跡は無いということだ。ヤツは必ずこの塔の中にいる、用心しろ」

そう言いながらドルトンは、手にした最新のマシンガンの機能を確かめた。

「ふむ、どうやら電子兵器が機能しないようだ。外の隊士の話だとヤツと交戦中に手にしていた武器が突然動かなくなっただけ。このマシンガンはレーザーで自動的に対象に向け、照準を合わせる機能を持っているが、今はその機能が完全に無効化している。原因は分からないが、恐らく銃に組み込まれている制御回路に不具合が生じているのだろう」

「そう言えば以前、俺たちがヤツと戦った時も最新の電子兵器が機能しなくなりました。あの時はファラデー隊長の機転で、メカ式の武器で応戦し事なきを得ました。この現象はヤツの仕業でしょうか？」

ふとジュールは、ヘルツの話の中でラヴオアジエがコルベットと交戦中に【小さな玉】を地面に押し付けることよって発生させた衝撃波で、電子兵器の機能をストップさせたことを思い出した。

「確かにヤツの行動については不可思議なことが多過ぎる。だが今はヤツが何をしたか詮索せんさくすることよりも、現状を把握することが先だ」

そう言いながらドルトンは、天井に向けマシンガンを構え、その引き金を引いた。

「ダン！」

マシンガンからは銃弾が一発放たれた。

「オート機能をキャンセルすれば、銃自体は問題なく発射できるよ。うだ。ジュール、お前の銃も手動に切り替えておけ」

冷静に状況を分析するドルトンは、ジュールに対し丁寧に作戦を伝えた。

「今の一発でもまったたく反応が感じられない、やはりヤツはここにはいないようだ。これより二手に分かれて上階に向かう。非常用の電源のみが稼働していることから、中央のエレベーターは使えないはずだ。上の階に行くには、塔の東西にある階段で向かうほか無い。俺は東、お前は西側の階段から移動だ。まずインカムを装着しろ、ノイズが酷いがどうにか使える。連絡を取り合いながら同時に上の階へと進む、いいな」

ジュールはドルトンの指示に頷きながら、インカムを装備した。

「ヤツを発見、または交戦を開始した場合は即座に知らせろ。ヤツには俺の刀【稜威之雄霸走】を打ち込み倒す。驚異的な回復力を持つヤツを、通常攻撃だけで倒すには時間がかかる上に、こちらの頭数も足りん。そこでこの刀の出番だ。この稜威之雄霸走は切り裂いた対象を、原子レベルで破壊する能力を備えている。いかにヤツとてこの刀で切られれば、その強靭な肉体も意味がないはずだ。ただ城でテスラが放った一撃の様に、剣の能力を最大限発揮するためには、少し【溜め】の時間が必要だ。危険のリスクがかなり高いがジュール、俺が力を溜めている間、お前はヤツをどうにか食い止め、その時間を稼いでくれ」

作戦の内容にジュールは少しの不安と緊張を覚えた。

「俺にできるでしょうか？ もし俺がヤツを食い止められなければ、隊長の身も危険にさらしてしまいます」

弱気を見せるジュールに、ドルトンは少し強い口調で言った。

「戦力の足りない中、お前なら出来るかと信じてここに連れて来たんだ。出来ない奴には最初から言わんぞ」

ジュールは少し乾いた喉に無理やり唾つばを押し込み、ドルトンの背負う稜威之雄霸走に視線を向けながら、了解の合図をした。

ある意味賭けに近い危険な作戦であったが、ドルトンはジュールの能力を信頼しているからこそ、そんな指示を出したのであり、ジュールもまたドルトンの気持ちを理解し、それに応える決意を固めた。

二人は別れ、東西の階段に向かい二階を目指した。

静まり返った塔の中、インカムからは邪魔なノイズと共に、お互いの呼吸音だけが微かすかに聞こえていた。

一階の礼拝堂ほどではないが、二階も比較的広いホールになっていた。

「ゴロゴロ……」

ジュールは窓の外を見ると、厚い雲に覆われた夜空から青白い光と共に、低い雷鳴が轟とどろいていた。

「外はだいぶ荒れて来たな……」

ジュールは慎重にホールを巡回した。

礼拝堂に比べ照明が少なく、見通しは良くなかったが、時折窓の外から差し込む雷の光によって、何とかホール内を見て回る事ができた。

ホールの北側を壁伝いに進むと、ちょうど中央付近に身の丈ほどの大きな時計が置かれていた。

何の意味があるのかは分からないが、時計の上には巨大なバツタの像が置かれていた。

時計の針は5時40分を指していた。

ただ不思議なことに、絶え間なく振り子を揺り動かしているその

時計からは、どういいうわけか動作音がまったく聞こえず、ただ正確な時刻のみを示していた。

「ザザザツ、ジュール聞こえるか」

インカムからノイズを通して聞こえる、ドルトンの呼びかけにジュールは答えると、次の指示が示された。

「俺は南側の壁伝いに進んでいる。このまま西側の階段に向かい三階を目指す。お前は東側の階段から上がれ」

ジュールは了解の返答をしながら、ドルトンが居るであろう南側の壁を見た。

ちょうどその時、差し込んだ雷光が南の壁を照らし、巨大な壁画を浮かび上がらせた。

壁画には、女神ヒュパティアが大神剣素盞王を掲げ、想起神プレイトンに挑む様子が描かれていた。そして女神を取り囲むように、燦貴神と護貴神の姿も描かれていた。

以前グラム博士が話したように、神と呼ぶにはあまりにも相応しくない、化け物じみた姿で描かれる燦貴神と護貴神に、ジュールは目を奪われた。

「あれが神話に出てくる神々なのか……」

返り血を浴びながら、プレイトンと三人の巨神に挑む獣神たちの姿に、ジュールは胸が締め付けられる思いがした。そして久しぶりに右目の奥に、重く鈍い痛みを感じた。

「くそ、こんな時にまたこの痛みか」

右目を軽く押さえながら、ジュールは三階へ向かう階段へと足を運んだ。

「ズガガーン」

三階に着いたのと同時に、激しい落雷の轟音が響き渡った。

天候は更に悪化し豪雨が窓を激しく叩きつけ、大地を揺るがすほどの雷鳴が立て続けに鳴り響いていた。

ジュールは矢継ぎ早に轟音を響かせる落雷に嫌気がさしながら、

中小いくつもの部屋が並ぶ三階を、端の部屋から順に確かめては進んだ。

「こつ連続で雷が鳴り続けると、耳がおかしくなっちまうぜ」

愚痴をこぼすジュールをあざ笑うかの様に、再び落雷が轟音を響かせた。

「ドガン」

落雷と同時に、三階の廊下にいたドルトンの体は激しく吹き飛び、壁に激突した。

「ぐはっ」

左の脇腹に激痛を感じ一瞬意識が遠のいたが、ドルトンは自分が元いた場所を見た。

そこには【腐った牛】の様な顔をしたヤツが、息を荒げて立っていた。

たえず聞こえるインカムからのノイズと、鼓膜こまくに突き刺さるような雷鳴、なにより非常灯のみという視界の悪さで、さすがのドルトンもヤツからの攻撃をかわせなかった。

それでも彼は攻撃を受ける瞬間に半身を捻ひねり、致命傷を避けた。

他の者であれば間違いなく即死していたその攻撃を、彼は神がかり的な反射神経でどうにか凌しのいだ。

幾度いくどの死線しせんを乗り越えてきた彼だからこそ、体が瞬時に反応し、最悪の事態を避けることができたのだ。

だが吹き飛ばされた衝撃で、装備していたインカムと手にしていたマシンガンを、どこかへ失っていた。

「グオオオオオ！」

雷鳴と同時にヤツは悍おぞましい雄たけびをあげた。まるでヤツが嵐を呼び起こしているかのようだった。

「その顔、フアラデーをやったヤツと同じ時期に一度現れたヤツだな。なら羅城門らじょうもんにいる一体も貴様と同じく、一度消息を絶っていたヤツか。お前ら何をしようとしている！」

そう言いながらドルトンは、雷の光に映し出されるヤツの顔を睨

み付け、背中の稜威之雄霸走に手を掛けた。

「ダン！」

床を力強く踏み込んだヤツは、一瞬でドルトンの目の前に押し迫った。

そのままの勢いで、鋭い爪を持つ太い腕をドルトンの顔面めがけて突き出した。

次の瞬間ヤツの体は前方に回転し、ドアを突き破って小部屋の壁に激突した。

ドルトンは竜巻の様に回転しながら突き出されたヤツの腕をつかみ、そのまま反動を利用して背負い投げを浴びせていた。そして素早く刀に手をかけるが、またしてもヤツは猛烈な勢いで彼に迫り、剛腕を振りかざした。

（まさかコイツ、俺に刀を抜かせない気が！）

ヤツの攻撃を掻い潜り、ドルトンはヤツの腹にカウンターの肘をねじ込んだ。

その腹は生き物とは思えぬほどの硬く、攻撃を加えた彼の肘には衝撃が走った。

それでも攻撃は利いたらしく、ヤツは数歩後ずさった。

すかさずドルトンは、肘を入れたヤツの腹めがけ橙色の玉を投げつけた。

そしてその玉ごと相手の体を貫く槍のような、強烈な前蹴りを叩きつけた。

「ビギヤーー！！」

激しい電撃と蹴りの衝撃で、ヤツは悲鳴をあげた。

耐電仕様のブーツを履いていたが、ドルトンの体にも電撃が走った。

だが彼はそんなことに構うことなく、再度ヤツの腹に橙色の玉を投げつけ、そのまま蹴りを浴びせた。

ヤツの体は小部屋の壁を突き破って吹き飛んだ。

ドルトンは両手にはめている黒色の籠手を、腕をクロスさせ勢い

ことに代わりはなく、ドルトンは淡い紫色の光を放つその刀を中段に構えた。

ドルトンは、ふらつきながらも立ち上がったヤツを威圧しながら、ゆっくりと部屋の片隅に追い詰めた。

長刀は次第にその輝きを強めて行く。

だがその時、ヤツはドルトンに対し低い声ではあるが、はっきりとした言葉を発した。

「強いな……、さすがはアダムズ王国の英雄と呼ばれるだけある……」

そう言つとヤツは、部屋の隅にあつた木の机を無造作にドルトンに向け投げ捨てた。

ヤツの発言に少し驚いた彼だが、冷静にその机を真つ二つに両断すると、そのままヤツに向け刀を突き付けた。

だがそれよりも早くヤツは、天井を突き破り上階へと姿を消した。「くっ」

ドルトンは脇腹を抑え、がっくりと膝をついた。

初めにヤツから受けた攻撃のダメージは、深刻な状況になりつつあつた。

彼は自らの体の状態から長期戦は不利だと判断し、短期で決着をつけるべく全力でヤツを倒しにいったが、その目論見は無情にも叶わなかつた。

むしろその代償として、視界がかすむ程の激痛をともなっていた。ドルトンは部屋の片隅に落ちている、マシンガンとインカムを発売した。

彼は装着し直したインカムでジュールを呼ぼうとしたが、ノイズが酷く使い物にならなかつた。

「行くしかないか」

ドルトンは痛む体に気合を入れ直し、大きく口を開けた天井の穴から四階に向かつた。

四階も三階同様に、複数の小部屋で構成されていた。

ドルトンは左手にマシンガンを構え、右手に持つ稜威之雄霸走が発する淡い光で、暗く狭い通路を照らしながらヤツの腹の焼けた残り香を頼りに慎重に歩みを進めた。

「ズガンッ」

突然壁を破壊し小部屋から現れたヤツは、そのままドルトンの体を鷲掴み、反対側の壁に強引に押し付けた。

「ゴホッ」

血反吐を吐くドルトン。

ヤツはドルトンの体を片手で掴んだまま、もう片方の腕を振り上げた。

ドルトンはヤツの焼け爛れた腹に向け、マシンガンの引き金を引いた。

数十発の弾を食らったヤツは一瞬動きを止めたが、ダメージに構うことなく振り上げた剛腕をドルトンに向けた。

ドルトンはマシンガンを捨て、両手で刀を支えながらヤツの大砲の様な攻撃を正面から受け止めた。

彼の体は押し付けられていた壁を突き破り、その奥にある小部屋の中をさらに吹き飛ぶと、窓際の壁に激突してようやく体を止めた。ドルトンは激痛に顔を歪ませつつも、ふらつく足を無理やり立たせ、容赦なく襲い来るヤツに身構えた。

ヤツは通路にあつた等身大の女神像のオブジェを持ち上げると、腰のあたりで二つに折り、その片方をドルトンに向け投げつけた。

ロケットの様に迫りくる女神像を、ドルトンは少し輝きの増した刀で振り払った。

女神像は空中で音もなく粉々に分解され、塵となった。

ヤツは分断したもう片方の女神像も、ドルトンに向け投げつけた。そして自らもドルトンに向け突進した。

ドルトンは女神像を刀で薙ぎ払うのと同時に、迫りくるヤツめがけて赤玉を勢い良く投げつけた。

ヤツはそのスピードを緩めることなく突進しながらも、くるりと反転し赤玉を背中受けた。

「ズガガーン！」

大爆発の中ヤツは噴煙を突き抜け、そのまま背中でドルトンを窓際の壁に押し付けた。

勢いの止まらないヤツの攻撃に、ドルトンの体は壁を突き破った。

「グッ……」

穴の開いた壁から外に投げ出されそうになったドルトンは、なんとか崩れた壁の端に掴まり、地上への落下を食い止めた。しかし、手にしていた稜威之雄覇走は、無情にも放物線を描きながら地面へと落ちて行った。

ヤツは穴の開いた壁から、ゆっくりとドルトンを見下した。

ドルトンは土砂降りの雨に濡れながら、雷光に照らされるヤツの顔を見て言った。

「初めから狙いは刀か。貴様、戦いの素人ではないな。一体何者だ！」

ドルトンの言葉に対し、またしてもヤツは低い声を発した。

「さすがは英雄ドルトン、その強さは噂以上だ。初めの一撃のダメージを受けなければ、あの刀無くしても我を倒せたかもしれぬ。しかし運がなかったな。重症を負い、頼みの刀さえ失っては、もうお前に我を倒す術は無い」

ヤツはそう言いながら、穴の開いた壁から飛び出していた鉄筋を強引に引き抜き、ドルトンに向け振りかぶった。

その瞬間、轟音とともに凄まじい閃光を上げた落雷が発生した。

ヤツは目が眩み、一瞬動きを止めた。

ドルトンはあきらめていなかった。

最後の力を振り絞り、一気に壁をよじ登った。

ヤツが振り降ろした鉄筋を紙一重でかわした彼は、まだ熱の冷め切らない籠手を、ヤツの顎に叩きつけた。

さらに懐から引き抜いた短刀を逆手にかざすと、ヤツの右目に突

き立てた。

「ギイヤアアー！」

ヤツは悲鳴を上げながらも、猛烈な蹴りをドルトンに浴びせた。

ドルトンは蹴りの威力を緩和させようと反射的に自らも後方に飛んだが、その衝撃は凄まじく彼の体は激しく吹き飛び、二つの部屋の壁を突き破った。

「ガハッ」

どうにか意識は繋ぎ止めているが、もはや彼にはヤツに対抗できるだけの力が残っていないかった。

それでもドルトンは必死に立ち上がろうと足掻いた。

ヤツは右目に刺さった短刀を引き抜くと、残った左目でドルトンを激しく睨み付けた。

「クソっ垂れが……」

ドルトンは歯を食いしばり、何とか立ち上がろうとするが、彼の体は言うことを聞かなかった。

ヤツはドルトンに向け、一気に駆け寄り止めを刺そうと力を溜めた。その瞬間、

「ダダダダッ……！」

暗闇の通路から、ヤツに向けマシンガンを打ち込むジュールが現れた。

ヤツは数発の弾丸を受けながらも力強く飛び上がり、またしても天井を突き抜け上階へと姿を消した。

「隊長！」

叫びながらジュールはドルトンに駆け寄った。

「済みません隊長。落雷の轟音で、戦闘が開始されていることに気づきませんでした。すぐにヤツを追います！」

「ま、待てジュール。ヤツは強い、お前一人では無理だ……」

ドルトンの制止を無視し、ジュールは天井に開いた穴から五階へと向かった。

悪天候の影響で、戦闘が開始されていることにまったく気づけな

かったジュールは、赤玉の爆発音を耳にし、ようやく現場に駆け付けた。

一人でヤツに挑み、ボロボロになったドルトンの姿を見たジュールは、ヤツへの激しい怒りで心が一杯になり、その衝動を抑えることができなかった。

塔の最上階である五階は、広い展望室てんぼうしつになっていた。

四方の壁は柱以外、ほとんどが分厚い透明なガラス板になっており、絶え間なく光る雷光に照らされ、展望室は眩まぶしいほどに明るかった。

そしてその中央に、追手を待ち構えるヤツの姿がはっきりと確認できた。

ジュールはマシンガンを構えながら、ゆっくりとヤツに近づいた。そんなジュールに対し、ヤツは不敵な笑みを浮かべながら言った。「ほう、英雄ドルトンのあの様さまを見ながら一人で来るとは見上げた度胸だな。いや、それでこそアダムズ最強のトランザムの隊士と言ったところか」

「初めに一言だけ言う、大人しく降伏しろ。さもなければお前をここで始末する」

そう言いながらジュールは、左手首にあるバトルスーツのダイヤルを回した。

「本気で我を倒せると思っっているのか？」

「こんな時に冗談を言っつてられる程、俺はお調子者じゃないぜ！」

「戯言たわごとでないところが、逆さかに甚はなはだ似て可笑おかなものだ」

「【牛】のくせによく喋る奴だ。何だか腹が減って来たぜ。さっさと終わりにして、今夜は仲間と一緒に焼き肉にでもするか。お前の肉はどう焼いてもクソまずいだらうがな！」

「いつまでその減らず口を吐いていられるか楽しみだ」

落雷の発生と同時にヤツは力一杯床を踏込みジュールに襲いかかった。

そんなヤツに向け、ジュールはマシンガンの引き金を引いた。
ヤツはその巨体に見合わず、身軽なフットワークで銃撃をかわした。

展望室を縦横無尽じゆうおうむじゆうに走りながらも、ヤツは次第にジュールとの距離を縮めて行く。

(くそつ、なんてスピードだ)

スーツの機能を4・5倍にまで上げていたが、ジュールが発した夥おびただしい数の弾丸は、ヤツにかすりもしなかった。

ついにヤツはジュールの背後をとった。

ジュールは必死に振り向くが、そこにヤツの姿はなかった。

ゾツとするジュール。纏まとわりつく様なヤツの殺気を、彼は背後に感じた。

(しまった……)

ジュールがそう思った瞬間、彼の体は分厚いガラスの壁に激突していた。

息が出来ぬほどの衝撃を受け倒れ込むジュールであったが、それでも彼はマシンガンを手放すことなく、ヤツに向け再度引き金を引いた。

ヤツはその銃撃に構うことなく、背中を向けながらジュールに飛びかかった。

鉄の様に硬いヤツの背中では銃弾を跳ね返し、またもジュールの体を吹き飛ばした。

(くつ、体がバラバラになりそうだ。この新しいスーツを着ていなかったら間違いなく即死していたところだ。それにしてもヤツの強さは何だ。前に戦ったヤツも恐ろしく強かったが、今回のヤツは桁けた違いだ。ドルトン隊長はあんな化け物相手に、一人で良く戦えたものだ)

そう感じながらジュールは、ゆっくりと近づいて来るヤツを見つ、必死に立ち上がった。

「貴様が初めに見せたあの自信は、恐らく過去に我以外の者と戦っ

た経験があつたからであろう。だが残念だつたな。我は元【軍人】だ。元々が一般人だつた者と一緒にされては困る」

「へえ、元【牛】じゃなかったのか。どうりで乳臭くないわけだぜ」「トランザムは腕だけでなく、口も達者のようだな」

そう言つてヤツは、動きの鈍っているジュールの体をその剛腕で薙ぎ払つた。

ジュールは吹き飛び、その体は展望室にあるエレベーターの乗り口の扉を突き破つた。

そこにエレベーターは無く、ジュールは落下を免れるためマシンガンを投げ捨て、ワイヤーに何とか掴まつた。

（やはりヤツは元々人間だつたか。しかしこのままじゃ、やられるのは時間の問題だ。どうする……）

まったく歯が立たないヤツの強さにどう対抗するか、ジュールは必死に考えた。

そんな時、ジュールはヤツが頭をボリボリと掻き^{むし}りながら、あさつての方向を見ているのに気が付いた。

（なんだ、どこを見ている。今この場所には俺とヤツしかいないはずだ。余裕を見せているのか！）

ジュールは怒りに震えた。

いかにその実力に差があるとはいえ、まるで眼中にないと云わんばかりのヤツの態度に、彼の心はブチ切れた。

「ふざけるな！」

ジュールは手首のダイヤルを一気にひねつた。

エレベーターから、人間の常識をとうに超えたスピードで飛び出たジュールは、一気にヤツの懐に飛び込んだ。

突然目の前に現れたジュールに、ヤツはギョツとした。

ジュールはドルトンの攻撃によって損傷しているヤツの腹に、渾身の蹴りを入れた。

ヤツの巨体は吹き飛び、ガラスの壁にぶち当たつた。

小型の橙色の玉を両手に持ったジュールは、ヤツに向け駆け込みながら一瞬その玉を床に擦りつけた。

ヤツは向かって来るジュールに、鋭い爪を持った手刀を突き刺した。

「！」

ヤツが手刀を突き刺したのは、ジュールの残像であった。

ジュールは手刀を突き立てたヤツの側面に、人の動きでは有りえないスピードで回り込み、右足の一撃を入れた。

次の瞬間、ヤツの体はまたしても吹き飛んだ。

壁に激突しつつも、倒れぬよう踏ん張るヤツの足元に小型の橙玉が二つ転がった。

「ビガガガーン！」

落雷が直撃したような、凄まじい電撃がヤツの体を焼け焦がせた。

茫然と立ち尽くすヤツに、走るスピードを更に加速させたジュールは、真正面からその顔面に飛び蹴りを入れた。

「グゴツ」

ガラスの壁とジュールの蹴りに挟まれたヤツの頭蓋骨は、奇妙な鈍い音を発した。

それでもヤツはジュールに向け、剛腕を向けた。

頭蓋を損傷し、全身が黒焦げになりながらも、ジュールを睨むヤツのその眼光は微塵も衰えていない。

ジュールはヤツの体を踏み台にして、後方に大きく飛び、容易にその攻撃をかわした。

そんなヤツの足元に小型の赤玉が三つ、静かに転がった。

「ズガガガーンン！！！」

何発ものバズーカ砲が一気に打ち込まれたかのような、激しい爆発が巻き起こった。

展望室の分厚いガラスは粉々に砕け散り、天井と床に巨大な穴を開けた。

周囲は噴煙で立ち込めたが、穴の開いた天井から降り注ぐ激しい

雨により、その煙は急速に収まって行つた。

左手首のダイヤルは、6・5倍を指示していた。

ジュールは、全身の筋肉が引き千切れるかの様な激痛に見舞われ、膝をつき動くことができなかつた。

それでもなんとか周囲を見回し、ヤツの居場所を確かめようとした。

しかし、ヤツの姿はどこにも見受けられない。

(どこだ、どこにいる……今の攻撃だけではまだ、完全に仕留めきれないはずだ……)

「ドゴン！」

ジュールのすぐ背後の床を突き破り、全身ボロボロのヤツが現れた。

激痛に耐えながら、振り向き様に赤玉を床に擦りつけたジュールは、ヤツに向けその玉を投げつけた。

赤玉は激しく爆発したが、ヤツはその衝撃を背中中で受け流した。それでも明らかにその動きを鈍化させているヤツに対し、ジュールは幾つもの赤玉と橙玉を連続で投げつけた。

凄まじい爆発と雷撃が起きる度に、展望室は滅茶苦茶に破損した。ジュール自身もまた、その爆風と雷撃の衝撃を少なからず浴びたが、構うことなく攻撃を続けた。

ついにヤツは全ての衝撃を受け流すことが出来なくなり、その巨体を風に舞う木の葉のように踊らせた。

「これで終わりだ！」

ジュールは床に擦りつけた最後の赤玉を、ヤツの腹めがけ投げつけた。

ヤツは赤玉を避けようと、必死に身を逸らそうとした。

しかしヤツの足は言うことを聞かず、赤玉はその傷ついた腹の目の前で爆発した。

「ズガガーン！」

ヤツの肉片が飛び散り、ジュールは返り血を全身に浴びた。

それでもヤツは噴煙の中から勢いよくその姿を現し、内臓が飛び出す腹に構うことなくジュールに向かつて剛腕を振りかざした。

ジュールは咄嗟とつとに腰の刀を抜きガードしたが、ヤツの攻撃はその刀を粉碎し、彼の体を弾き飛ばした。

吹き飛んだジュールの体は、上半身が塔の外にはみ出たものの、何とか落下を免れた。

半分意識の飛んだ中でジュールはどうか上半身を塔内に戻したが、ヤツから受けたダメージと能力を上げ過ぎたスーツの副作用により、全身から湧わき上がる激しい激痛は極限にまで達していた。

そしてヤツもまたジュール同様甚しん大なダメージのために、止めを刺すためのその一步を踏み出せずにいた。

そんなヤツは大量の血反吐を吐き、荒く苦しい呼吸をしながらも、ジュールに対し言った。

「グロロロオオ……。見事だ、トランザムの隊士よ……。あの英雄ドルトンでさえ、私の力を利用する柔軟じゅうなんな技でしか対応できなかったというのに。まさか我に対して真正面から力とスピードで挑いどみ、これほどの戦いができる者が居ようとは、想像もつかなかった……」

「ハアハア、今夜の焼き肉はやめだ、こんなに牛肉が不味まずいとは知らなかった……。もともと俺は鳥肉派だ、これ以上続けたら完全に食あたりしちまうぜ……」

「まだそんな減らず口をたたく力が残っているのか……。だがそれももう終わりだ。アダムズの科学技術の凄すこさを改めて思い知ったが、生身の人間がそれを使いこなすのは、いささか限界があるようだ。その苦しみに耐えるのはさぞ辛つらかろう。貴様むさまのその無謀むぼうとも呼べる正義感に敬意を表し、ひと思いに息の根を止めて進ぜよう」

ヤツはボロボロの体を引きずりながら、倒れ込むジュールにその足を向けた。

ジュールは必死に起き上がるう足掻あがくが、その体は動くことを拒否し続けた。

「ゴーン、ゴーン……」

下階のほうから鐘の音が鳴るのが聞こえた。

その音を聞いたヤツは、ジュールに向けていた足を止め、損壊した塔の側壁に鋭い視線を向けた。

ジュールもつられ、ヤツが見た方向に視線を向けた。

そこには6時を示す、少し大きな時計が掛けられていた。

「ついに、ついにこの時が来た……」

そう言っただけでヤツはジュールを無視し、雨が吹き込む天井の穴のもとに向かった。

「ま、待て。どこに行く！」

ジュールは必死に叫ぶが、ヤツはまったく気に留めることなく、その穴から天井によじ登り始めた。

何とかヤツを追おうとするが、激痛が邪魔をして満足に体を動かすことができないジュール。

「くそつ、あと少し……あと少しなんだ。俺の体よ、大人しく言うことを聞きいてくれ！」

尋常でない激痛を感じながらも、ジュールは奥歯を食いしばり、^は這う様にヤツの後を追いつつ始めた。

呼吸をする度に、肺に槍が突き刺さったかのような激痛を感じ、心臓が鼓動する度に、体全体が爆発している様な感覚に見舞われた。

それでもジュールは這いつくばりながら、一步、また一步とヤツに向けその体を進めた。

ゆっくりではあるが、ジュールの体は次第に進む速度を速めて行った。

そして穴の開いた天井の下に着いた時、ジュールは立ち上がった。いた。

そんなジュールの右目はあの日と同じく、青白い光を放っていた。

ジュールは穴の開いた天井をよじ登り、豪雨の降りしきる屋根の上に着いた。

それほど傾斜はきつくないが、その屋根は頂点に一本の鉄柱が突

き出る、五角すいの形をしていた。

そしてその鉄柱の足元に蹲る、ヤツの姿が雷光によって浮かび上がった。

横殴りの雨と風に飛ばされぬよう、必死に体を支えながらジュールはヤツに近づいた。

ふとヤツの手元を見ると、粉々に砕けた何かがあった。

暗がりによく分からなかったが、ジュールにはそれが人の頭部ほどの大きさをした【鏡】のように見えた。

なぜか愕然と肩を落とすヤツに対し、ジュールは攻撃を仕掛けることを躊躇した。

そして彼はヤツに向かい、危険であると承知の上で叫んだ。

「おい！ お前は一体ここで何をしていたんだ。その手に抱えている物は何だ！」

ゆっくりと立ち上がったヤツは、ジュールの問いには答えなかったが、その代わりに意味不明なことを口にした。

「どうやら【賭け】は失敗だったようだ。協会も馬鹿ではなかったと言っことか……」

どことなく寂しげな眼差しをするヤツを、ジュールはただ見つめた。

そんなジュールに対し、ヤツは突然開き直ったかのように、強い口調で言い放った。

「もはや私の命は残りわずか。ならば最後に貴様の様な【強者】を道連れにし、地獄への餞としよう！」

ヤツが叫ぶと同時に巨大な雷鳴が轟き、ジュールの体は硬直した。最後の力とばかりにヤツは、動くことの出来ないジュールに攻撃を浴びせかかった。その時、

「ジュールっ、伏せろ！」

紫色の激しい光を放つ稜威之雄霸走を構えたドルトンが、穴の開いた天井より現れジュールの後方より駆け込んで来た。

ジュールは咄嗟に身を伏せた。

ドルトンはその頭上を、激しく空気を切り裂く轟音を響かせながら、長刀を振り抜いた。

長刀はヤツの突き出した剛腕と激しく激突した。

「バギヤーン」

雷鳴に似た轟音と共に、稜威之雄霸走の斬撃によって、五重塔の屋根はその半分近くが崩壊した。

さらにその衝撃は塔全体に伝わり、五階から二階にかけてその一部が損壊した。

その中でジュールの体は、崩れ行く塔の破片と共に一階の床へと叩きつけられた。

「ハアハア、どうにか死んではいけないようだな……」

塔の屋根から転落しながらもジュールは命があったことに安堵しつつ、雷光と雨が降り注ぐ崩れた天井を見てつぶやいた。

「こりゃあいい。屋根が無くなったせいで、礼拝堂が明るくなったぜ……………、ん！」

ジュールは雷光によって照らされた、崩れた瓦礫がれきの中に埋うまれるヤツの姿を見つけた。

そんなヤツのもとに、ジュールは全身に感じる激痛を無視して向かった。

瓦礫に混ざって倒れているヤツの体は、右の肩から左の腰に掛けて真つ二つに切り裂かれていた。

そしてその切り口は、徐々に原子分解を始めていた。

「さ、さすがは英雄ドルトンだな……………。この期に及んであれほどの攻撃をしてくるとは、見事なものだ……………」

次第にその体を消滅させながら、ヤツは静かに言った。

「先程ドルトンが貴様の名を【ジュール】と呼んだな。もしか貴様、グラム博士に育てられたという者が……………」

「！」

ジュールは突然ヤツの口から出てきた博士の名に息を飲んだ。

「軍にいるとは聞いていたが、まさかトランザムとは思わなかった。だが淡く光るその右目が確かな証拠。最後に気付いて良かった。我は危うく、恩人が手塩にかけて育てた者を、この手にかけてしまうところだった……」

「何だお前、博士の事を知っているのか。それに俺の事も！」

ジュールは装着していたインカムを投げ捨て、ヤツに詰め寄った。「その様子だと、お前は本当に何も知らないようだな……。我は元パーシヴァル王国の兵士であり、ポア將軍の部下であった者だ。

あの戦争の後、我はアダムズ軍の拘置所に囚われていたが、ポア將軍の意思を継ぎ、時が来るのを待っていた。そしてグラム博士の協力のもと拘置所を脱出し、ある作戦を実行することにした」

「一体何の話をしているんだ、お前は……」

そう言いつつもジュールは、静かに語り続けるヤツの話しに聞き入っていた。

「我の目的は【ある人物】の命を討つことだ。そのためには【ある鏡】が必要であり、その鏡を手に入れるため数名の協力者たちと共にある計画を立てた。しかしその計画を遂行するためには、人知を超える力が必要であり、半年ほど前に協力者の中で我を含めた三人が、止む無く人々にヤツと蔑まれる、獣人の姿にその形を変えた……」

「……」

「何よりこの姿になったのは、グラム博士の手によるものだ。博士とポア將軍は旧知の仲であり、共に研究に勤しんだ間柄であった。そして今回、我々が実行した作戦の立案者こそ、そのグラム博士なのだ……」

「な……、そ、そんなバカな話が……」

唐突な話に動揺を隠せないジュールはひどく狼狽したが、彼の右目の光はいつしか消えさり、それに伴うように悲鳴を上げていた全身の耐え難い苦痛は、穏やかに和らいでいた。

それでもヤツの話聞くほどに、その目の奥に感じる鈍い痛みだ

けは、むしろ強さを増していった。

「残念であるが、今回我らが手に入れた【鏡】は偽物にせものであったようだ……。いや、初めから上手くいく確率など、無きに等しい【賭け】であったのだ……。だが我らは……。それに縋すがるしかなかった……。なぜならもう、我らには……。時間が無かった……。」

原子分解が進行するヤツの体は、すでに胸の上部にまで達していた。

「済まない、どうやら……。最後まで話すこと……。が……。出来ない……。ようだ……。グラム博士の子であり……。、月読のいんえい胤裔よ……。急ぎ……。羅城門……。へ向かえ……。そこに居る者は……。我より……。強い……。まだ間に……。合つ……。はずだ……。全て……。を……。聞け……。」

ヤツは優しくも哀しい眼差しをジュールに向け、最後に言った。

「グラム博士……。は……。、最後までお前……。に……。本当……。の……。事が……。言えなかつ……。たと、悔やん……。で……。いた……。し……。か……。し、お……。前……。への……。想い……。に……。偽りいつわは……。ない……。」

ヤツは死に絶えた。

そして残された首はあの時と同じよう、人の物へと変わった。

それでも原子分解は止むことなく、ついにヤツはその存在全てが消滅した。

ジュールはふと思い出した。

半年前テスラによって切り捨てられた、ヤツの首が変化して現れた人間の顔を。

そう、あの時現れた人の顔は、スラムにあるグラム博士の研究室の壁に貼り付けられていた写真の中で、博士やファラデーと共に写っていた、顔色の悪い男の顔であった。

「……。博士。あなたは一体、何をしようとしていたのですか」

否定のしようがない繋つながりがりに気付いてしまったジュールの右目は、さらに痛みを強めた。

「ジュール、無事か」

輝きの消えた稜威之雄覇走を携えたドルトンが、脇腹を抑えながら駆け付けた。

「ヤツはどうした」

「完全に、消滅しました……」

ジュールは覇氣無く答えた。

「そうか。それにしてもジュール、俺の制止を聞かず無茶しやがって。今度同じことをしたら、ただでは済まさんぞ！俺の気のせいかもしれないが、なぜか俺が刀を振り抜く瞬間、ヤツはお前に向けた腕を止めた様な気がした。そうでなければ今頃、お前は死んでいたかも知れんのだぞ！」

ジュールはドルトンの説教を聞き流ながしながら、つい先程までヤツが横たわっていた場所に目を向けた。

『まだ間に合う！ 急げ！』

ヤツの死に際の言葉がジュールの心に強く響いた。

彼は背中を後押しされるように、塔の出口に向かってその足を踏み出した。

そしてすれ違い様に、ドルトンの手にする稜威之雄覇走を奪い取った。

「済みません隊長。これ、少し借ります！」

「ま、待てジュール、どこに行く気だ」

「ちゃんと返しますからっ！」

ジュールはまたもドルトンの制止を無視し、土砂降りの雨の降る塔の外に飛び出した。

(間に合ってくれ！)

意を決しバイクに跨るジュールは心の中で祈るようそう叫ぶと、まるで運命に引き寄せられているかのように、羅城門に向けアクセルを開けた。

五重塔でドルトンとヤツが激しい戦闘を開始した頃、同じく城を

出発したコルベットは、アダムズ王立協会の本部である【エクレイデス研究所】に到着した。

アダムズ城より西方に位置するこの施設は、広大な敷地の中にいくつもの研究施設が建ちならび、アダムズ王国選りすぐりの科学者たちが、日々研究を重ねていた。

さらに研究所と名が付いているが、ここは国の政治を司る国会の機能も兼ね備えていた。

まさに王国の中核であり、国を動かす機能すべてがここに集約されていた。

そんなエクレイデス研究所にて最も古い施設とされる1号棟が、真っ赤な炎に包まれていた。

1号棟は老朽化が激しく危険であったため、現在は使用が禁止されており無人であった。

それでもエクレイデス研究所の中心に位置するこの1号棟が燃えていることで、延焼を恐れる科学者たちは逃げ惑い、パニックになっていた。

そして普段であれば、たとえ真夜中であろうと決して明かりの消えることの無いこの施設一帯が、停電によって多くの照明設備が消灯しているため、より一層1号棟から立ち昇る炎を恐ろしく感じさせた。

そんな燃え上がる1号棟を前に、コルベットの隊長であるトウエイン将軍は思った。

（確かにこの棟は老朽化しているが、施設自体に防炎作用を施してあるはず。その施設がこれほどの勢いで燃えているということは、間違いなく【奴】の仕業だ。何よりこの【1号棟】を襲撃したことが、紛れの無い証し……）

そんなトウエインのもとに、血相を変えたエクレイデス研究所の警備兵が駆け付けて来た。

警備兵の報告によると、突然研究所に現れた二体のヤツは、正門に配備された防衛機能の一つであるロケットランチャーを自ら手動

にて制御し、施設全域に電気を供給している送電塔に向け強引に発射した。

送電塔は粉々に破壊され、研究所はほぼ全域で停電となった。

ただ研究所には多数の自家発電機能があり、自動で起動した防衛機能によるヤツへの激しい攻撃が開始した。

しかし攻撃開始から間もなく、それらは全て停止した。

自動防衛で作動する兵器は全て、光学センサーで制御されていたが、どういうわけかその電子制御機能が完全に機能しなくなっていた。

それでも駆け付けた警備兵は、ショットガンや手榴弾などで懸命に対抗した。

だがヤツに対してそんな攻撃が通用するわけなく、容易に施設の中心にまで進入を許した。

猛スピードで広大な施設の中を一直線に駆け抜ける二体のヤツは、1号棟に隣接する21号棟に進入した。

21号棟には、研究所で生み出された様々な発明品が、嚴重に保管されていた。

当然のことながら研究所の中でも特に重要な施設である21号棟は、強化された自家発電設備により停電の影響を受けることなく、そのセキュリティ機能は十分に役目を果たしていた。

にもかかわらず、二体のヤツはこの施設の中で、最も嚴重に管理されていたはずの巨大な金庫の中から、一つの【鏡】を強奪した。

21号棟から出てきたヤツに対し、待ち構えていた警備兵たちは、迫撃砲を搭載した装甲車と、強力な大砲を備える戦車で応戦を試みた。

だがその時、突如として1号棟が燃え上がった。

灼熱の炎は紅蓮と化し、ヤツを追う警備兵の行く手を阻む盾となった。

あまりの熱さに追撃をあきらめる警備兵たち。

そんな彼らがふと燃え上がる1号棟の屋上を見ると、そこには銀

色の体をした巨大な【鷲】の姿があった。

警備兵たちは化け物と呼ぶには相応しくなく、あまりにも美しいその鷲の姿について見惚れた。

真つ赤な瞳をした銀色の鷲は、少しの間その場に居座っていたが、その体を燃え上がる1号棟の炎で包み込むと、いつのまにか消え去っていた。

「21号棟の状況はどうなっている」

トウェインは襲撃された棟の現状を、警備兵に尋ねた。

「設置されていた防御機能は、ヤツによって壊滅的な被害を受けています。特に最下層の地下5階にあった厚さ2mの鋼鉄製の特殊金庫は、何をどうしたのか扉がドロドロに溶け、完全に崩壊している状態です。それでも保管されていた発明品の数々は、そのほぼ全てが無傷の状態に残っていました。唯一つ無くなっているのが確認できたのは【大地の鏡】と呼ばれる獅子の彫刻で象られた、古めいた漆黒の鏡だけであります」

警備兵の報告を聞いたトウェインは、不適な笑みを浮かべながら続けた。

「1号棟に現れた【銀色の鷲】は、その後どこかへ飛び去った形跡はあるのか」

「いえ、それがまったくありません。あの鷲が棟の炎に包まれたところまでには多くの兵が確認しているのですが、その後は消息不明であります」

トウェインのすぐ横でその報告を共に聞いたテスラは言った。

「もしこの激しい炎の中にいたとすれば、とっくに丸焦げになりますよ。まさか生きているとは思えません」

「ふん、その【まさか】さ。奴はこの中にいる。いや正確に言うなら、この炎自体が【奴】なのさ」

「？」

首を傾げるテスラの肩を軽く叩きながら、トウェインは有線式の

携帯型通話機を使用し、待機するコルベットに対して戦闘士気を鼓舞した。

「私の考えが正しいなら、直にヤツが姿を現すはずだ。それも現れるのは間違いなく【ラヴオアジエ】だ！ 諸君は一度対戦し、その【神の力】を身をもって体感しているが、決して恐れることは無い。事前に打ち合わせた通りに作戦を遂行すれば、必ず奴を倒せるはずだ！」

さすがのコルベットの猛者たちも、トウエインの言葉に緊張を走らせた。

（そろそろ時間だ。さあ出て来い！ 私とテスラの封神剣を直接本体に叩き込めば、たとえ神の力をその身に宿していようと、ただでは済まぬはず。長きに渡る私とお前の【因縁】も、今日ここで決着させよう！）

トウエインは心の中でそう決意した。

ただ急激に悪化する天候が少し気になった。

雨は次第に強まり、落雷は矢継ぎ早にその轟音を響かせ続けた。

「ズガガーンン！」

燃え上がる1号棟から、突然巨大な火柱が上がった。

夜空に低く漂う雷雲を突き刺すように、高々と聳え立った火柱は、徐々にその形を変化させた。

炎は次第に鳥の形になりながら、降りしきる雨粒を一瞬で蒸気に変え、辺りを濛々とした真っ白い空間にした。

「熱い！ これじゃ蒸し焼きになっちゃいますよ、隊長」

愚痴を溢すテスラに構うことなく、トウエインは背中の中長刀を抜きながら、空中を舞う炎の鳥を見据えた。

やがてその鳥は、1号棟の屋根の上にゆっくりと止まった。

すると今度は急激に炎が消えて行った。いや消えたというよりも、その鳥が炎を吸い取っているかの様だった。

辺りはまだ水蒸気の煙で立ち込めていたが、あれほどの勢いで燃えていた1号棟は、完全に鎮火した。

そして炎の消えた1号棟の屋上には、銀色の体をした巨大な鷲が悠然とその姿を現していた。

トウエインは真つ赤な瞳をしたその鷲に向かい、挑発的に言い放った。

「どうかしたか【ラヴォアジエ】よ。6時になったら【何か】が起きるはずだったのか？」

ラヴォアジエと呼ばれた鷲は、ただトウエインをその赤い目で見つめるだけで、動きだす気配は無かった。

そんな鷲を見るテスラは半年前の戦いで見たヤツと、体と目の色こそ同じだが姿が違うことを不思議に感じた。

「どうやら当てが外れた様で残念だったな。それにしてもいくら今日が【朔】^{さく}であったとしても、こんな悪天候の時に【あれ】を試みるとは、お前たちは相当焦^{あせ}っているようだな」

激しく降り注ぐ雨に、周囲を覆い尽くしていた水蒸気の白い煙は、徐々に消えて行った。

「炎の様に自在に変化させることができるお前の姿の中で、やはり本来の形であるその【鷲】の姿が一番美しいな。その姿のお前と決着をつけてこそ、意味があるというもの。お前とは長きに渡る腐^{くさ}れ縁^{えん}であったが、それも今日で終わりだ。覚悟^{えん}してもらおう【元部下^{もとぶか}】ラヴォアジエよ！ 悪いが今ここで死んでもらう」

「バギューン！」

エクレイデス研究所の敷地外より、強力なビーム砲がラヴォアジエに向け発射された。

激しい雨とまだ少し周囲を覆う蒸気によって、発射されたビームは拡散し威力を低下させたが、それでも鷲の姿のラヴォアジエに直撃した。

ラヴォアジエは一瞬バランスを崩したが、上空に飛び立とうと巨大な翼を広げた。

「バギューバギューン！」

今度は先程とは反対の方向よりビーム砲が発射され、ラヴォアジエ

工の背中を打ち抜いた。

トウエインは研究所内で電子兵器が使用不可になることを予測し、研究所から遠く離れた別々の場所にコルベットの腕利きの狙撃手をそれぞれ配備していた。

軍の誇る最新のロングビーム砲は最高の狙撃手のもと、数km離れた場所から正確にラヴォアジエに向け発射され、その体を貫いた。威力が減少したとはいえ、ビーム攻撃をともに食らったラヴォアジエは、その衝撃によって屋上より落下した。

空中で大きな翼を羽ばたき、どうにか地面への激突を回避したラヴォアジエに対し、トウエインは待機するコルベットに作戦開始の合図を出した。

それと同時にラヴォアジエに向け走り出した四人の隊士は、それぞれが持つには大き過ぎる大型のガトリング砲を抱えていた。

「ガガガガガッ！」
隊士たちは配置に着くと、容赦なく対象に向けその引き金を引いた。

一発で象の体を粉々にしてしまうほどの破壊力を持つその銃は、雷鳴を凌ぐほどの轟音を立てながら、降り注ぐ雨に匹敵するほどの数の凶弾を、ラヴォアジエに浴びせた。

その攻撃に対し、ラヴォアジエは以前の戦いの時と同様、【迦具土】と呼ばれる自身の周囲に目に見えない球体状のバリアを形成し身を守った。

「動きさえ止められれば十分だ」

トウエインは紫色に激しく光る【天乃尾刃張】を構えながら、真正面からラヴォアジエに向かって駆け込んだ。

彼の動きを見計らい、寸前まで攻撃を続けた隊士たちは、一斉射撃を止めた。

その瞬間、トウエインは迦具土のバリアに構うことなく、その長刀を奴に叩きこんだ。

「バギャーン！」

凄まじい轟音が響く中、ラヴォアジエが背にしていた1号棟の一部分が消し飛んだ。

またその衝撃で弾けるように、複数の大きな火の玉が空中に散乱した。

倒壊する1号棟から少し離れた場所に、飛び散った火の玉の中で一番大きかったものが、放物線を描いて落下した。

火の玉は勢い良く地面に落ちると炎を消し飛ばし、ラヴォアジエの姿になった。

再び現れたその姿は、美しい銀色の体を血で赤く染めていた。

苦しむ表情を浮かべ、蹲るラヴォアジエに対し、無反動ロケット砲を抱えた隊士二名が駆け寄った。

「第一弾、打ち込め！」

隊長の合図に一人の隊士はロケット弾を発射した。

ラヴォアジエは傷ついた翼を羽ばたき、懸命にその攻撃を避けた。ロケットはそのまま近隣の施設に直撃すると、建物を破壊するとともに一瞬でその周囲を凍らせた。

どうにかロケットを避けたラヴォアジエだが、明らかにその動きに精彩を欠いていた。

「今だ！ 第二弾放て！」

空中をフラフラと漂うラヴォアジエに向け、二発目のLN2搭載のロケット弾は発射された。

その攻撃に対してラヴォアジエは、全身から炎を吐き出し備えた。

「グギヤヤアア」

ロケット弾は炎を纏ったラヴォアジエに直撃し、断末魔とも言わべき悲鳴が周囲に響いた。

地に落ちたラヴォアジエの体は、真っ白く氷結していた。

ロケットに搭載された大量のLN2（液体窒素）は、その攻撃対象を急速冷凍するとともに周囲の熱を遮断し、さらに窒素が急激に気体に変化することで、酸素濃度を低下させ、炎をかき消す効果があった。

「テスラ！ 止めを刺せ！」

トウエインは電磁波の嵐を巻き起こす【蛇之麓正】おろちのあじまひを構えたテスラに叫んだ。

「奴自身が【炎】であるため、LN2は気休め程度にしかならん。それでもテスラの一撃を加える一瞬の隙すきを作れた成果は上出来だ。行けテスラ、最高の一撃をぶち込め！」

嵐と共に向かって来るテスラを、赤い瞳で見据みすえるラヴォアジエは、凍てつく体を自身の熱で急速に溶かした。

しかし、ラヴォアジエが飛び立つよりも前に、テスラは渾身の一撃をその体めがけて打ち込んだ。

「ズガガガーン！」

雷鳴同等の轟音を響かせ振り抜いたテスラの刀は、ラヴォアジエの体を吹き飛ばした。

「もう一撃！」

ラヴォアジエは攻撃を受ける瞬間に、ありつたけの力で迦具土かぐつちのバリア張っていた。

その手ごたえを感じたテスラは、一度解放した電磁波の嵐を瞬時に形成し直なおし、吹き飛ばすラヴォアジエの体めがけて踏み込んだ。

激しく閃光が輝くと同時に、雷鳴に似た轟音がまたも周囲に響いた。

テスラの放った二発目の攻撃は、一発目を遙かに凌しのぐ破壊力で確実にラヴォアジエの体を貫つらぬきながら、隣接する施設をも激しく崩壊させ、さらにトウエインほかその他の隊士たちをも吹き飛ばした。

土砂降りの雨に打たれながら、背中を丸めたテスラは右手首を抑おさえ、両膝ふたひざをつき蹲すまっていた。

通常であれば、封神剣の能力を発揮させること自体が困難なはずである。

にもかかわらず天才がゆえにテスラは、連続で二度もその最大能力を発揮させた。それも二度目の攻撃は、一撃目の反動を利用し、

その力に逆らうことなく身を任せ、体を高速で回転させながら電磁波を瞬時に再構築して、一撃目の倍近い衝撃を打ち込むという離れ業をやつてのけた。

しかしその代償として、全身の神経と筋肉が悲鳴を上げた。

特に刀を持っていた右手の手首は、雨が当たるだけで槍に突き刺されているかのような激痛に見舞われていた。

もともとテスラは体力に自信があるほうではない。ジュールに比べれば遙かにひ弱とも言える。

それでも今まで彼は天武の技を駆使し、決してタフとは言えないその肉体を十分過ぎるほど補っていた。

そんなテスラも、今回ばかりはさすがに堪えた。

泥水をすするよう額を地に押し付けながら、尋常でない激痛に耐え忍んだ。

「テスラのやつ、ここまで封神剣の力を引き出すとは、ある意味あいつも化け物だな」

トウエインは、頭部から流れ流れる血を拭いながら、瓦礫と化した周囲の研究施設を見て言った。

そしてその瓦礫に埋もれながらも、必死に起き上がろうともがく、瀕死のラヴオアジエの姿を見つけた。

天乃尾刃張を握り直すと、トウエインは急ぎラヴオアジエのもとに向かった。

雷と雨はさらに激しさを増していた。

体の所々から弱々しい炎を上げ、ラヴオアジエはその傷ついた体を再生させようとしていた。

しかしテスラの放った攻撃は、そんなラヴオアジエの胸に深く大きな傷を刻み込み、その驚異的な再生力が間に合わないほどの重傷を与えていた。

「さすがのお前も、あれほどの攻撃を受ければただでは済むまい。」

足掻くラヴオアジエを見下すように、トウエインは瓦礫の山の上からその姿を眺めて言った。

ラヴオアジエは苦しみに耐えながらも、トウェインの発したその言葉に対して初めて口を開いた。

「 將軍。 どうしてあなたほどの人が、我々をここまで追い詰めるのです。 あなたには本当の【悪】が誰なのか分かつているはずです。 あなたの言うとおり、わたし達に残された時間は少なく、今日のこの時間に賭けるしかない状況だった。 そのことを察していたあなたは、研究所にあった【大地の鏡】を偽物に置き換えるよう、事前に王立協会に対して指示していたのでしょうか。 こんな事ができるのは、あなた以外にはいないはずだ」

激しい雷雨の中でも、ラヴオアジエの透き通る様な声で発つせられたその言葉は、トウェインの耳によく届いた。

「正義や悪などというものは、その立ち位置で変化するものだ。 今の私にとっての正義とは、お前のような国家に盾突くおぞましい化け物を始末することであり、そのために使えるものは、手段を選ばず何でも利用するさ」

トウェインは激しく輝く長刀を上段に構え、まだ動けずにいるラヴオアジエを見定めた。

高熱を帯びているのだろうか、ラヴオアジエの体からは白い湯気が湧き上がっていた。

「最後に言っておこう。 お前がまだ【人間】であったころから、私はお前のことが嫌いで仕方なかった。 お前がその姿になり、抹殺命令が下った時には密かに喜びを感じ震えたほどにな。 だがいざこうしてお前に止めを刺そうとすると、どういう訳か少し寂しさを感じる。 雲を掴むように行方の知れぬお前を探し求め、国中を搜索した日々が今となれば懐かしく思えるぞ。 せめてもの手向けだ、我が天乃尾刃張の最高の一撃で、苦しむこと無くその命、無に変えてやるう！」

彼が上段に掲げた長刀は、今までにないほどの凄まじい輝きを発した。

「さらば【友】よ…！」

トウエインは足元の瓦礫を力強く踏み込み、ラヴォアジエに向けて跳んだ。

「ッバギャーーン！」

爆音とともに、辺りは閃光で包まれた。

ラヴォアジエに向けて跳んだはずのトウエインは、それよりも十数メートル離れた場所に倒れ込んでいた。

全身を黒く焦げ付かせた彼は、尋常でない激痛を全身に感じていた。

止めの一撃をラヴォアジエに向けた瞬間、不運にも本物の落雷が彼の持つ天乃尾刃張に落ちていた。

「く、くそっ……こんな……バカなことが……」

トウエインは、予想外の災いによって自らに何が起きたのか、事実を受け止められなかった。

しかし全身で感じる麻痺と激痛は、拒む彼の心を無理やり現実に戻した。

「ボツ」

背後で何かに火が付く音が聞こえたトウエインは、硬直する体に鞭を打ち、まだ定まらない焦点をその場所へ向けた。

彼はかすんで見える視界の中で、体を燃え上がらせるラヴォアジエの姿を臍に確認した。

胸に刻まれた傷からは、いまだ大量の出血を伴っていたが、急速に勢いを増す炎は、ラヴォアジエの精気を僅かに甦らせた。

「どうやら天は、まだわたしを楽にさせてくれないようだ。落雷の熱を火種として、消えかかっていたわたしの炎は不完全ながらも復活した。生きてこの先わたしに何をしろと言うのか、まったく理解に苦しむが、それでも足掻くことが天より課せられたわたしへの宿命であるならば、残り少ないこの命、尽き果てるまで業火に身を委ねるのも悪くないかもしれぬ。【火の神】と同化したわたしが今できることは、ただ一つ……」

ラヴォアジエは夜空を埋め尽くす雷雲を見上げ、激しく燃え上がっている大きな翼を広げた。

その姿を見たトウエインは、長刀を杖代わりにして立ち上がり、コルベットに対して大声で叫んだ。

「奴はもう虫の息だ、全員で総攻撃をかける！ 絶対に奴を空に飛ばせるな！」

その声に隊士たちは、即座そくざに各々の武器を構え直し、ラヴォアジエに照準を合わせた。

彼らがその攻撃を開始すると同時に、炎に身を包んだラヴォアジエは夜空に舞い上がった。

激しく飛び交う数多の攻撃をその身に受けながらも、ラヴォアジエは炎の塊となって、雷雲の中に消えた。

「くそつ、やられた。【火之夜藝ひのやま】の力を使いながら天高く舞うということは、次は間違いなく【八十禍津火やそまがつひ】が来る」

トウエインはどつと吹き出る冷や汗を感じながら、雷雲に向け攻撃を続ける隊士たちに急ぎ指示を出した。

「全員退避！ すぐに上空からラヴォアジエの無差別攻撃が降り注ぐはずだ。避ける以外に奴の攻撃から身を守る方法は無い。集中力を極限まで高め、空からの攻撃に備えろ！」

その叫びが終わらないうちに、一本の巨大な炎の矢が雷雲の中より目にも止まらぬ速さで現れ、地面に激突した。

爆発音がするとともに、炎の矢が落ちた周囲は一瞬で全てが蒸発した。

その破壊力の凄まじさに、王国最高の戦士たちは身を強張こわばらせた。雷雲からは、第二、第三の炎の矢が大地に降り注いだ。

一瞬で全てを蒸発させるほどの高熱で迫り来る矢から、現場にいるコルベットや研究所の警備兵たちは必死の思いで逃げた。

降り注ぐ炎の矢は止まるとどことを知らず、まるで【炎の雨】が降っているかの如く、その数を増加させた。

雷雲の下、炎の矢に打たれる研究施設は次々と蒸発しその姿を消

していった。

そして80本目の矢が雷雲より放たれると、ようやく攻撃は停止した。

地獄絵図の様な凄まじい八十禍津火の攻撃は、王国の英知が結集した数々の研究施設を無残なものへと変えた。

特に1号棟があつた場所から直径百メートルの範囲は、ほぼ全ての建造物が消滅し、まるで野戦場の様な荒れ果てた大地の姿へと変貌していった。

雷雲の中から豪雨と共に、ラヴォアジエがゆっくりと舞い降りて来た。

明らかに疲弊した姿を見せるラヴォアジエであつたが、壊滅したエクレイデス研究所の姿を確認すると、最後の力を振り絞るように、その大きな翼を羽ばたき、南方へと飛び立った。

「南に向かうということは、羅城門にいるヤツが持つ【鏡】は本物か……」

なんとか八十禍津火の攻撃をかわしきつたトウエインはそう呟くと、飛んで行くラヴォアジエの姿を見ながら、悔しさで唇を噛みしめた。

数多くの者が炎に焼かれ命を落とす中、コルベットの隊士たちだけは持ち前の集中力と身体能力の高さでラヴォアジエの攻撃を避けきり、全員無事に生き残ることに成功した。

悪夢のような惨劇から生き延びたことに、安堵の表情を浮かべる隊士たちであつたが、蓄積した疲労は極限に達していた。

そんな隊士の中で、一人飛び去つたラヴォアジエを追いかける者がいた。

トウエインは、右手首を抑えながら走り去るその隊士の姿を見つけると、彼に向かい大声で叫んだ。

「行けテスラ！　そして全てを切り捨てて来い！」

南方から吹き荒れていた風は、いつの間にか逆方向の北方からに、

その向きを変えていた。

生き物の様に流れ動く雷雲は、南の空の天候をさらに悪化させているように感じられた。

止むことを知らない落雷と豪雨は、宿命の扉を強引に抉^くじ開けられた天が、まるで悲鳴を上げ泣いているかの様であった。

惨雨の羅城門

嵐の中に見える羅城門らじょうもんは、まるで地獄につながる巨大な入口が開いているかのようには、不気味にそびえ建っていた。

羅城門は首都ルヴェリエの中央を、南北に貫いた大通りに構えられている凱旋門がいせんもんであり、ルヴェリエ中心部の正門ともいべき門であった。

羅城門は数百年前に他国との戦で勝利した王国が、その勝利を讃えるために建設した記念碑的建造物であり、普段は首都の顔として、数多くの観光客で賑わっていた。

しかし多数の兵士と警察部隊によって取り囲まれた雷雨の中の羅城門に、そんないつもの賑やかな面影はまったく感じられず、むしろ物々しい異様な雰囲気おもかげに包まれていた。

すでに羅城門の上層階では、立て籠もった【腐った羊】の顔をもつヤツと、リュザック率いるトランザムが激しい戦闘を繰り広げていた。

案の定、隊士たちの持つ電子兵器は機能せず、また蓄電池内臓の非常灯以外の照明が全て消えていることで、窓の少ない羅城門内部は非常に視界の悪い状況であった。

その中で王国最強と謳われる隊士たちは、劣勢を余儀なくされていた。

過酷な状況がそうさせた原因の一つであるが、たとえその状況が改善されたとしても、決して戦闘がトランザムに対して有利に働くとは考えられないくらい、今戦っているヤツは尋常でない強さを見せていた。

ただでさえ超人的な身体能力を持つヤツであるが、羊顔のヤツは特に足が速く、トランザムの隊士たちは、その異常とも言えるスピードに、まったく着いていく事が出来なかった。

トランザムが羅城門に突入した当初、遭遇したヤツは逃げ惑うば

かりで、まったく攻撃を仕掛けてこなかった。

まるで時間稼ぎでもしているかの様なヤツであったが、6時を過ぎたころから急にその態度を一転させ、トランザムに襲いかかった。羅城門の上層階は広いホールの様な空間に、無数の柱がところ狭しと立ち並んでおり、その柱を俊敏なフットワークですり抜けながら、ヤツは一人、また一人と確実にトランザムの隊士を蹴散らした。徐々に戦力を削がれていく中、トランザムを指揮するリュザックは、それでも今何をすべきか、何ができるのかを懸命に模索しつつ、雑音混じりのインカムを通して隊を指揮し、どうにかヤツの攻撃を堪えていた。

まだ戦えるトランザム隊士の数は、リュザックを含めわずか4人になっていたが、それでも彼の臨機応変な戦術と、その指示に瞬時に対応する最強の戦士たちによって、どうにかヤツを羅城門に閉じ込めていた。

まったくその動きに着いていけないまでも、戦闘が長引くにつれ、リュザックはヤツの特徴をとらえつつあった。

ヤツは城内を時計回りに周回しながら、四か所ある出入り口に配置している隊士たちに攻撃をしかけていた。

（逃げてたと思ったら、突然向かって来やがって。まっこと意味がわからんが、現時点でヤツは羅城門からの脱出を図っているのは確かなようだ。だがここまでコケにされて、ただで逃がすわけにはいかんだでよ）

ヤツがまだトランザムから逃げ惑っていた時、異常なほどの足の速さに気づいていたリュザックは、その能力を殺すための即席のトラップを城内のいたるところに仕掛けていた。

特に出入り口付近には強大な威力を発揮するトラップを仕掛けていたことで、ヤツは未だ脱出できずにいた。

（どうにか上手くいつてるでよ。手榴弾にワイヤーをつけただけの簡単なトラップで、ヤツをこれほどまでに繋ぎ止めておくことがで

きるとは、嬉しい誤算だ。じゃがヤツを足止めするのが精一杯で、その後の一手がまったく打てんで。やられた隊士たちもまだ息は有りそうじゃが、救助することもできんし、さてどうしたもんか）
手持ちの武器でどうにか善戦するも、その後の打開策がまったく考え付かないリュザックは頭を悩ませた。

ただそれと同じく、ヤツもその動きを止めていた。
音速に近いスピードを有するヤツであったが、至る所にしかけられたトラップに嫌気がさし、無暗に動くことを止め暗闇の中にひっそりと身を隠していた。

非常灯の明かりのみという視界の悪い状況はヤツにとっても同じであり、かつ巧みに仕掛けられたトラップを見抜くことは不可能であった。また雷鳴と豪雨の音が聴覚をも狂わせていた。

それでもヤツは持ち合わせる人の数倍の身体能力の中で、嗅覚に神経を集中し、硝煙の臭いが籠った城内で、隊士たちの放つ血と汗の臭いを的確に嗅ぎ分けようとしていた。

（姿は見えなくても、ヤツの殺気がビンビンに伝わってくる。このまま手をこまねいているだけじゃ埒があかんし、一か八かこっちら動くしかないか……）

リュザックは手動に切り替えたマシンガンを構えながら、ゆっくりと腰を上げた。

「全員聞こえるか」

インカムを通し、リュザックは残る三人の隊士に指示を出した。「作戦コード【グリーン】で行き。戦闘隊形は【モスキートン】だ。もし上手く行かんで、俺がやられたら即座に撤退するだ。なかつこ付けて無駄死にしたところで、だれも褒めてくれんでよ」

そう言うところリュザックはインカムを外し、腰に着けていた小型のバックの中より、顔をすっぽり覆うマスクを取り出し装着した。

トラップで仕掛けられたワイヤーは、微小であるが自ら赤外線を発する特殊な繊維でできていたため、マスクに取り付けられたレンズを通すことで、暗闇の中でも正確にその位置を把握することがで

きた。

リュザックは徐にホールの中央に向かって駆け出した。至る所に仕掛けられたワイヤーを避けつつも、まるでそれらが存在しないかの様に彼は平然と走った。

そんなリュザックの動きに釣られるように、息を潜めていたヤツが猛然と動き出した。

リュザックに向け直線的に駆け込むヤツは、いくつかのトラップを誘発させたが、その衝撃に構うことなく彼に向け猛スピードで駆け寄った。

リュザックまであと数メートルという距離まで近づいたヤツは、直線的だった動きを止め、彼の後を追う様に、その行動を変化させた。

ヤツはスピードを緩めながらも正確にリュザックの後を追いつ、その距離を確実に縮めた。

（対応の早い奴だでよ。俺がトラップを避けながら進んでいることを理解しているようだでな。だが……）

自らの後を正確に追うヤツに対して、リュザックは玉型兵器を放り投げた。

その玉を息を殺し潜むトランザム隊士の一人が、マシンガンで正確に打ち抜いた。

打ち抜かれた玉は激しく爆発した。

ヤツはその衝撃を背中で受け流すと、何事も無かったかのようにリュザックを追った。

リュザックはさらに二つ目、三つ目と玉を投げた。

潜む隊士たちはそれらの玉に照準を合わせ、確実に打ち抜いた。

爆発が起きる度に少しスピードを遅らせるヤツであったが、それでもリュザックとの距離はあと一步と言ったところまで近づいていた。

ヤツは剛腕を振り上げた。

リュザックは背中でのその殺気を感じると、左手にあった柱の足元に頭から滑り込むように飛んだ。

ヤツは振り上げた剛腕を、リュザックが身を隠したその柱に向け構うことなく放ち、粉々に破壊した。

柱の破片が飛び散る中、ヤツの顔面に向け一つの玉が投げつけられた。

ヤツは瞬時に反転し、背中で衝撃を受け流そうとした。

「バツ！」

ヤツに向け投げられた玉は爆発することなく、代わりに振り向いたヤツの正面が激しく光った。

ヤツはたまらず目を抑え、大きく一步後退した。

リュザックはヤツが背中で爆弾の衝撃を受け流すだろうと、初めから推測していた。

一発目の赤玉が爆発した時、ヤツが思った通りの対応をしたのを確認すると、立て続けに赤玉を投げ、視界の悪い中ヤツに向け投げられた玉が全て爆弾だと思わせた。

リュザックはヤツの攻撃をギリギリのところまで避けると、振り向き様ヤツに向け最後の赤玉を投げた。

案の定ヤツは体を反転させ、背中で衝撃を受け流そうとした。

しかし赤玉に対して発砲は無く、代わりにリュザックは素早く短刀を抜き、足元にあつた一本のワイヤーを切断した。

ワイヤーは閃光弾を発光させるトラップであり、ヤツの振り向いた正面を激しく光らせた。

低い唸り声を上げながら後ずさるヤツに向かい、今度はリュザックのほう走りだした。

投げ落ちた最後の赤玉を拾い上げながら、彼はマシンガンを連射しつつヤツに駆け寄った。

目が眩んだ状態でありながらも、ヤツは持ち前のスピードで駆け出し、マシンガンの攻撃をギリギリのところまで避けた。

一時的とはいえ視界を潰されたにもかかわらず、ヤツの動きにはキレがあつた。

一度は後退したヤツだが巧みなフットワークを披露しつつ、リュ

ザックとの間合いを一気に詰めた。

リュザックは素早く柱に身を隠したが、それよりも早くヤツは彼の後ろを取った。

ヤツは剛腕を振り上げた。

リュザックは振り返ることなく、手にしていた玉を後方にいるヤツに向け投げた。

ヤツは軽く目を押さえながら反転した。

「パシユッ」

潜むトランザム隊士の発砲によって、リュザックの投げた玉は小さな音を立てて破裂した。

その玉からは、薄い煙が拡散した。

「グオオオオ！」

ヤツは立ち込めた煙の中で、苦しそうな呻き声を上げた。

短刀を手にしたリュザックは素早く柱の陰に身を隠し、3本のワイヤーを握りながら言った。

「よう見んからそうなるんじゃ。今のは爆弾でも閃光弾でもない、【緑玉】の催涙弾ださいるいだんだよ。もともと暗闇の中で正確に俺たちを蹴散けちらせたのは、視覚以外の感覚を鋭く働かせていたからじゃ。初めからそつちを潰すつぶのが狙いねらいだでな」

呼吸を荒げながら後ずさるヤツに対し、リュザックはさらに続けた。

「冷静に考えてみるで。この至近距離しきんで爆弾なんぞ投げたら俺自身まで壊れちゆうに。俺はそれほど自己犠牲する性格じゃあないんでな。それに閃光弾とて、そう何度も連発したところで効果が無いこともわかちゆうるきのう。そう言えばお前が今立っちゆう場所じゃが、俺の記憶が当たっちゆうたなら、そこは一番危険な場所だでよ」

「！」

リュザックは握っていた3本のワイヤーを、躊躇ためらうことなく切り捨てた。

「ズガガガーンン！！」

大爆発が起きるとともに、ヤツは激しく吹き飛んだ。

ヤツが立っていた床には、大きな穴が開いた。さらに爆発の衝撃で、城内のスプリンクラーが稼働を始めた。天井から激しく降り注ぐシャワーに濡れながら、リュザックは倒れているヤツを注意深く監視した。

うつ伏せに倒れるヤツからは、まったく動く気配が感じられず、目も閉じているのが分かった。

リュザックが装着していたマスクは、暗視機能が備わっているのと同時に防毒マスクにもなっていた。

催涙ガスが立ち込める中、彼は背負っていた小型のグレネードランチャーを、微動だにしないヤツに向け構えた。

（羅城門は王国の文化的な建造物でもあるき。被害はなるべく小さくしよう思うちよつたが、そんな心配してる余裕無いき。ましてこがい大きな穴開けてしまつちやあ、もうどうにでもなれだでよ」
グレネードランチャーには強力なナパーム弾が装填されており、リュザックは狙いを定めながら、引き金に掛ける指先にゆっくりと力を込めた。

だがその時、彼はヤツがカツと目を見開いていることに気付いた。

リュザックは背中にどつと冷たい汗を掻いたが、構うことなく引き金を引いた。

ナパーム弾はヤツに向け発射された。

ヤツはうつ伏せの状態から一気に真上に飛び上がり、その攻撃を避けた。

避けられたナパーム弾は城内の一部を破壊すると同時に、その周囲を激しく炎上させた。

勢い良く燃える炎は、暗闇だった城内を一転にして明るくさせた。そしてスプリンクラーから降り注ぐ大量の水は、いつしか室内に充滿していた催涙ガスを消し流していた。

（まさか、ヤツはこれを狙ったのか！）

顔を蒼白蒼白に変えたリュザックは、炎の明かりを背に立つヤツを呆然ぼうぜんと見つめた。

トラップの爆発で激しく吹き飛んだはずのヤツの体には、傷一つ刻まれていなかった。

「ダダダダッ」

三方向からトランザムの隊士による、マシンガンでの一斉攻撃が始まった。

「何をしちゆうバカ野郎どもが！ 作戦は失敗じゃで、全員逃げるでよー！」

リュザックの叫びを無視するように、隊士たちは攻撃を続行した。マシンガンの銃弾と共に、ヤツに向け何発ものナパーム弾が打ち込まれ、城内は火の海と化していった。

しかしトランザムによる必死の攻撃は空しく、ヤツはあざ笑うかのように、それらの攻撃を容易に避けた。

目で追うことすら困難なスピードで迫り来るヤツに対し、懸命な攻撃を続けるトランザムの隊士たちであったが、悔むなしくもその動きについていくことが出来ず、次々と蹴散らされ意識を失っていった。

ヤツは残る一人となったリュザックに、猛然と襲い掛かった。

リュザックはそんなヤツに向け、必死にマシンガンの引き金を引いた。

ヤツはリュザックの周囲を猛スピードで周回しながら、マシンガンの弾丸を掻い潜りつつ、彼の背後に迫った。

リュザックの背後を取ったヤツは、間髪入れずに彼に向け剛腕を振り下ろした。

「ズドン！」

鈍い音を立て、ヤツは勢い良く床に叩きつけられた。

リュザックはコマの様に体を回転させ、振り下ろされたヤツの腕を掴み取り、そのまま背負い投げを浴びせた。

即座に腰の刀を抜き、倒れているヤツに向けその刀を突き刺す。

体を捻りヤツは紙一重で突きを避けたが、少し体勢を崩しながら後退した。

リュザツクは攻撃の手を緩めることなく、ほんの少し隙の生まれ
たヤツに対し、最後の赤玉を投げつけ、素早く構えた小銃をその玉
目掛けて発砲した。

「ズツガン！」

赤玉は激しく爆発したが、その衝撃をまたも背中で受け流したヤ
ツは体勢をすぐ様立て直し、目にも止まらぬ早さでリュザツクの背
後に回りこんだ。

そんなヤツの動きを先読みした彼は即座に刀を掴み、振り向き様
に切りつけた。

「ガッ」

リュザツクが渾身の力で繰り出した一撃を、ヤツは分厚い皮をも
つ素手で刀身ごと握り掴んだ。

びくともしない刀に、リュザツクは苦笑いを浮かべた。

ヤツは刀を放すことなく、リュザツクの腹を蹴り上げた。

反射的に後方に飛んだリュザツクであったが、衝撃を緩和させる
には至らず勢い良く吹き飛んだ。

彼の体は羅城門を支える最も太い支柱に直撃し、その勢いを止め
た。

リュザツクは大量の血反吐を吐きながら、崩れるように腰を落と
した。

「ま、参ったで。あれだけやって、まったくダメージを与えられな
いっちゆうことは、もう打つ手なしだだよ……」

マスクを外しながら、リュザツクは力なく呟いた。

そんな状態のリュザツクの元にヤツはゆっくりと近づいたが、ま
るで何かを探すように炎上する城内を注意深く観察していた。

そんなヤツの仕草をリュザツクは不思議に感じたが、どうするこ
ともできずにいた。

ヤツはリュザツクまで数メートルの場所まで近づいたとき、散乱

した瓦礫がれきに埋うもれる【何か】を見つけ、歩みを止めた。

無造作に瓦礫を持ち上げ、ヤツはその下から薄い青緑色をした何かを取り出した。

そして破損箇所の有無を調べるように、ヤツは手にしたそれを丁寧に眺めた。

リュザックにはそれが、人の頭部ほどの大きさをした【鏡】のよう
うに思えた。

危機的状況であるのにもかかわらず、人外の化け物が古めかしい鏡に見入る姿をどことなく滑稽こっけいに感じた彼は、無意識に微笑えみを浮かべた。

そんな彼の表情に気づいたのであるうか、再び歩き出したヤツはリュザックの目の前でその足を止めた。

幾度いくどの死線を潜り抜けてきたリュザックであったが、この時ばかりはさすがに死を覚悟した。

「確かに王国最強と言われるだけはある」
ヤツはリュザックを見下しながら話し出した。

「我の殺すつもりで繰り出した攻撃を、お前たちは機敏きびんにも受け流し、致命傷だけは避けた。貴様以外の全員が意識を失っているであるが、恐らく死んだ者は居るまい」

「だったら何ぜ。生きていようが手も足も出せんことに代わりないですよ。ほれ、さっさと殺れや」

リュザックは、ヤツの目を直視しながらそう言った。

「生き恥ひがを晒すより、戦士としての死を選ぶか。見事なものだ。我も元軍人であっただけに、その思いは良く理解できる。だが……」

そう言うなり、ヤツはリュザックの顔を覗のぞき込むように低く屈かがんだ。

「貴様はこれが何だか知っているか」

ヤツは手にしている鏡を、リュザックの目の前に差し出した。

突然切り出された訳のわからないヤツの問いに、リュザックはどうでもいいと言わんばかりに吐きすてた。

「何じゃそりゃ、化け物が骨董品集めか。変わった趣味しちよるのう」

「これは【天照の鏡】の一つだ」

「！？」

天照の鏡。それは神話にて女神ヒュパティアが生み出した、燦貴神と呼ばれる三体の獣神を封印したとされる、伝説の神器である。突拍子の無いヤツの話に、リュザックは半ばあきれれる思いであった。

「バカバカしい。天照の鏡など、お伽噺の中に出てくる架空の鏡だ。じゃが仮にそれが本物だとして、お前はそれを使ってここで何をしちゆうつもりかえ」

「【朔】の刻、つまり新月の生まれる時刻に神の封印されし【四つ】の天照の鏡を、それぞれ王国のある場所に掲げると天より光の矢が放たれる。この羅城門がその場所の内の一つなのだ」

「ハッ、ますますあきれれるですよ。天照の鏡は燦貴神を封印した三つの鏡だ。それに光の矢なんぞ放って何をどうするんじゃ。神話と違ってこの世に【神】などおらんきの！」

語尾を強めて言い放つたりユザックの言葉を聞きながら、ヤツはゆっくりと立ち上がった。

「この鏡は神話に隠れた四つ目の鏡。暗闇の城内に落としてしまい、搜索のためにどうにか明かりを灯そうと、貴様らの力を利用してもらった」

「ずいぶんと乱暴だな。何発もの爆弾とナパームで、探し物が壊れると思わなかったかえ」

「正直このような鏡どうなっても良いのだ。我の故郷であるパーシヴァルは、この鏡によって散々な目に遭わされた。そして今日の【賭け】にも失敗した。だがどうしても放っておくことができなかつた……」

そう言いながらヤツは振り返り、トラップの爆発で大きく口を開けた床の穴に向かい歩き出した。

「ちよつ、どこに行くき。俺はまだ生きてるだでよつ」

止めを刺すことなく離れていくヤツの背中からは、何とも言えぬ切なさが感じられた。

「先にも言つたように、我は貴様たちを殺すべく腕を振るつた。だが貴様たちはそれを実力で避け、生き延びた。目くじら立てて死に急ぐことはあるまい。我の様な者が言うのもおかしなものだが、命はかけがえの無いものだ。こんな姿ではあるが、我にも愛する家族がいる。もう二度と会うことは無い、いやこんな姿では会うことは出来ない。それでも生きていれば、生きてさえいられれば、想いは届くと信じている……」

リュザックは何も言うことが出来ず、立ち去るヤツをただ茫然と見ていた。

ヤツは大きく開いた床の穴に着くと、手にした鏡に向かい小声で語りかけた。

「済みませんボーア將軍、残念ながら作戦は失敗です。残ったのはこの忌まわしい鏡だけ………ん！」

何かを察したヤツは、咄嗟に大きくジャンプし穴から遠ざかった。同時にポロボロの赤い制服に身を包んだ一人の隊士が、長刀を振り抜きながら穴の中から飛び上がった。

間一髪その隊士の繰り出した斬撃を避けたヤツであったが、不覚にも手中より鏡をすべらせ、穴の中に落としてしまった。

目つきを変えたヤツは、正面で長刀を正眼に構えた隊士を鋭く睨み付けた。

「まだ動ける者がいたか！」

ヤツの放つ凄まじい殺気を真正面から受けつつも、紫色に輝きだした長刀を構えながらその隊士は言った。

「五重塔にいたヤツは俺が殺つた。『お前から全てを聞け』、それが牛顔のヤツの遺言だ」

「ほう、貴様の様な小僧が【ディラック】を倒したというのか。嘘

をついている様には見えぬが、信じられんな。ならばそれが本当か貴様の力を我に示し、その強さで真か否か証明してもらおう！」

羊顔のヤツが放つ猛烈な威圧感まことは、まるで水の中いなにいるのではと錯覚するほど息苦しく感じられた。

（こいつは牛顔のヤツよりも更に桁けたが違う。体のことなんか考えられないか！ 初めから全開だ！）

手首にあるダイヤルを一気に捻ひねり、剣先に集中力を高める隊士。稜威之雄いつのおはより覇走は次第にその紫色の輝きを増していく。

「さあ来い小僧！ 話が聞きたいのなら、我を納得させられるだけの強さを見せてみる！」

「うおおおお！！」
目いっぱい床を踏ふみこ込み、ジュールはヤツに向け突進した。

スーツの能力を6.5倍にしたジュールの動きは、人間が発揮できる身体能力の限度を遥はるかに超えていた。

瞬まはたきするよりも早くヤツの懐ふしころに飛び込んだジュールは、そのままの勢いで鉄の様に硬い腹に蹴りをねじ込んだ。

激しく吹き飛んだヤツの巨体は、そのまま羅城門の側壁に激突した。

「グフツ」

ヤツはジュールの動きに驚いたが、腹を抑おさえつつも次の攻撃に備そなえた。

ジュールは更に強く床を踏込み、凄まじいスピードで稜威之雄覇走をヤツに向けた。

ヤツもまた床を強く踏込み、横に飛ぶことでジュールの攻撃を何とか避けた。

ジュールの繰り出した稜威之雄覇走の突きは、羅城門の側壁の一部を消滅させ、大きな穴を開けた。

ヤツはジュールの背後に回り込み、彼の頭部めがけて鋭い手刀を突き出した。

振り向きざまに頬ほおをざっくりと切り裂かれつつもその攻撃をかわ

したジュールは、そのまま長刀を振り抜いた。

ヤツは反射的に後方にジャンプし、斬撃を避けた。

ジュールは間髪入れず、稜威之雄霸走で攻撃をしかける。

その長刀の恐ろしい威力を察したヤツは、またらず柱に身を隠した。

それでもジュールは構うことなく、その柱ごと薙ぎ払う様に長刀をヤツに向け切りつけた。

塵となり、消滅する柱。

ジュールは振り向き様に、回し蹴りを繰り返した。

ヤツは斬撃をかわし、音速でジュールの背後に回り込んだが、彼の先読みした強烈な蹴りが顔面に直撃した。

「ガクッ」

ヤツは蹴りの衝撃で膝を落とした。

ジュールはそんなヤツに、息をする間も与えぬよう長刀で切りつけた。

避けられないと感じたヤツは無理な体勢でありつつも逆に踏込み、ジュールに体当たりすることで刀をかわした。

今度はジュールが吹き飛んだ。

そんな彼を追う様に、ヤツは床を蹴り飛んだ。

迫り来るヤツに対し、ジュールは吹き飛んでいる状態でありながらも長刀を柱に突き立て、無理やり体勢を変えた。

唸りを上げてヤツの剛腕がジュールに襲いかかる。

「ズガッ！」

鈍い音とがするとともに、ヤツの巨体はそれまでと反対方向に吹き飛んだ。

ジュールはヤツの攻撃に対して、右拳での渾身のカウンターを浴びせていた。

「ハアハアハア」

片膝を着き息を荒げるジュールは、少し輝きの衰えた稜威之雄霸走を再度握り直した。

そんな彼に対し、羊顔のヤツは驚きの表情を隠せず^{おひ}にいた。

まさに一瞬の出来事であった。

ジュールとヤツの激闘を目の当たりにしたリュザックは、現実味のない現状に気持ち^{こころ}が追いつかず^おにいた。

（何じゃこりゃ。何もかもが速すぎて、何が起きているのかさっぱり分からんき。ジュールの奴、突然現れたかと思つたら、あの化け物と互角にやりおうちよる。それに……）

ジュールの顔は、頬^{ほお}を切り裂かれたことで血だらけになっていた。互角^{こかく}の戦いを繰り広げつつも危機的状况に変わ^かりない中で、血に染まったジュールの顔からは、なぜか薄らとした笑みがこぼれていた。

まるで修羅^{しゆら}にでも化^くしたかのようなジュールの姿に、リュザックは恐怖に近い違和感を覚えた。

（これじゃどつちが化け物^まが分からんぞよ）

そんなことを思うリュザックを余所^{よそ}に、ジュールとヤツの激闘は続^つく。

間合^{まあ}いを徐々に詰めながら、二人の距離は縮んでいった。

人間であるはずのジュールの動きが常識の範囲を遥かに超えていることに、ヤツは少し戸惑っていた。

「ディラックを倒したというの^のは本当のようだが、いかにアダムズの科学技術が優れているとは言え、人である貴様の動きは異常過ぎだ。我の音速の領域について来れる人間など、存在するわけがない。貴様本当に人間か！」

「へっ、化け物のお前に化け物呼ばわりされたくないぜ。まあ驚くのも無理はないだろうが、これがアダムズの進歩^{しんぽ}つてやつさ。少々体には堪^{こた}えるがな」

「それにしても有りえぬ動きだ。たとえ肉体の持つ力を助長するシステムがあつたとしても、これほどの動きをすれば、体自体がもたぬはずだ」

「なんだお前、科学者か？ それとも俺の体を心配してくれているのか。だが今は一々細かいこと気にしていられる状況じゃないだろ。初めから無理を承知でこっちは全開くれてんだ！。化け物のくせに、ずいぶんと常識だなっ」

ヤツはジュールの言葉に、並々ならぬ強い意志を感じた。

「まだ若いがさすがトランザムの隊士だけはある。相当の覚悟が出来ているようだ、失礼した。無謀とも言える貴様のその覚悟に報いるよう、我も惜しむことなく全力で立ち向かおう！」

ヤツはまたも激しい威圧感を放ち、城内を殺気で溢れさせた。

言葉とは裏腹に、ジュールの体は悲鳴を上げていた。

右目の不思議な力で五重塔での激闘のダメージが緩和されたとはいえ、完全に回復していない状態で再度スーツの能力を引き上げ戦った衝撃は、尋常なものではなかった。

（何とかヤツの動きについていけるのは、稜威之雄覇走を避けるためにヤツが間合いを広くしているためだ。これを有効に利用したいが、そう長く体がもちそうにない。どうすればヤツの動きを止められるんだ）

考えを巡らせるジュールに対し、今度はヤツが瞬きするよりも早く彼の目の前に迫った。

ジュールは必死に長刀を振ったが、それよりも早くヤツの蹴りが彼の腹に叩き込まれた。

吹き飛ばすジュールの体は数本の柱をなぎ倒し、側壁に激突してその勢いを止めた。

「ゲハッ」

真っ赤な血反吐を吐きつつも、ジュールは即座に立ち上がり長刀を構えた。

ジュールは全身に耐え難い激痛を感じながらも、音速で迫るヤツに稜威之雄覇走を向けた。

だがヤツはジュールの間合いを完全に把握していた。

ジュールの繰り出した斬撃をヤツは完璧に見切り、数ミリの距離

でかわすと、そのまま彼の顔面を蹴り上げた。

蹴りの衝撃によってジュールの体は天井に叩きつけられると、その反動によって床にまで叩きつけられた。

全てが即死に値する衝撃にもかかわらず、ジュールはどうか意識を保っていた。

長刀を杖代わりにし、ふらつきながらも何とか立ち上がったジュールに対し、ヤツは声高らかに言った。

「まだ死なぬとは恐れ入る。しかしそろそろ限界のようだな。貴様の人間離れした強さはよく理解できたが、我を納得させるための何かが足りぬようだ。残念だが全てを話すには少々値しないようだな」
「ハアハア、とつと終わらせてジنگスカンでも食いに行こうと思ったが、質の悪い牛肉で腹がいっぱいらしく、調子がいまいち上がらないぜ」

「フン、まだそのような減らず口を吐けるとは見上げたものだ。腹が膨れて動けないのなら、腹減らしにダンスでも踊ろうか！」

ジュールの視界からヤツが消えた。

次の瞬間、ジュールは背中に蹴りを浴びせられ、前方に吹き飛んだ。

背中を蹴られたはずなのに、ジュールの目前にヤツの姿が現れた。音速で走るヤツは、吹き飛ぶジュールの先回りするように移動した。

胸を蹴られ、ジュールの体は後方に弾け飛んだ。

トップスピードまで加速したヤツより繰り返される連続攻撃に、ジュールは成す術がなかった。

前後左右に、まるでダンスを踊っているかのように、ジュールの体は空中を弾んだ。

そして10発目の蹴りを入れる瞬間、ヤツは冷たく言い放った。

「これで終わりだ」

ジュールの脇腹に、ヤツの渾身の回し蹴りが叩き込まれた。

吹き飛んだジュールの体は、羅城門中央の太く大きい支柱に激突

した。

「ドサツ」

ジュールの体が床に倒れ込む音が周囲に響いた。

支柱の袂たもとにいたリユザックは、確実にジュールが死んだと思い込み、目を背けた。

城内は一瞬凍りついたように静まり返ったが、その静寂せいじやくを切り裂くようにヤツが叫んだ。

「どういうことだ貴様！」

荒げるヤツの声に、リユザックは顔を上げた。

そこには見るに萎たえないほどボロボロになりながらも、立ち上がるジュールの姿があった。

ジュールは笑っていた。

血と埃ほこりで汚れきった顔に浮かび上がるその表情は、まるで絶体絶命の窮地きふうちを楽しんでいるかの様であった。

「小僧！ なぜ生きている。なぜ生きていられるのだ！ 我の攻撃は、その一撃が万死ばんしに値するものぞ！」

満身創痍まんしんそういのジュールよりも、圧倒的な強さを見せるヤツのほうが明らかに動揺どうようしていた。

そんなヤツを余所に、ジュールは自らに不思議な感覚を感じていた。

（体が言うことを聞かず、ヤツの動きにもまったくついて行けない。後はただ殺られるだけのはずなのに、殺られたほうが楽になるのに、それなのに何なんだこの気持ちの高ぶりは。ヤツの攻撃を受ければ受けるほど、体を感じる激痛が大きくなればなるほど、気持ちの中で訳の分からない高揚感がどんどん高まってくる！）

そんなジュールを睨みつけるヤツの顔は、憤怒ふんぬの形相かたちと化ましていった。

「認めぬぞつ、決して認めぬ！」

そう吐きすてたヤツは音速でジュールに突っ込み、彼の顔面めがけて鋼鉄の様な拳を渾身の力で浴びせた。

「ガンー!!」

ジュールは唸りを上げる大砲の様な拳を、輝きの消えた稜威之雄
霸走で受け止めた。

ヤツの繰り出した渾身の一撃を受け止めたジュールの体は、微動
だにしなかった。

「有りえぬっ、有りえぬぞ小僧！ この一撃は私の持ち得る最大の
攻撃だっ！ 人の身で受け止めることなど不可能。まして貴様の様
な半死人が受け止めるなど、絶対に有りえぬことだ！」

ヤツは奥歯を食いしばり、さらに力を込め強引に拳を振り抜こう
とした。

それでもジュールの体は動くことなく、むしろ少しずつであるが、
逆に押し返されはじめた。

「バ、バカな」

「うおおおおあぁっ」

唸り声を上げたジュールは、拳ごとヤツの巨体を吹き飛ばした。
後方に飛ばされたヤツはすぐに体勢を立て直したが、ジュールを
鋭く睨みつつも動くことが出来ずにいた。

ジュールに対し、ヤツは恐怖に近い感覚を覚えた。

ヤツの目に映るジュールの姿は、まるで生きた鬼を食らう【修羅】
そのものを感じられた。

そんなジュールの右目は眩いばかりの青白い光を放ち、激しく輝
いていた。

リュザックもまた、ジュールの異変に恐怖を感じていた。

それでも後輩隊士が必死に戦う姿に、何かできないかとジュール
に近づこうとした。

そんなリュザックを制止させるため、ジュールは手のひらを彼に
向けた。

「ジュール、お前」

「リュザックさん、もっと離れた場所に隠れていてください。」

もうあなたに出来る事は何もありません」

有無を言わさぬその言葉に少し躊躇うリュザックであったが、渋々と城内の隅に移動した。

「なるほど、そういうカラクリか。貴様が月読の胤裔であったか。どうりで人間離れしているわけだ。全てを話せとディラックが何故言ったのか、ようやく理解できた」

羊顔のヤツはジュールの右目の輝きを見ることで、その異常な生命力に納得した。

ただジュールから感じる恐怖感は、留まるどころか更に高まりを見せていた。

「もういい、話は無しだ。頭が張り裂けるほど痛くて何も話したくない。お前を殺し、それで終わりだ」

ジュールは意味も無く湧き上がる、歪んだ衝動を抑えられずにいた。

激しい頭痛にも増し、目の前の相手を滅茶苦茶にしたくて仕方なかった。

そんなジュールの迷いのない殺気に対し、ヤツは逆に吹っ切れる思いがした。

「いいだろう！ 所詮私の寿命は幾らもない。ならば力の限りを出しつつ、戦士として貴様と相まみえようぞ！」

戸惑いの消えたヤツは、まるで大地が震えるほどの覇気を放出した。

「行くぞー！！」

そう叫んだヤツは、まさに音速を超えるスピードでジュールに向けて突進した。

ジュールは稜威之雄覇走を床に突き刺すと、ヤツの真正面に飛び、その顔面にカウンターの膝蹴りを叩き込んだ。

ヤツは凄まじい衝撃を受けつつもジュールの右足を掴み、強引に彼の体を側壁に向け投げ捨てた。

空中で身をひねり体勢を変えたジュールは、側壁に着地した。

その瞬間、彼は側壁に小型の玉をこすり付け、そのままヤツに向け跳んだ。

膝蹴りのダメージで足元がふらついているヤツに対し、ジュールは矢の様などび蹴りを入れた。

「メリメリメリッ！」

ジュールの蹴りが腹の奥にまで食い込みながらも、ヤツはその衝撃に耐えた。

ヤツはジュールの両足を掴むと、そのまま彼の体を振りかぶり、思い切り床に叩きつけた。

さらにもう一度ジュールの体を振りかぶると、今度はすぐ脇にあった柱に彼の体を叩きつけた。

「グハッ」

柱は粉々になり、ジュールの体は投げ捨てられ床に沈んだ。

だがヤツもまた、ジュールより受けたダメージによって膝をついた。

そんなヤツの足元に、小型の【青い】玉が転がった。

「ジュバツ！」

青玉は破裂するとともに、透明な液体を飛散させた。

「ギヤオオオオ！」

ヤツの悲鳴が城内にこだました。

青玉は強力な濃硫酸弾であり、ヤツの体に付着した液体は、その体を溶かすとともに激しい異臭を発生させた。

ヤツは尋常でない苦痛に、柱をなぎ倒しながらのた打ち回った。

ジュールは脳震盪を起こしつつも、そんなヤツを見ながら立ち上がった。

ふらつく足を一步一步踏み出し、彼は床に突き刺さったままの稜威之雄覇走のもとに歩み寄った。

「こ、小僧っ」

苦しみに悶えつつも、ヤツはジュールに向け突進した。

どうにか長刀にたどり着いたジュールは、見る影の無いスピード

で向かって来るヤツを確認すると、今度は小型の【灰色】の玉を取り出した。

彼は刀を床から引き抜くと、手にした灰玉を力いっぱい床に叩きつけた。

「ボンッ」

灰玉は煙幕弾であり、一瞬で城内は灰色の煙で包まれた。

ヤツは視界ゼロの煙の中で、ジュールがいたであろう場所に向け、剛腕を振り抜いた。

しかしそこにジュールの姿は無かった。

「これほどの煙幕では、小僧とて何も見えぬはず」

そう思った瞬間、ヤツは凄まじい衝撃をその巨体に受けた。

グレネードランチャーから発せられた強力なナパーム弾が、ヤツの脇腹に直撃していた。

ヤツの体は激しく燃え上がった。

次の瞬間、紫色に発光した長刀を振りかぶったジュールが、煙の中より現れた。

ギョツとしたヤツは瞬時に身をひねったが、ジュールはその右腕を肘のあたりから切り落とした。

ヤツは体勢を崩した状態のまま、一旦ジュールとの間合いを取ろうとした。

だがそれよりも早くジュールの蹴りが、ヤツの顔面に浴びせられた。

吹き飛んだヤツの巨体は床を転がり、吸い込まれるようにトラップの爆発で開いた大きな穴に落ちた。

「バシャーン！」

ヤツの落ちた下階は、上階で発動したスプリンクラーの大量の水が、床に開いた穴より滝の様に流れ落ちることで、浅いプールの様に水が溜まっていた。

そんな水たまりに落下したことで、ヤツの体を包んでいた炎は、ほぼ鎮火した。

水たまりから這い上がったヤツは、大の字に倒れていた。
ジュールはそんなヤツの巨体に馬乗りになり、その喉元に刃を突き付けていた。

「見事だ、月読の胤裔よ。いやグラム博士の子といったほうが良いか。どちらにしても、我の完敗だ」

ヤツは穏やかな声で続けた。

「硫酸弾を使ったのは我にダメージを与えるだけでなく、異臭を発生させることで、視界のない煙幕の中でも我の位置を把握するためであったか。さらに体を炎上させることで、より対象を正確に把握し攻撃を仕掛ける。見事な戦術だ」

「ナパーム弾は床に刺さった刀を引き抜きに行ったときに、偶然落ちていたのに気が付き使っただけさ」

「咄嗟の状況判断も大したものだ」

敵意が無いことを感じたジュールは、ヤツの巨体よりそっと起き上がった。

「済まないが、辛抱してくれ」

切り裂かれたヤツの右腕が原子分解し始めていることに気付いたジュールは、輝きの消えた長刀を振りかぶった。

「ズバツ」

ジュールはヤツの腕の付け根部分を切り捨てることで、原子分解している腕を切り離れた。

「恐らくこれで大丈夫なはずだ」

痛みを堪えるヤツに、ジュールは声をかけた。

「デリラックツって言ったか、あいつはこの剣で切られ死んだ。その死に様を見て分かったことだが、一度原子の崩壊が始まれば、その対象が完全に消滅するまで原子分解は止まることは無い。それを止める唯一の回避方法は、恐らく原子分解している部分を切り離すことだけだ。原子分解の原因は、稜威之雄霸走が放つ紫色の光のはず。ならば光の無い状態で切り付ければ、それはただの斬撃であり、崩

壊している部位を切り離すことは可能なはずだ」

静かに話を聞くヤツは、ジュールの後ろに落ちている【ある物】に気が付いた。

「……貴様のすぐ後ろに落ちているそれを取ってくれないか」

ジュールが振り向いた先に、薄い青緑色をした大きめの手鏡が落ちていた。

見た目通りにずっしりと重いその鏡には、数十匹の水蛭ヒルを象かたどった彫刻ほとこが施ほどこされていた。

ジュールは鏡を覗のぞき込んだが、それ自体は白くくすんでいたため、何も映し出すことは無かった。

彼は手にした鏡をそつとヤツに渡した。

「これは伝説に謳うたわれる天照あまてらすの鏡の一つで【死の鏡】と呼ばれるものだ。もともとこの鏡は我が故郷パーシヴァル王国に、古来より厳重に保管されていた宝物であり、今日に至いたる全ての元凶げんきょうであるものだ」

「ちょよ、ちょつと待ってくれ。話が唐突とつとつ過ぎて良く分からない」

より一層右目を輝かせながら、ジュールはヤツの話に唾つばを飲み込んだ。

「済まない。初めに言っておくが、我は元パーシヴァル軍副将で名を【ハイゼンベルク】と言う。ポーア將軍の部下であり、貴様が五重塔で倒したというディラックは、我が部下であった者だ。これより私の知りえることは全て話すが、元軍人ゆえ政治的部分や科学的な事は知りえていない。それは了承してくれ」

ジュールは黙もくって頷うなずいた。

「順序が逆になってしまいが、我らの目的を先に言っておこう。我らの目的はアダムズにいる【ある人物】の命を奪うばうことだ」

「ある人物？」

そう言つて、ジュールはまたも唾を飲み込んだ。

少し緊張した表情を浮かべるジュールに対し、ハイゼンベルクと名乗るヤツは躊躇ちゅうちゆすることなくその名を口にした。

「我らが命を狙う人物とは、このアダムズ王国の最高権力者である

【アルベルト国王】、その人だ」

「な、なにつ！」

ジュールの背中には、今まで掻いたことの無い汗がどっと噴き出
した。

凍解の事実

「アルベルト王は数年前より、パーシヴァルで開発された【とある技術】を欲していた。それが一体どんな技術なのかは我には知りえぬが、一つ分かつていることは、その技術はボーア將軍とグラム博士によつて生み出された画期的な技術であるということだ」

切り落とされた右腕を抑えながら、ヤツは自らの知りえる過去を話出した。

「もちろんボーア將軍とグラム博士は、その要求を拒否した。なぜならそれをアルベルト王に渡せば、間違いなく軍事目的に利用され、多くの者が傷つく事になると確信していたからだ。二人はその技術が有する様々な可能性や危険性を十分に把握していた。そしてアルベルト王の性格もよく理解していた。それは二人がかつて、アルベルト王の【弟子】として、共に研究に勤しんだ友人同士であつたらだ」

アルベルト王は王族でありながら、稀代の科学者と呼ばれるほどの高度な頭脳を持ち、様々な研究を行つていた。

また人材の育成にも長けていた王は、科学の発展には惜しみなく資金を投じた。

特に王立協会を通してエクレイデス研究所には、最先端の設備を有する数多くの施設を建設し、全国各地より集めた科学者をそこで競わせることで、さらにその中から優秀な科学者を誕生させていた。そんな科学者の中で特に秀でていたのが、現在【世界最高の天才】と呼ばれるラジアン博士、かつて【世界最高の鬼才】と呼ばれたグラム博士、そして【若きパーシヴァルの偉才】と呼ばれたボーアの3人であつた。

同世代ではあつたが、アルベルト王の提唱する科学的理論に惹かれたラジアン博士とグラム博士は、進んで彼の弟子となり、その理論を応用・発展させ、幾つも難解な研究を行いながら、新たな発明

を世に送り出して行った。

そしてポーアはそんな3人と親子ほど歳が離れていたが、早くよ
りその素質を認められた事と、その直向きな努力と兼ね備えた才能
で、彼らに劣らぬ科学者としての功績を残していた。

その中でも特にグラム博士とポーアは深い友好があり、歳の差に
関係なく【真の友】と呼べる間柄になつていた。

「グラム博士がアルベルト王の弟子であつたことは知っているし、
ポーア将軍が博士の友人であつた事も聞いている。だけど王が軍事
目的のために、かつての弟子が開発した技術とはいえ、他国のもの
を欲するとは思えない」

ジュールには、ハイゼンベルクと名乗るヤツの話が俄かに信じら
れなかつた。

確かにアダムズ軍に配備されている軍事兵器は、近隣の他国のも
のに対し数歩時代を先走る性能を誇つていた。

だがそれは兵器に留まることなく、一般生活で使用する様々な製
品も同様に進歩しており、決して軍事兵器だけが一人歩きしている
わけではなかつた。

何よりポーアの反乱を除けば、ここ数十年の間、戦争らしい戦争
は一度も起きていなかった。

それはアルベルト王が自らを生涯の科学者と明言する様に、現在
でも日々研究に勤しんでいる状態のため、戦争をする時間など見目
付かなかつたためだ。

また数年前にジュールは一度、アルベルト王に直接会つていた。

まだ軍の訓練所でトレーニングを積んでいたころ、たまたま見物
に来ていた王に声をかけられた。

その時の王の印象はとても穏やかであり、若い駆け出しの隊士た
ちに気さくに話しかけるその姿は、とても寛大に感じられ、ジュー
ルのみならず誰からも好感を持たれていた。

「ポーア将軍はパーシヴァルの王族を皆殺しにし、その後俺たちと
激しく戦い多くのアダムズ兵の命を奪つた。俺にしてみれば国王よ

りも、將軍のほうがよくばど悪魔のような人物に思えるぞ」

そんなジュールの言葉に、ハイゼンベルクは首を振り言った。

「パーシヴアルの王族たちが皆死んだということは事実だ。しかし、ポア將軍が殺したというのは完全な誤解なのだ。全ての原因はこの【鏡】にあるのに、あえて將軍がその誤解を解こうとしなかったことから、間違った噂が広まってしまった」

「どうということだ」

突如話の表舞台に躍り出た【鏡】に、ジュールは首を傾げた。

「天照の鏡。神話では女神が暴走した燦貴神を封印したことで、誕生したとされている鏡だ。それが本当かどうかは誰も知らんし、我々にしてみれば興味もない。ただ実際に分かっていることが二つある。一つは神話で語られている時代と、ほぼ同じ時代にこの鏡は作られているということ。そしてもう一つは、この鏡には【不思議な力】が宿っているということだ」

ハイゼンベルクは話を聞き入るジュールの目をそつと見ると、一呼吸置き話を続けた。

ポア將軍とグラム博士は、鏡の持つ不思議な力の利用法を確立し、それによって新しい技術を開発した。

兵士であるハイゼンベルクには、その技術がどういったものなのか知りえる事ではなかったが、アルベルト王が求めているものが、まさにその【確立された利用法】と【鏡】その物なのだということは理解できていた。

再三の要求にも応じない二人に対し、国王はコルベットの隊長でありアダムズ軍のNo.2であるトウェイン將軍を遣わせ、どうしても受け入れられない場合は、軍事的介入をも辞さないことを伝えた。

それでも断固拒否する二人に対し、戦争になる事を恐れたパーシヴアルの王族たちは、密かに鏡の明け渡しを企てた。

ちょうど誕生日を迎えたりーゼ姫の祝いの宴が催された夜、鏡の

明け渡しを企てた一部のパーシヴァルの王族たちは、隙を見て鏡を持ち出すことに成功した。

そんな王族たちは鏡をアダムズ軍に明け渡す前に、古くより厳重に保管されていた鏡を一目見たいという欲求に駆られた。そして鏡について何も知らない王族たちは、不運にも偶然に鏡に施されていた【封印】を解いてしまった。

「はじめに言ったが、この鏡は【死の鏡】と呼ばれている。なぜそう呼ばれているか。それはこの鏡の中に死を司る神【蒼き蛭】が眠っていると伝えられていたからだ。そしてその伝えは真であり、封印の解かれた鏡より、目を覚ました【人ほどの大きさをした蛭】が飛び出してきた」

ハイゼンベルクは欲望に身を任せ、不用意に鏡を持ち出した王族たちに遺憾を露わにしつつも、封印の解かれた鏡の【力】を思い出し体を震わせた。

「出現した巨大な蛭は、まるで魂を吸い取るように次々と王族たちの命を奪っていった。だが王族最後の一人となったりーゼ姫の命を吸い取るうと、巨大な蛭がその体に触れた瞬間、姫の胸元が激しく光った。その光は鏡を激しく照らし、一時的に封印を甦らせた。そしていつの間にか、巨大な蛭は消え去っていた」

現実とは思えないハイゼンベルクの話にジュールは困惑したが、それでも話の成り行きに聞き入っていた。

りーゼ姫のみを残し、国王や王妃を含むパーシヴァルの王族たちは、全て巨大な蛭によって命を奪われた。あまりにも現実離れた状況に、生き残ったボーア將軍やハイゼンベルクたちは激しく混乱した。それでも鏡に封印が戻り、巨大な蛭が姿を消したことに少しだけ安堵した。

だが事態は深刻になるばかりであった。

突如謎の光を放ち、窮地を脱したりーゼ姫であったが、その後気を失い、その場に倒れ込んでいた。そんな姫の右腕には、姿を消したはずの蛭の【呪い】がかけられていた。

「呪い？」

ジュールは不安な表情を見せた。

姫の右腕には【奇妙な刻印】が刻まれていた。

それは【蒼き蛭】によって魂を拘束されたことを示す証であり、パーシヴァルに古くより伝わる言い伝えによれば、その刻印が刻まれし者は、他の者にその刻印を見られると命を落とすというものであった。例外として、その場に居合わせた者だけは刻印を見ても姫に影響を及ぼすことは無かったが、いつ何処どこで誰が見ているか分からない状況で姫の命を守るために、ポーア將軍は箝かんこう口令しを布き、鏡と刻印の存在を隠し通すことにした。

「皮肉にもその行為によつて、ポーア將軍がパーシヴァルの王族を皆殺しにした主犯であると、誤解される要因となつてしまった」

ハイゼンベルクは悔くしさを滲にじませた。

姫の命を最優先で守るために、生き残つた彼らにはもう一つ仕事が残つていた。

それは死の鏡を完全に封印することであつた。姫の不思議な力で一時的に封印を甦よみがへらせてはいたが、いつまた鏡より巨大な蛭が現れるか分からない、非常に危険な状況であることに変わりなかつた。そこでポーア將軍は、パーシヴァルに伝わる鏡の封印方法を実行するため、姫と共に封印を行うための聖地【プトレマイオス遺跡】に向かつた。

將軍を信頼する兵士数百人を引き連れると、険しい山岳地帯をひたすら登り歩き、3日後に遺跡に到着した。

声が出せぬほど疲れ切つていたポーア軍であつたが、ようやく辿たどりついたそこに休む時間は無かつた。

なんと遺跡には、全身が銀色に輝く【巨大な鷲】が住み着いていたのだ。

その鷲は自らを【ラヴォアジエ】と名乗つた。

兵士達は美しいその姿に目を奪われた。

しかしそれ以上に銀の鷲の姿に言葉で表すことのできぬ恐怖を感じ

じた。

なぜなら死の鏡に宿る【蒼き蛭】同様、その姿は伝説に謳われる天照の鏡の一つ【火の鏡】に宿るとされる銀の鷲そのものだったからだ。

蒼き蛭の恐ろしさを目の当たりにしていただけに、彼らは絶望感で一杯になった。

その中でただ一人、ボーア將軍だけは冷静だった。

將軍はその鷲に臆する事なく遺跡に來た経緯を全て語った。

すると鷲は將軍に対して非常に穏やかに、そして優しく語りかけた。それどころか不確かであった死の鏡の封印方法を、明確に伝授した。

「それで、銀の鷲はそれからどうした」

ジュールの問いかけに、ハイゼンベルクは静かに首を振った。

「ラヴォアジエと名乗るその鷲は、我らとアダムズ軍が交戦を開始する直前に姿を消した。今でも思い出す、あの燃え上がるような真っ赤な瞳が、やけに哀しく思えたことを……。だが我らにそんな思いに耽る暇は無かった。アダムズ軍との激しい戦闘を繰り広げる中で、鏡を封印するためのタイミングを必死に待った」

封印には一つの条件が必要であり、それは満月の光の力と姫の誕生日であった。

条件が整う時を待つ間、リーゼ姫は日に日に衰弱していった。

將軍たちはそんな姫の姿を齒がゆい思いで見続けた。アダムズ軍との交戦中ではあるものの、姫に対して何もすることができぬ自分達を責めたりもした。

だが姫はそんな彼らに優しく微笑み、温かい声をかけた。

訳の分からぬまま愛する両親を失い、さらに自らの命もいつ尽きるか分からないという、誰よりも張り裂けそうな不安に日々苛まれながらも、泣き言一つ口にする事なく逆に彼らを勇気づけた。

そんな姫を、いつしか皆は心から守りたいと思っていた。

そして戦争を開始してから三度目の姫の誕生日の夜、その時は來

た。

雲一つない満月の輝く夜であった。

姫は短刀の刀身を素手で握りしめた。その手から流れ出る真っ赤な鮮血は、満月の明かりに照らされる死の鏡に滴っていた。すると鏡の中より、苦しみに悶える獣の声がこだました。もがき苦しむその悲鳴は1時間ほど続いたが、次第に小さくなっていき、ついに聞こえなくなった。

完全な封印が成功した。

皆がそう思った瞬間、鏡は激しく輝き、突如蒼き蛭が飛び出して来た。

ハイゼンベルクは目をつぶり、グツと歯を食いしばった。

その時の光景が過ったのであろうか、ハイゼンベルクは少し震えている様子であった。

「あつという間の出来事だった。再び姿を現した巨大な蛭は、その場にいたポーア将軍を含む多くの幹部兵士の命を次々と奪った。蛭の動きを止めようと我は必死に銃で攻撃を加えたが、放たれた銃弾は蛭の体をすり抜けるばかりで、まったく意味をなさなかった。巨大な蛭は、ついに姫にまでその矛先を向けた。もうダメだと思った。ところが姫まであと一歩という距離で、蛭はその体を石に変え動かなくなった。間一髪のところ、死の鏡は姫の血によって完全に封印されていたのだ。そして現場は静寂に包まれた……………」

しばし沈黙が流れた。

ハイゼンベルクの目からは、薄らとした涙がこぼれていた。

化け物の姿をしているにもかかわらず、ハイゼンベルクから醸し出される悔しさと悲しみの感情は、人のそれとなんら変わることなく、ジュールの心に痛いほど沁み渡った。

残された左手で軽く涙を拭ったハイゼンベルクは、話の続きを始めた。

「その場に居合わせた者で生き残ったのは姫と我、そしてディラックの三人だけだった。あまりにも唐突に事が起きたため、我らは少

しの間現実を受け入れることができずにいた。いや、受け入れることを拒否していた。怖かったのだ。恐怖で私の心は埋め尽くされてきた。將軍の為なら命などいらぬ覚悟はとうにできていたはずなのに、無残にも儂く將軍の命をいとも簡単に奪った死の鏡の力の前に我は震えが止まらずにいた……。そんな時、我のもとに歩み寄って来たリーゼ姫は震える私の手を取りそつと握った。姫もまた震えていた。それでも彼女の手から感じる温もりは、不思議と私の恐怖を和らげさせ、さらに落ち着きまでもを取り戻させた。ふと見ると、姫の右腕に刻まれていたあの刻印は、何事も無かったかのように消えていた……」

少し冷静さを取り戻したハイゼンベルクは、夜明けとともにアダムズ軍に対し、全面降伏することを決めた。

だが鏡だけは渡す気にならなかった。

そもそも事の発端は、アルベルト王が鏡を欲し、それを拒否したことから始まったのだ。

鏡を渡してしまったら、ボーア將軍の死も無駄になってしまう。

そう思う彼であったが、アダムズ軍に完全に包囲されている状況で、鏡をどこかに隠す、または持ち逃げすることも不可能に思っていた。必死に考えたが、徐々に夜明けが近づきつつも良い方法が思い浮かばなかった。

その時だ。突然一人のアダムズ兵がハイゼンベルクらの前に現れた。

どこから進入したのかわからないが、遺跡を固めるパーシヴァル軍に見つかることなく、その兵は鏡のもとに参じた。

そして現れた兵はハイゼンベルクらに言った。

「ボーア將軍の友人であるグラム博士の使いで来た者だ。あなた方に危害を加えるつもりはない。落ち着いて話を聞いてほしい。私の名は【ファラデー】。アダムズ軍の隊士ではあるが博士とは古くから付き合いがあり、博士の指示を伝えに来た」

「えっ！ ファラデー隊長!？」

ジュールは唐突に出てきたフアラデーの名に動揺した。

パーシヴアルの王族たちが死の鏡の力によって死に絶えたころ、グラム博士はアダムズにいた。

アルベルト王の要求に対してボーア將軍と話し合った博士は鏡を將軍に託し、彼自らは発明した技術を隠すために、一時アダムズに帰国していたのだった。

アダムズ軍とボーア軍の戦闘は四年目を迎えていた。

硬直状態ではあったが、時折激しい衝突が起き、その情報はアダムズ及び周辺諸国に大きく報じられた。グラム博士は、そういったニュースを耳にする度に心を痛めた。

今すぐにもボーア將軍のもとに加勢に行きたい。そう思いつつも博士にはその場を離れられない理由があった。

「恐らくグラム博士は、事の結末を予想していたのであろう。ゆえに博士は將軍に加勢するよりも、まだ未完成であった研究を続けることを選んだ。そうすることで、將軍にもしもの事があった場合でも、迅速に次の行動を展開できるからだ。そしてあの日が訪れる。

誰よりも鏡に詳しい博士は、姫の誕生日と満月が重なるその日に、將軍が鏡の封印を決行すると確信していたに違いない。そうでなければ、あのタイミングで使いを遣すなど考えられないことだ」

ハイゼンベルクの語る博士の話に、ジュールは息をするのを忘れる思いで聞き入った。

フアラデーが伝えた博士の指示は二つ。

一つは武器を捨て、アダムズ軍に全面降伏すること。

そしてもう一つは封印されし死の鏡を、フアラデーに託せというものだった。

ハイゼンベルクにとって、前者はもとよりそのつもりだったが、後者についてはさすがに躊躇した。

しばらく後になり、博士と直接話すことで彼はそれが正しい行為だと思えたが、その時はまだ何の確証があるわけではなく、突然現

れた敵軍の兵士に今まで必死に守ってきた鏡を渡す事など、一片も考えられなかった。

ハイゼンベルクは混乱していた。

そんな彼を察してか、またしてもリーゼ姫は優しく彼の手を握りしめ、静かに言った。

「この方を信じましょう。この方の目は本当のことを言っている気がします。きつと大丈夫です」

そう言って姫は穏やかに微笑んだ。

戦場に最も似つかわしくない姫のその笑顔を見たハイゼンベルクは、肩の力がすつと抜ける思いがした。

彼は隣に座りこんでいたディラックの顔を見た。ディラックは黙ってうなずいた。

絶対的な確証があるわけではないが、姫の言うことを信じたハイゼンベルクは、鏡をファラデーに手渡した。

張り詰めていたものが切れたのであろうか、姫はハイゼンベルクに寄り添いながら眠るように気を失った。

血の気が引き青ざめた顔をするリーゼ姫であったが、その表情はどこことなく安らぎを醸し出していた。

鏡を受け取ったファラデーは最後に言った。

「私を信じてくれてありがとう。ただ軍幹部のあなた方二人は、降伏後間違いないくアダムズ軍に拘留されるでしょう。だが決して反抗せず自重してもらいたい。いずれ必ず私が迎えに行く。今後決行するグラム博士の【計画】に、鏡の力を知るあなた方の協力がぜひ必要だ。それは亡きボーア將軍の遺志でもあるはず」

そう言い残し、ファラデーは遺跡を後にした。

「ファラデーが何を言っているのか、その意味はまったく分からなかった。だがなぜか、その言葉を聞いた我は生きる希望を持つことができた。はじめ我は全面降伏を行った後、死ぬつもりでいた。ただグラム博士の計画、そして將軍の遺志。それらが一体どういったものなのか知りたかった。生き恥をさらすことになるうとも、それ

が將軍の想いに繋がるのであれば、甘んじてその苦痛を受け止めようと心に決めた」

ハイゼンベルク表情からは、強い意志が感じられた。

自らも参加した戦争の最中に、そのような出来事が起きていたなど知る由もないジュールは、完全に言葉を失っていた。

ただ博士やファラデーが何をしようとしていたのか、それだけが気になった。

ポーア軍全面降伏の後、ファラデーの言った通りハイゼンベルクとディラックは、アダムズ軍の拘留所に投獄された。

特に何かをされるわけでもなかったが、軍ではなく王立協会の科学者による尋問を度々受けていた。

尋問の内容は、兵士である二人には聞いたことの無い科学的な内容ばかりであり、答えようにも意味がさっぱり分からず、ただ時間だけが過ぎて行った。

数人の科学者が入れ替わりに尋問に訪れたが、特に【エルステッド】と名乗るメガネをかけた小太りの科学者と【ウォラストン】と名乗る青白い顔をした科学者が訪れることが多かった。

二人ともアダムズ王立協会の会員であったが、協会内での立ち位置は低く、科学者としてもまだ名を残すほどの実績を上げていなかった。

そんな駆け出しの科学者である二人が行う尋問内容には、明確な違いがあった。

協会からの指示なのであるうか。エルステッドは鏡の力を利用した【技術】について、ウォラストンは【鏡】そのものについて尋問を行った。

エルステッドに対しては、ハイゼンベルクとディラックは何も答えなかった。

これは鏡を利用した技術について、本当に何も知らなかったことが一番の理由だが、たとえ知っていたとしてもエルステッドの横柄

な態度に憤りを感じた二人は、決して尋問に応じる気にはならなかった。

それとは対照的にウオラストンは物腰が柔らかく、話口調も穏やかであり、人として非常に好感が持てた。

科学者であるが故、このような尋問など得意とするわけがなく、協会の命令で渋々やっていることが、受け手のハイゼンベルクには手に取るように分かった。

だがウオラストンの尋問には、鏡について非常に詳細で鋭い観点からの質問が時折投げかけられた。

（こいつ、我らよりも鏡について詳しいな。まるで鏡の全てを知っているかのようだ）

ハイゼンベルクはそう感じ、ウオラストンの質問に言葉を濁らせていた。

拘留から数か月も経つと、協会は二人が科学的な知識が無いことを把握し、尋問の回数も著しく減少した。

ただウオラストンだけは協会の指示以外にも、頻繁に二人のもとに足を運んだ。

そんな彼に対し、ハイゼンベルクは言った。

「協会の指示でないのになぜまた来た。もうお前に話すことは何もない、それはお前も良く分かっているだろう。お前は頭がいい。話の流れを上手くコントロールするお前に、我は話す気の無いことまでつい話してしまった。鏡について我の知っていることは全て話した。足を運ぶだけ無駄だ、そんな暇があるならゆっくり休んだらどうだ？ 初めから思っていたが、お前顔色悪過ぎるぞ」

いつもは優しく微笑むだけのウオラストンであったが、この時は声を上げて笑った。

「ハハハッ、ありがとう。まさか私の事を心配してくれるとは驚きました。でも大丈夫、顔色の悪さは生まれ付きです。ただ誤解しないで下さい。私がここに来るのは、鏡の話がしたいわけではないのです。確かに話の流れに乗せて、あなた方には色々と話していただ

きました。でも実際に協会に報告したのは、聞き出した情報の半分にも満たない、どうでも良い内容だけです」

ウォラストンはそう言うのと席を立ち、入口のドアを軽くノックした。

するとその合図を聞いた一人のアダムズ軍隊士が、ドアを開け部屋に入ってきた。

ハイゼンベルクは目を丸くした。

部屋に入ってきた隊士は、あの時鏡を託した「ファラデー」であった。

「元気そうで何よりです。約束通り、大人しく自重してくれて安心しました。協会も軍も今はもうあなた方に対してほとんど興味を持っていません。ただここを抜けるのはもう少し待ってください。時が来たら必ず迎えに来ます、信じて下さい」

ファラデーはハイゼンベルクの目を見つめ、力強く言った。

グラム博士の指示によって謎の行動をとるファラデーは、最も信頼できる友人であり、かつ協会の会員でもあった科学者のウォラストンに協力を仰いだ。

偶然にもウォラストンが拘留中の二人への尋問担当になったことで、ファラデーはより詳しく二人の状況を把握した。そしてウォラストンが二人より聞き出した情報全てを、グラム博士に伝えていた。そして協会や軍が、拘留している二人の存在意義をすでに感じていないことを確信したファラデーは、二人のもとにウォラストンを頻繁ひんぱんに向かわせ、脱出させるためのタイミングを見計らみはかっていた。

ファラデーがハイゼンベルクの前に姿を現してから数週間後、夏の終わりにその時は訪れた。

激しい夕立に見舞みまわれた軍の収容所は、大雨と落雷はらいに包圍ほくいされていた。

巨大な雷鳴と同時に、収容所は停電になった。

突然訪れた暗闇の中で、ハイゼンベルクは後ろから口を何者かにふさがれた。

「声を出すな。じつとしている、すぐに終わる」

驚きつつも聞き覚えのある声に、ハイゼンベルクは黙ってうなずいた。

ただ暗いながらも部屋の扉が確実に閉まっっているのが見えたハイゼンベルクには、口をふさぐ主がどこから侵入してきたのか不思議に思えた。

「俺がいいと言うまで目を閉じている」

ハイゼンベルクは言われた通り、きつく目をつぶった。

次の瞬間、激しく何かが光った。その時すでに、部屋に人影は無くなっていた。

「もう目を開いていいぞ」

そう言われたハイゼンベルクは、ゆっくりと目を開き辺りを見回した。

声の主は予想通りファラデーであった。

「一体何をした！　ここは何処だ！？」

驚きの表情を見せるハイゼンベルクに、ファラデーは微笑みながらソファアに腰掛けるよう彼に促した。

見たところ、ハイゼンベルクにはここが何かの研究室らしいことは分かった。

「バツ！」

一瞬激しい光に研究室が包まれた。

突然のことで目が眩んだハイゼンベルクだが、その視界にはウォラストンとディラックの姿が映っていた。

「うっ、なんだ、何が起きた？　ここは何処だ？……ん！」

頭を押さえながら周囲を見回すディラックは、ソファアに腰掛けるハイゼンベルクの姿を見つけ、さらに驚いた表情を浮かべた。

そんな彼の表情が滑稽に思えたハイゼンベルクは、思わず吹き出しそうになった。

「ハ、ハイゼンベルク副将、あなたは何が起きたかご存じなのです

か？」

必死の形相（けいさう）で問いかけるディラックに、ハイゼンベルクは手の平を上に向け、無言で首を振った。その時、

「役者はそろったみたいだのう」

後方からの声に、ハイゼンベルクとディラックはすぐ様振り返った。

そこには白い髭（ひげ）をたくわえた小柄（こがら）な老人が立っていた。

「紹介する。この方は【グラム博士】。かつて世界最高の鬼才（きさい）と呼ばれた科学者であり、かつあなた方の上官であるポーア將軍とは親友の間柄であるお人だ」

フアラデーは二人に博士の紹介をした。

「あなたの事は、パーシヴァルで將軍と一緒しているところを何度もお見かけしている。ゆえにあなたが本物のグラム博士であることは疑いようが無い。ただたとえ將軍と親友であったとしても、我らがあなたを信用しているかといえば、必ずしもそうではない」

ハイゼンベルクの言葉に、グラム博士は頷（うなず）いた。

「その通りじゃ。じゃからこそおぬし達には全てを話し、わしを信用してもらいたいと思うておる。わしには鏡の恐怖を実際に味わった、おぬしらの様な者が必要なんじゃ。わしがこれから話す事は、現実としては俄（にわか）かに信じられん事ばかりじゃろう。じゃがおぬしらはすでに【世の理（よりのこと）を超越した事実】を身を持って体験しておる。何が真実で何が偽（いつわり）りか、おぬしらなら信じてもらえるはずじゃ」

博士はそういうと、ゆっくりと椅子（いす）に腰を落とした。

そしてコップの水を一口飲み、喉（のど）を潤（うる）した。

ハイゼンベルクとディラック、さらにフアラデーとウオラストンもこれから始まる博士の話に心の準備を整えた。四人の顔を順に眺（なが）めた博士は、ゆっくりと話し始めた。

「まず、おぬし達をどうやってこの場所に移動させたか教えよう。一言で言えば【瞬間移動】じゃ。大いに驚（おどろ）いてくれて結構（けっこう）じゃが、

その身を持って体験しとるゆえ疑い^{うたが}ようはあるまい。事実おぬし達
がいた拘置所から今いるこの部屋まではざっと20kmある。これ
がわしとボーアが生み出した、新しい科学技術の【一つの力】じゃ」
ハイゼンベルクとディラックは、驚きの表情を浮かべながらお互
いを見つめた。

「おぬしたちは軍人ゆえ、その技術がどういったものか話したとこ
ろで理解できまい。ただ覚えておいてほしいのは、わしらが生み出
したのは【光の吸収と畜光^{ちくこう}】の技術であり、光の持つエネルギーを
一か所に留め、それを爆発的に利用することで、空間に歪^{ひずみ}を生じさ
せるものなのじゃ」

博士の言うその技術がどういったものなのか、話を聞く二人には
まったく想像できなかった。

それでも瞬間移動を体験した二人には、その技術がいかに凄いも
のか漠然^{ぼくぜん}と理解した。

「この技術が完成したのはつい最近の事なのじゃが、基本的な理論
自体は30年ほど前に構築されとるものじゃ。じゃが現在の科学者
たちの中で、その理論を利用する者はおらぬ。何故だかわかるか？」

話を聞く二人は首を横に振った。

「この技術の基礎理論は、過去にアルベルト国王によって完全に排
除^{じょ}されておるのじゃ。理由は簡単じゃ。わしらの生み出した理論は、
国王の提唱^{ていしょう}する理論を真つ向から否定するものじゃったからじゃ。

故^{ゆえ}に現在の科学者の中では、その理論の存在自体が知られておらぬ
のが実状なのじゃ」

博士はもう一度コップの水を飲むと、ファラデーに視線を向けた。
ファラデーは黙って頷いた。

国王によって完全否定されたにも関わらず、それでもグラム博士
とボーア將軍はパーシヴァルでその研究を極秘で続けた。それは自
らが血の滲^{にじ}む思いで生み出した画期的な理論を、そう簡単には捨て
られないというこだわりもあったが、それよりも彼らの前に【ある
人物】より特命を受けたファラデーが現れたことが何よりの要因だ

った。

ボーアの反乱が開始する二年ほど前、ファラデーは自らが請け負った特命を実行するため、パーシヴァルにいる博士と將軍に協力を求めた。そして彼は全てをありのままに打ち明けた。

グラム博士とボーア將軍は、ファラデーの話に言葉を失った。

ファラデーが二人に告げた特命内容は「アルベルト国王の暗殺」であった。

そしてその特命を下した人物が、アルベルト国王最大の理解者であるはずのアダムズ軍總司令【アイザック】であったことが、さらに驚きに拍車をかけた。

アイザックがアルベルト王のことを父の様に慕っていた事は周知の事実であり、もちろん話を聞く二人も知っていた。

国王と總司令の信頼関係は揺るぎないものであり、二人の築く友好関係が今日のアダムズの発展と平和を生み出していると言っても決して過言ではなかった。

そんな国王と總司令に深い溝が生じていようとは、誰も予想だにしないことであった。

だがファラデーの話は、さらに信じ難い事実を二人に告げた。

アルベルト国王は30年ほど前より、伝説とされる【神器】の収集を内密裏に行っていた。

なぜ国王が神器を集めるのか、はっきりとした理由は明らかではなかったが、それらの持つ不思議な力に惹かれていたことは確かであった。

それはグラム博士がまだ王立協会に属していた頃、国王より神器について調査するよう指示された経緯があり、国王が熱心に神器について様々な研究を行っていたことは、博士自身も知っていた。

またそれがきっかけとなって、博士自らも神話や神器について非常に詳しくなった。

ただ時同じくして博士は自暴自棄となり、逃げるように協会を去ったことで、国王の神器についての研究がその後どうなったのか知

る由もなかった。

ファラデーの話によれば、その後も国王の神器についての研究は続き、世界各地に散らばっていた伝説の神器も、次々と国王のもとに集められた。

そして国王は、神話に伝わるほとんどの神器をその手中に収めた。手に入れた神器の内訳は天照の鏡が三つ、そして月読の勾玉が四つであった。

それぞれの神器は、見た者を惹きつける不思議な力を備えていたが、月読の勾玉の一つである【星の弓を持つ熊】を封印したとされる【紺色】の勾玉だけは、抜け殻のようにその力を失っていた。

国王は配下の者に、失われた【力】を再び紺色の勾玉に宿すことを指示するとともに、残りの神器である【大神劍素盞王】、【狼の頭をした修羅】を封印した【赤色】の勾玉、そして神話の闇に語られる【死の鏡】の搜索命令を下した。

しかし思いもよらない事態が起きる。

国王の命令を受けた配下の一人が、【火の鏡】と呼ばれる天照の鏡と、四つの勾玉を持ち出し逃走したのだ。

怒った国王はすぐさま逃走した者の抹殺と、神器の回収を指示した。

だが逃走者は激しい追撃をなんとか振り切り、神器と共にその姿を消した。

ファラデーは言った。

「グラム博士とポリア将軍には、その【逃亡者】に会っていただきたい。二十年以上にも渡る逃亡の中で、【彼】は全てを知った。あなた達にはそんな彼の話を直接聞いていただき、事の真相を理解していただきたいのです」

あまりにも唐突な話のため、博士と将軍は事態を把握することができず悩んだ。

それでも古い付き合いであり、信頼できるファラデーの頼みということで、グラム博士はその逃亡者に会うことを承諾した。また博

士一人で行かせられないと、將軍も同行することとなった。

博士と將軍はフアラデーの案内のもと、その逃亡者が隠れ潜んでいるという【プトレマイオス遺跡】に向かった。

険しい山道を登り歩き、ようやく遺跡にたどり着いた三人であったが、そこで彼らは愕然とする。

なんと夕暮れ時の遺跡で待っていたのは、逃亡者ではなく【アルベルト国王】本人だったのだ。

国王は困惑の表情を浮かべる三人に、微笑みながら話しかけた。

「おやおや【古き友人たち】。こんな辺境でお目にかかるとは、世の中は案外狭いものだな」

返す言葉を失っている博士たちを面白がるように、国王は続けた。「もしや誰ぞと待ち合わせでもしているのか？ それなら奇遇だな、余も【ある者】に会うため、この場に來たのだ」

そう言うと国王は、長い年月を経過したにもかかわらず、悠然とした姿でたたずむ遺跡の階段に腰を下ろした。

王から発せられる何とも言えぬ威圧感に、グラム博士とフアラデーは声が出ず、震えが止まらなかった。

ただ軍人として幾度の窮地を潜り抜けてきたポーア將軍だけは、王から感じる異様な威圧感をなんとか受け流し、状況をうかがった。

王は一人であった。

そんな王に、ポーア將軍は妙な違和感を感じた。

そして額から流れ出る大量の汗に構うことなく、ポーア將軍は王に言った。

「お久しぶりです、アルベルト国王。お元気そうでなによりです。しかし、お付の者も連れずこのような辺境にお一人で参られるなど、お元気にも程がありますぞ」

その言葉に王はニッコリと笑みを浮かべた。

「余の体を気遣ってくれるとは、ありがとうポーア君。昔から君は優しいな、だが心配はいらない。諸君が思うより、余の体はずっと

頑丈なのだよ」

王は上機嫌に続けた。

「待ち人が来るまで、少し科学の話でもしようか。グラム君にポーア君。君たちは余のもとを離れた今でも、曖昧な理屈をこじつけた、理解し難い科学を追求しているようだね。噂で聞いているよ、君たちが【畜光】の技術を完成させたことを。同じ科学者として敬意を表するとともに、それがどんなものなのか、ぜひ一度拝見させていたきたいものだ」

「ど、どこで聞いたのじゃ。わしらは誰にも言うておらんぞ！」

グラム博士は必死の思いで叫んだ。

「余の耳は地獄耳だ。科学の事となれば、どんな事でも知ることができる。ただし諸君らを取り組んでいるミクロの物質観は、どうも納得できん。それは余の解く考え方に当てはめることが不可能であることが一番の理由だが、そもそも諸君らの唱える理論は分配律が成り立たっていないのだよ。この世の自然は全て物理学にて導き出すことができる。君たちが提唱するような【物質は常に曖昧な位置と速度を持つ】などという寝ぼけた仮説を言われたら、それは物理学とは言えなくなってしまう」

「確かに世間の常識からすれば、わしらの言っていることは納得できん事だらけじゃろうて。じゃがその【常識】がいかんのじゃ。常識とは言わば二値論理に従うことなのじゃが、物事に【在る】か【無い】かの二択を迫ること自体がおかしいのじゃ。未来が厳密なルールによって一つに決められておるわけではないように、自然の真の姿とはサイコロを振って決まるような、言わば【確率的】なものなのじゃ」

「ハハハッ！ さすがは鬼オグラム博士、見事な見解だ。しかし余はそうは思わない。自然というものはもつと理路整然とした、言わば美しく【確定的】なものになっているはずなのだ。確率だけの予測、それを余は物理学と呼びたくはありません。決して神はサイコロを振るような、いい加減な真理を作ったりはしないのだから」

「神が何をなさるかに注文をつけるべきではないっ！ 私とグラム博士はあなたの言う古典物理学に慣れすぎた【常識】を捨てることで、まったく新しい技術を生み出した。ミクロの世界は、私たちの常識を越えたつながりを持っているのです！」

「余は君たちの理論全てを否定するつもりはない。その理論が自然現象がある程度まで正しく表現しているのは事実だからな。だが君たちの理論はきつと完全ではなく、最終的なものでもない。だから何事につけても曖昧で、確立的なことしか言えないのだ。余にはそのような理論は到底受け入れられぬ。いつの日にか余は自然がまだ隠している真理を必ず探り当て、きつと全てを明確に証明できると確信している」

「わしは、わしらの描く【曖昧な自然】こそが、自然の究極な姿だと思うちよるぞ」

国王と相いれない思考の相違に、グラム博士とポア將軍は肩を落とした。

そんな二人を見つめる国王の眼差しは、どこか冷たく感じられた。アルベルト国王は、ゆっくりと腰を上げた。

紅く染まった美しい夕焼けを見つめながら、国王は独り言のように呟いた。

「曖昧な自然、それもまた一理あるのかも知れぬな。絶対的な力を誇る【神】とて、時間と言う因果の流れに身を委ねながら、自然を構築するための一部の存在でしかないのかもしれない。しかしそれを受け入れてしまつては、余は自分自身の存在意義を失つてしまう。それどころか今まで行つてきた研究の成果や、これから行う研究の目的を完全に否定することになり兼ねん」

国王は急に頭を押さえながら膝間づいた。

「余の研究、余の理論は正しい。いや、正しくなければならぬのだ！ そのために【神の力】を手に入れたのだ。いつの日か、必ず照明してみせる！ してみせるぞ！」

そう叫ぶと、アルベルト国王は苦しみに悶えるような唸り声を上

げた。

すると国王の背中にはみるみると膨れ上がり、ついには身に着けていた服をも突き破ると、巨大な翼を出現させた。

さらに王の体は巨大化し、徐々にその姿を【人でない姿】に変えて行った。

「こ、国王っ!?!」

グラム博士とポア將軍は、突然その姿を変化させる王に対し、言葉を失った。

国王の体は完全な変形を遂げた。

全身を漆黒の毛で覆い、鋭い爪を持つ四本の太い足で大地を力強く踏みしめ、颯爽と鬣を風に揺らすその姿は、まさに神話の中に謳われる燦貴神の一柱【黒き獅子】の姿そのものであった。

急速に空は真つ黒な雲で覆われ、雷鳴が轟いた。

事態を飲み込めず啞然とするグラム博士とポア將軍に、抜刀したアラデーが声を上げた。

「二人とも、これが真実です! アルベルト国王はもう、あなた方の知っている王ではないのです! 大地の鏡に封印されし黒き獅子にその身を支配され、今では王の心を埋め尽くしていた科学への飽くなき執着のみが一人歩きしている状態なのです。その真実を知ったからこそ、私は国王の暗殺命令を承諾したのです!」

アラデーの叫びで状況を漠然と理解しつつも、博士と將軍はあまりにも現実味のない目の前の現状に、心と体がまったく反応しなかった。

そんな二人を金色に輝く瞳で睨みながら、黒き獅子の姿となったアルベルト国王は低く重い声で言い放った。

「諸君は余の想像を超えた素晴らしい科学者だ。そして君たちの導き出した理論もまた素晴らしい。しかしその理論を完璧なものにするには、君たちに匹敵する科学者が次々に現れ、さらに数世代にも及ぶ時間をかけて研究する必要がある。それは余の提唱する理論も同じこと。だが余には余以外の誰かに、自分の研究を託すことな

ど考えられぬ。何より余自身の手で、余の理論を完璧なものとした。そのために余は神の力を手に入れた。神の力とは即ち【無限の時間】を手に入れたということ。余は必ずやり遂げてみせる！ そしてその先にある【時の支配】すら可能にしてみせる！」

国王の放つ気迫に呼応するように、幾つもの落雷が大地に落ちた。凄まじい衝撃に、博士たちは立っているのも危ぶむ状態であった。「諸君がいかにか常識にとらわれない奇想天外な発想の科学を導き出したとしても、それを誰かに伝えねば、それはただの絵空事にしかない。人間には寿命という限られた時間しか生きられない。それこそが人の、君たちの限界なのだよ。限界を迎え、志半ばでその研究を遂げる。余には到底耐えられないことだ」

「じゃが人は今まで受け継ぎ、受け継がれて今日の発展を成し遂げて来たのじゃ。そしてそれはこれからも変わることはない。王よ、確かにあなたの言うように、一人一人の力は微々たるものじゃ。人は神と違って一人では何もできん。じゃからこそ人は協力し、また後世に託すことで素晴らしい技術を生み出して行けるのじゃ。大切なことは人を信じる事じゃ。信頼こそ人間の持つ最大の力なのじゃ！」

グラム博士は叫んだ。

獣神へと姿を変えた王に驚愕し、一度は言葉を失ったグラム博士であったが、苦楽を共にした【師】に対し、自らの想いを伝えずにはいられなかった。

「同じ科学者として王の気持ちは痛いほど分かる。自分の携わった研究を、最後まで追求したいと思うのは科学者としては当たり前前の事じゃ。じゃが人は限られた時間しか生きることができん。じゃからこそ、その限られた時間の中で精一杯【命】を使い、そして新しい理論を導き出し、新しい技術を開発するのじゃ。人はいつか来る自らの終わりを知っているからこそ、全力でその命を懸ける事ができる。もしあなたが言うように、科学者が皆無限の時間を手に入れるとするなら、この先の科学の未来など、取るに足りないもの

になるじやろう」

「バリバリバリッ」

黒き獅子姿の国王の体は、激しい電撃を帯びていた。

そしてその電撃は、今にも博士らに襲いかかりそうであった。

「グラム博士。君なら余の事を理解してくれると思つていたのだが、やはり最後まで意見が合わなかつた様だな。非常に残念だ。君達とはもつと時間をかけて色々な話がしたかつた。だがもう終わりだ。話の結末はどうであれ、余は君達を生かすつもりでいた。余が認められた諸君だからこそ、その寿命が尽きるまで生かす価値があると考へていた。ただここで実際に話をする事で、改めて意見の相違を認識し、さらにお互いが歩み寄る事も決して無いと余は理解した。ならばもう、君たちと語ることは何もあるまい。ここまで言えば頭の良い君達だ、この先自分らの身に何が起きるか、容易に予想できよう」

国王の体を包む電撃は、さらに激しさを増した。

「アルベルト国王っ！ あなたは本当に私たちの知る王ではないのですか！ 目を覚ましてください！ 私はあなたをずっと尊敬していた。それは科学者としてだけではなく、人としてとても素晴らしい人物であると心から感じていたからだ！ あなたは誰よりも平和を好み、他との争いを嫌つた心優しいお人だ。強力な軍事兵器を生み出すのも、紛争の抑止力として仕方なく開発していたことも我々は知っています。そんなあなたがいくら科学の為とはいえ、人として犯してはいけない一線を越えてしまった事が私には信じられないでもまだ少しでもあなたの人としての【心】が残っているならば、私たちの叫びが届くならば、その身の中の【神】など跳ね除け、ご自分を取り戻して下さい！ そして我々の知る、優しい国王に戻ってください！ 我々はあなたを信じています！」

ポーア將軍は心から訴えた。その目には薄らと涙が滲んでいた。

しかし国王は、そんな將軍の必死の叫びに対し冷酷に言い放つた。「余は黒き獅子。残念ながらこの身の中に残っているのは、王とし

ての記憶のみだ。人としての王の心など、余の力に支配されたと同時に、すでに跡形もなく消滅している。諸君らの知るアルベルト国王は、とうの昔に死んでいるのだよ。それでも君たちがそんな王を、どれだけ慕っていたかは十分理解することができた。ならば尚更君たちを王のもとに送ってやらねばなるまい。王は誰よりも孤独で弱い心の持ち主だった。今でも一人、黄泉の世界で泣いているやも知れん。弟子たちの到着を、今か今かと待ちくたびれながらな！」

「貴様っ！」

ボーア將軍はアラデーの背負っていたビーム兵器を奪い取り、黒き獅子に向けその引き金を引いた。

「バギヤーンン！！」

発射されたビームは、獅子を包む電撃に当たり轟音を立てて消え去った。

「ボーア君、君は先程『神が何をするかに注文するべきではない』と言ったね。君の言う神こそが【余】なのだよ。ならば余が何をしようよと、君たちは口を出すべきではないし、余の【裁き】を真摯に受け止められるはずであろう」

獅子は金色に輝く瞳をさらに光らせ、その大きな翼を広げた。

電撃は唸りを上げ、嵐の様に風が吹き荒れた。

だがその時、真つ黒い雷雲を突き抜け、巨大な【炎の槍】が黒き獅子めがけて降り落ちてきた。

「ズガガーンン！」

炎の槍は黒き獅子に直撃した。

獅子は自身の周りに透明なバリアを張り衝撃を防いだが、それでも凄まじい威力に激しく吹き飛んだ。

炎の槍はそのまま大地に激突し、その周囲を一瞬で蒸発させた。

將軍たちは飛び火する衝撃を避けるため、必死に遺跡の陰に身を潜めた。

少し辺りが落ち着くと、三人は暗雲立ち込める天を見上げた。

するとそこには、全身を銀色に輝かせる巨大な鷲がその姿を現し

ていた。

真っ赤な瞳を持つ銀色の鷲は、獅子の吹き飛んだ方向をじっと見つめていた。

「ゴゴゴゴッ！」

突如大地が大きく揺れ出した。

遺跡の残骸の下敷きになっていた黒き獅子は、その破片を払いのけると自らの翼をはためかせ、上空に飛んだ。

大地には亀裂が入り、いくつもの落雷が連続で落ちた。

獅子と鷲は上空で対峙した。

「わしは夢を見ておるのか。伝説の獣神が二体も現れるとは。とても現実とは思えん」

博士は将軍とフアラデーに訴えかけるよう視線を向けた。彼らもまた、博士と同じ気分であった。

炎の槍の攻撃でダメージを負ったのであろうか、黒き獅子は苦しそうな息をしながら銀の鷲に言った。

「ガハッ、ハッ。な、なかなか気の利いた挨拶だな【ラヴォアジエ】よ。今のが【甕速火】という炎の槍か。迦具土のバリアを貫き、余の体に直接ダメージを与えろとは見事な力だ。やはり火の神のお前に対し大地の神の余では相性が良くないようだな。しかしお前の足元には【大切な人間】がいる。それを守りながら余を倒すことが可能であろうか！」

黒き獅子が叫ぶと同時に、上空に巨大な【電撃の塊】が出現した。

「地上の国々を平定する武力と権威の象徴とも言うべき【黒き獅子】である余の最大の力【武甕雷】、直撃すれば如何にお前とてただでは済むまい」

電撃の塊の下には、博士たちがいた。

ラヴォアジエは急ぎ電撃の塊と博士たちの間にその身を向けた。

「フン。それが神の力を手にしながらも、人の心を残しているお前の弱さだ」

そう吐きすてると、黒き獅子は金色の瞳を光らせた。

その瞬間、巨大な電撃の塊は大地に向け発せられた。

「バキユバギヤアアーン!!!」

ラヴオアジエは身を呈し、電撃をその身で受け止めた。

それでも武甕雷の威力は凄まじく、ラヴオアジエの体を大地に叩きつけた。

大地は大きく揺れ、森は吹き飛び、遺跡は粉々に碎け散った。

そして周りは広域を粉塵で包み込んだ。

「そんな人間などに構うことなく、余に攻撃を加えれば勝てたかも知れぬというのに。やはり人間の考える事は理解し難いものだ」

空中を漂う黒き獅子は、つぶやきながらも一つ武甕雷の電撃の塊を頭上に形成した。次の瞬間、

「ボンッ！」

粉塵を突き破り、炎を全身にまとったラヴオアジエが爆発的なスピードで黒き獅子に突進した。

黒き獅子はバリアを張りラヴオアジエを受け止めたが、その衝撃までもは食い止めることはできず、二体の獣神は頭上の電撃を突き抜け、天を覆う暗雲の中に消えた。

「バギーン！ ガアグアーン!!!」

暗雲の中より獣神同士のぶつかり合う、激しい轟音が鳴り響いた。だが暫くすると轟音は止み、辺りは奇妙な静けさに覆われた。

時間が止まっていた。

二体の獣神が光速の衝突を繰り返したことで、空間に歪が生じ時間が停止したのだ。

しかし獣神同士の力の均衡が崩れることで、一気に時間が動き出す。

天を覆っていた暗雲が弾け飛ぶ様に掻き消え、それと同時に一筋の光が遙か彼方に飛んで行った。

黒き獅子の放った強大な雷撃は、凜とした姿で建ち並んでいたは

ずのプトレマイオス遺跡を、見るも無残な瓦礫の散乱する山に変えた。

だがその反面、攻撃は遺跡の地下に隠れていたとある一面を露出させた。

遺跡の地下。そこには都市と呼べるほどの巨大な古代遺跡が地中に隠れ潜んでいた。

遺跡には多くの神殿が建ちならび、遙々山を越え参拝に訪れる人々はその雄大さに目を奪われ、地下にその様なものが隠れているとは誰一人気付かなかった。

グラム博士たち三人は、そんな地底都市に突き落とされていた。どうか一命を取り留めた三人は、目の前に突然現れた光景に絶句する。

そこにはアダムズ的首都ルヴェリエに匹敵するほどの、巨大な古代都市が目前に広がっていたからだ。

「は、博士。ここは一体何なのでしょう？」
目を丸くするフアラデーの問いに、グラム博士は首を傾げながら答えた。

「わしにもさっぱり分らない。遺跡の地下にこのような【都】が存在するなど、聞いたこともない。ただ地上の神殿が建てられたのは約千年前の事。ならばこの都市も同じ時期に造られたということなのじゃろうか。それにしても地下にあったためか、地上の神殿に比べ風化が少なく非常にきれいな状態で保存されちよるようじゃ」

博士の推測を聞きながら、ポア將軍は周囲の気配を確認した。
古代の都とも言うべき地下都市には、もちろん現在は人など住んでいるわけはなく、まったくの無人であった。

「まだ【科学】という言葉すら無い遙か昔に、このような地底都市が築けるとは。一体どんな文明がここに繁栄していたのだろうか……」

將軍は舌を巻く思いで地底都市を見渡した。

「ビューッ」

突然突風が吹き荒れた。

遺跡に掴まりながら必死に突風をこらえる三人の頭上より、巨大な翼を広げた銀色の鷲が舞い降りて来た。

全身傷だらけのその鷲は、ゆっくりと三人の前に降り立った。

そんな鷲に向けボーア將軍は素早く銃を抜いたが、フアラデーがそれを制止した。

「怯える必要はありません。私の名はラヴオアジエ。今は訳あってこの様な姿をしています。かつては人の身でありアルベルト王直属の配下として仕えていた者です。さあ、私の背に乗ってください。話はまず地上へ戻ってからにしましょう」

將軍と博士はフアラデーの顔を見た。

「私はすでに一度【彼】と会っています。そうです、彼こそがお二人に紹介する【逃亡者】なのです」

フアラデーは微笑みながら言った。

もとの美しい夕日が顔を覗かせていた。

ラヴオアジエの背に乗り地上に戻った博士たちは、無残な姿と化した地上の遺跡を見て意気消沈する思いがした。それでも自らの身を投げ出し、獅子の放った凄まじい電撃から三人の命を守ってくれたラヴオアジエに礼をした。

そんな博士たちに対し、ラヴオアジエは少し苦しそうな呼吸をしながら答えた。

「あなた方を守るのは当然のことです。アイザック將軍を伝い、あなた方をこの場に呼んだのは私のほうなのです。それなのに危険な目に遭わせてしまい、むしろ私のほうが謝罪しなければいけない。そして先程の獅子との戦いで、さらにもう一つ謝罪理由が増えています」

「謝る理由？ 地上の遺跡を破壊されたことについてか？ そんな事したいして気にしておらんぞ」

博士は満身創痍のラヴオアジエを気遣うように優しく言った。

「【火の神】の力を備えたこの体は、どれほどの傷が付こうとも命さえ取り留めていれば【鏡の力】を使って元通りに復活することが出来ます。黒き獅子がこの地に向かって来ることを察した私は、戦闘回避は不可能であると感じ、私の命の根源である天照の鏡の一つ【火の鏡】を安全な場所に隠しました。予想はしていましたが、獅子から受けたダメージは大きく、早く鏡のもとに行かねば深刻な事態に陥ってしまいます。さらに鏡を使って復活すると、その後一定の期間その場を動くことが出来なくなってしまいます。グラム博士とポーア將軍には遙々このような辺境に足を運んでいただいたというのに、あまり多くを語る時間が残されていないようで誠に残念です」

赤く輝くラヴオアジエの目からは、無念さと哀しさが滲み出ていた。

「時間が無いことはよく分かった。そして国王の殺害を企てる理由も、国王……いや、黒き獅子と直接話すことで理解できたつもりじや。その他わし達に伝えたい事があるなら簡潔に要点を伝え、早くその身を回復させるのじや。まあ正直目の前で起きた事全てが現実味無さ過ぎて、おぬしのお話を信じられるかは別じやがのう」

「信じるか信じないかはあなたの方に任せます。話を聞いてくれるだけで構いません……」

そう言うのと、ラヴオアジエは少し口早に語った。

かつてラヴオアジエはアルベルト国王直属の配下として、王の指示ものと神器集めに奮闘していた。

困難を極めながらも次々と神器を見つけ出し、王のもとへ参じていた彼であったが、その過程で王の中の何かが変化していく事を感じた。

研究熱心であることは相変わらずであったが、その内容に明らかに変化が見受けられた。

それまでは主に一般の生活に密着した科学技術の発明を推進していた王であったが、いつしか軍事的な技術の開発に費やす時間が増

えて行き、時には【人体】を使った実験にまで及ぶほどであった。
不可解な疑問を感じ迷いもしたが、それでもラヴォアジエは神器
集めに国中を駆け回った。

だが彼はついに、王が黒き獅子によってその身を奪われているこ
とに気付く。

さらに王の目的が、全ての神器の力を利用することで可能になる
【時の支配】であることが分かった。

時の支配とはすなわち【絶対神ソクラテス】の力であり、軍事技
術の高みを目指す国王がそのような力を手にしたならば大変な事態
になると、尋常でない危険性を感じ取ったラヴォアジエは、王のも
とより神器を奪い逃走した。

怒った国王はラヴォアジエ追撃の為、国王直下の専属部隊【コル
ベット】を編成し、トウエインにその指揮を任せた。

ラヴォアジエは執拗に迫るコルベットの追撃から必死に逃げた。
そんな逃亡生活を続ける彼の身に、思いもよらぬ事態が起きる。
偶然にも手にしていた天照の鏡の一つである火の鏡の封印を解い
てしまったのだ。

鏡より出現した銀の鷲は、ラヴォアジエの身に入り込んだ。

彼は激痛に悶えながらも、必死に意識を保つべく集中した。

気が付くと彼の体は銀の鷲の姿になっていた。

だが不思議なことに、心は彼のままであった。

黒き獅子がアルベルト国王の身を奪ったのに対し、ラヴォアジエ
は逆に銀の鷲の体を奪った形になっていた。

神の力を手に入れた彼は、コルベットの追撃から容易に逃げ去る
ことができた。

ただ黒き獅子が自由にその身を国王の姿と獣神の姿に変化させら
れるのに対し、ラヴォアジエは人の姿に戻ることはできなかった。

その後ラヴォアジエは獣神の姿のまま世界を飛び、自らの体や神
話について調査した。

そして二十年以上もの月日が流れた。

ラヴオアジエはついに、獣神を抹殺する方法を探し出した。しかし神の力をその身に備えたとはいえ、彼一人でそれを実行するのは非常に困難であり、信頼できる協力者を探した。

そんな折、ラヴオアジエは彼と同じく国王の異常な変化に気づき、また王が獣神に乗っ取られていることを知った軍総司令アイザックと出会う。

ラヴオアジエの話聞いたアイザックは、国王と同等の頭脳を持つ科学者の協力が必要だと感じ、かつて国王の右腕としてその手腕を振るったグラム博士に協力を求めることにした。

そして腹心のフアラデーが博士と同郷の友人であることを知り、アイザックは彼を直ぐ様パーシヴァル王国に亡命していた博士のもとに向かわせた。

足早に事の経緯を語ったラヴオアジエに対し、ポア將軍は核心をつく質問をした。

「あなたの言うことは大方理解できたつもりだ。では本題を聞かせていただこう。王を、いや黒き獅子を倒す方法とはいったいどのようなものなのか、お教え願いたい」

ラヴオアジエは苦しそうな表情を浮かべながらも、將軍の質問に素直に答えた。

「獣神を倒すには、神話で語られている【天光の矢】が必要です。天光の矢とは、女神が暴走を始めた燦貴神を鏡に封印するために、天より降らせた光の矢の事です。その矢の発動条件は一つ。朔の刻すなわち新月の誕生する時に【楔の地】なるアダムズのとある四か所に、現存する四つの天照の鏡を掲げることです」

「四つの鏡じゃと!? 天照の鏡は全部で三つじゃないのか?」
グラム博士は首を傾げた。

ラヴオアジエはそんな博士に対して丁寧に答えた。

「神話の中で広く謳われている天照の鏡は、銀の鷲を封印した【火の鏡】、黒き獅子の【大地の鏡】、そして紫の竜を封印した【海の

鏡】の三つです。ただ実際にはその他に、神話に隠されたもう一つの恐るべき鏡が存在するのです。それは神の命すら吸い取るとされる蒼き蛭あおむしを封印した【死の鏡】と呼ばれる鏡であり、現在はパーシヴァル王国に国宝として保管されているはずです」

「な、死の鏡だと！」

ボーア將軍は息を飲んだ。

古くよりパーシヴァルに死の鏡なる骨董こつどうの宝物が保管されていることは知っていた將軍であるが、まさかそれが伝説に謳うたわれる天照の鏡の一つとは知らなかった。

「今はまだ死の鏡がパーシヴァルにあることを獅子は知らない。しかし知られるのは時間の問題です。ボーア將軍はどうか、私の体が回復するまでその鏡を守っていただきたい。そして博士、あなたには大地の鏡と海の鏡を確保するための準備をしていただきたい」

「準備じゃと!？」

明らかに困惑している博士と將軍に対し、ラヴオアジエは構わず続けた。

「火の鏡はすでに私の手にありますが、大地の鏡は王に扮ふんした獅子が持っていることでしょう。残りの海の鏡については、どうやらルーゼニア教が保管しているらしい。ただそれを警護するのは国王直轄部隊であるコルベットであるということ。アダムズ最高の部隊を相手に鏡を奪取だつしゆすることは、非常に困難を極めるでしょう。その為には少数精銳せいえいの屈強くつきやうな兵士と、アダムズに無い強力な武器が必要になります。どうかそれらを博士には準備していただきたいのです」

「……………」
まさに晴天せいてんの霹靂へきれきとも言うべき内容であるラヴオアジエの話に、博士と將軍は言葉を失った。

そんな二人をラヴオアジエは切ない眼差しで見つめていた。

「元の力を取り戻すには、恐らく数年はかかってしまうでしょう。ただ私同様に獅子も大きくその身を痛めています。ゆえに奴とてすぐには動けないはず。少しだけ時間はあります、冷静に私の話した

事を考えてください。私はあなた方を信じています。いや、あなた方以外は信じられない。どうか私に力を貸していただけのことを、心より願っています」

そう言うラヴォアジエは、傷ついた翼を広げ飛び立とうとした。「最後に一つだけ聞かせてくれぬか。なぜおぬしはそうまでわし達の事を信頼できる。おぬしの依頼は命が幾つあっても足りぬほどの内容じゃ。いかにわしが老いばれじゃと言っても、命は惜しいもの。確かに国王が獣神に乗っ取られていることは非常に危険なことじゃ。じゃからと言って、簡単に自分の命と天秤にかけられるほど、わしは人間ができておらん」

そう言って、博士は赤く輝くラヴォアジエの瞳をじっと見つめた。ラヴォアジエは軽く翼をはためくと、博士に優しく言った。

「私はずっと前から博士の事を見てきました。だからこそ誰よりもあなたを信頼しているし、なによりも博士には言葉に表せぬほどの感謝の気持ちで一杯なのです」

「どういうことじゃ？ おぬしと会うのは今日が初めてのはずじゃが！？」

釈然としない博士にラヴォアジエは続けた。

「あなたは【月読に愛されし子】を我が子の様に育ててくれた。真っ直ぐに強く育った【彼】を見れば、いかに博士が良き父であったことが分かります。彼はいつの日か、月読の胤裔としてその力に目覚めることでしよう。でも彼ならきっと大丈夫です。どれほどの苦境に立塞がれたとしても、博士によって強く育てられた彼なら、過酷な未来を自力で切り開くことが出来るでしょう」

ラヴォアジエは茜色の空に飛び上がった。

「ま、待つのがじゃ。おぬし何を言っておるのじゃ！ ジュールとおぬしに何か関係があるのか！」

博士の叫びに応えることなく、ラヴォアジエは飛び立った。

残された三人は茜色の空をさらに赤く染めるがごとく、傷ついた

翼を羽ばたきながら夕日に向かい飛んで行く、全身血まみれのラヴ
オアジエの姿をただじっと見つめていた。

雪の果の涙（前）

パーシヴァルへと戻った博士と將軍は、それぞれに課せられた使命を全うするように、精力的に動いた。

博士は神話や神器について、將軍は死の鏡について懸命な調査を行った。

だがその後、黒き獅子はアダムズ国王の命としてパーシヴァルに対し、死の鏡の譲渡と博士と將軍の開発した畜光の技術の開示を要求した。

「その後何が起きたかは、おぬし達が経験した通りの事じゃ。どうじゃ、わしのやろうとしていることの意味が少しは分かってもらえたかのう」

ハイゼンベルクとディラックは、息をするのを忘れるほどに博士の話に聞き入っていた。

ウォラストンはそつと二人に水の入ったコップを渡した。

ハイゼンベルクはその水を一気に飲み干すと、小さく呟いた。

「將軍が我々を引き連れ遺跡に向かった時、そこにいた銀の鷲に対して冷静に対応できていた理由がわかった。そして遺跡の地下にあった地底都市を利用することで、長期に渡りアダムズ軍と戦闘を続けられたのも、そんな過去があったからなのか。ファラデーの言った將軍の遺志が何なのか、少し分かった気がする」

その言葉にディラックは黙って頷いた。

「では本題に移ろう。アルベルト国王、いや黒き獅子の抹殺計画についてじゃ」

グラム博士は計画について、その全貌を話した。

ラヴオアジエの残した言葉を改めて博士が調べたところ、やはり【天光の矢】を発動する以外、確実に獣神を倒す方法が無いことが分かった。

発動のポイントは3つ。時間、場所、そして鏡だ。

一つ目は時間。

これは朔さくの刻とき、すなわち新月の誕生する時を意味しているが、これは月に一度程度の周期おとすで訪れる自然現象のため、さほど問題ではない。

二つ目は場所。

ラヴオアジエの残した【楔みそぎの地】という言葉を探ることで、博士はその場所をつきとめた。

楔みそぎの地とは神話によると、女神ヒュパティアが想起きそつしん神プレイトンを倒した際、その身に付いた返り血を洗い流した四つの場所であるとされていた。

現在においてその場所とは、アダムズ城の南方に位置する【羅城らじょう門】、東方に位置するルーゼニア教総本山【金鳳花五重塔きんほうけしごむのかぐら】、西方に位置するアダムズ王立協会本部【エクレイデス研究所の一号棟】、そして北方に位置する今は廃墟と化している【廃工場跡地】であった。

注意すべきは、嚴重な警備体制の整っているエクレイデス研究所のみであり、対策はそれほど難しいものではなかった。

そして三つ目のポイントである鏡。

これが最も困難な条件であり、全ての鏡を集めることができるのか、確認など何処どこにもなかった。

それでも博士はそれなりに根拠のある情報を掴つかんでいた。

かつてラヴオアジエによって集められた天照あまてらすの鏡の内、大地の鏡はエクレイデス研究所が、そして海の鏡はルーゼニア教が嚴重に管理していることが分かった。

王立協会の会員であるウオラストンは、博士やファラデーの指示の下、研究所の中を調査した。

しかしまだ協会内での立場の低い彼には、なかなか鏡にたどり着くことが出来ていなかった。

それでも意外な収穫があった。

ウォラストンは研究所内を散策する過程で、同期の科学者である【エルステッド】と親交を深めることができた。

エルステッドはウォラストンとともに、協会の命でハイゼンベルクらに尋問を行った者だ。

ただ彼は非常に陰険な性格であり、かつ目下の者に対する傲慢な振る舞いから周囲より浮く存在になっていた。

人の良いウォラストンですら、その人間性を疑いたくなるほどねじ曲がった性格に嫌気がさしたが、それでもエルステッドは博士たちが喉から手が出るほど欲しい特権を持っていた。

エルステッドは若いながらも、ルーゼニア教において非常に高い地位を築いていた。

グラム博士にフアラデー、さらにはウォラストンの誰一人としてルーゼニア教の信者ではなかった。

そのため海の鏡を管理しているはずのルーゼニア教に対し、何の調査も行うことが出来ていなかった。

ウォラストンはそんなエルステッドの教団内での地位を利用し、海の鏡について調査しようとした。

予想通り人を疑うことしか知らないエルステッドは、気軽に話しかけてくるウォラストンのことを怪しげな眼で見ている。

ところがある日を境にエルステッドの態度は一変する。ある日の事、ウォラストンは意を決しエルステッドをグラム博士に面会させた。

エルステッドのグラム博士を見る目は、まさに神を崇める目そのものだった。

そう、彼は博士の事がある意味ルーゼニア教の神以上に崇拜していたのだ。

実は彼がまだ幼い頃、父の経営する鉄道部品製作会社が経営難に陥っていた。

そんな時、たまたま博士がその会社に研究に必要な試作部品を発送した。

その際工場に訪れた博士のアイデアによって、エルステッドの父は蒸気機関で発生するエネルギーの損失を、従来よりも著しく抑えながら動力として伝える、画期的な機構を開発する。

それによってエルステッドの父の経営する会社は、経営難を克服すると共に大きく発展した。

元々ルーゼニア教の信者だったエルステッドの父は、莫大な会社の利益の一部を教団に寄付した。父はそれほど教団自体には興味なかったが、エルステッド自身は言うことを聞く教団員に対し、どんどんと傲慢になっていった。

ただ父の会社を立て直す発明のきっかけを授けてくれた博士を、彼は神の如く尊敬した。そして自らも科学者への道を進んだ。

さすがにエルステッドも博士の狙いが国王であることと、俄かに信じられない伝説の力の話でたじろいだ。それでも尊敬する博士に協力したいがために尽力をつくした。

エルステッドは教団内で、比較的早く海の鏡の存在を確認する。しかし、いくら彼に教団内での地位があつたとはいえ、嚴重に管理されている鏡を持ち出すことは不可能だった。

そんな中エルステッドは、ルーゼニア教主催の展覧会がルヴェリ工美術館にて開かれることを知る。

そこで彼は持ち前の傲慢な態度で教団へのごり押しを行い、そこに海の鏡を出展させることを成功させた。

チャンスとばかりに博士たちは、鏡の強奪計画を立てた。

ただその警備にコルベットが裏で動いていることが分かり、現在計画は行き詰まっている状況だった。

「わしらには手足となって動いてくれる屈強な戦士が足りぬ。そこでパーシヴァル指折りの兵士であるおぬしらの協力が欲しいのだ」
博士の要望に対し、ハイゼンベルクは少し表情を曇らせながら尋ねた。

「話の流れは分かりました。正直まだ信じられない部分もありますが、我らがあなたの協力を拒む理由はありません。しかし相手がコ

ルベットとなると、いくら戦闘経験豊富な我らとて、容易に事を進めることはできないでしょう。何か策はないのでしょうか？」

ハイゼンベルクの問いに、博士は神妙な面持ちを浮かべた。

そしてポケットから小さな【白い玉】を取り出し言った。

「この玉を見てくれ。これはわしが開発した最新の玉型兵器の一つである【高周波弾】と呼ぶものじゃ。この玉を破裂させると、あるミクロの素粒子が周囲に拡散する。その素粒子は電子制御された機器に対し、電磁波障害を発生させ全ての機能を停止させることができる。コルベットの装備する電子兵器は例外なく、その機能を失うはずじゃ」

「それでも剣や旧式の武器に対しては、その効果は無いということですね。たとえ最新の兵器が使用できなくなろうとも、相手は王国最高の兵士たちです。それだけでは不十分過ぎます」

さすがは戦場のスペシャリストである。ハイゼンベルクは的確に戦力を分析した。

「いっそのこと、さっきの様にヒューって鏡のところまで瞬間移動できないのか？ その方が世話無いぜ」

デリラックが口を挟んだ。

「それは無理じゃ。瞬間移動を行うには【入口】と【出口】を初めに設置しなくてはならん。おぬし達を脱出させることが出来たのは、ウォラストンを何度も拘置所に向かわせ、気付かれぬよう入念な準備を施していたから成功したのじゃ。監視の厳しい鏡の前では不可能な事なのじゃよ」

「ならどうすれば良いのです。命を懸けるにしても、このままでは犬死するだけですぞ！」

ハイゼンベルクは博士の目を睨み、きつく言った。

彼らは尊敬して止まないポーア將軍のために、その命を投げ出す覚悟はできていた。ただその死に場所があまりにもつまらないものを感じられ、逆に怒りが込み上げていた。

博士には彼の気持ちが届くほど伝わっていた。

少し沈黙が続いたが、フアラデーが口を開いた。

「実際に兵士として作戦を実行できるのは、私とあなた方二人のみ。僅か三人でコルベットに挑むなど、あなたが言うように自殺行為に等しい。だが一つだけ、三人で作戦を成功させる手段があるのです。ハイリスクであるの言うまでもないですが……」

そう言うと、フアラデーは博士に目配せした。

「ちよつと待つておれ」

博士は重そうに腰を持ち上げると、隣の部屋に入つて行つた。

グラム博士は小ぶりのケースを持参した。

ハイゼンベルクらの前にあるテーブルにケースを置き、その蓋を開けた博士は彼らに中にしまつてある物を見るよう促した。

ケースの中には勾玉の形をした、親指の爪程の大きさの灰色の石が3つ入つていた。

「何ですか、これは？」

ハイゼンベルクは素直に尋ねた。

博士は厳しい表情を浮かべながら、説明を始めた。

「この石はアルベルト国王自らが研究し、王立協会の科学者に作製方法を指示して作らせた人工的な石じゃ。ウオラストンが王立協会内を調べている時に偶然手に入れたものなのじゃが、国王自らが研究していた事と、この石が勾玉の形状をしていることから、間違いなく神器に關係した何かだとわしは推測し調査をはじめた。するとこの石には腰を抜かすほどの秘密が隠されておつた」

「秘密？」

ハイゼンベルクは首を傾げた。

「そう、この石は神器である【月読の勾玉】をコピーして作られたクローンの勾玉なのじゃ。月読の勾玉は女神が護貴神を封印したとされるものじゃが、言い伝えによれば勾玉と同じ大きさの胎児を宿す妊婦が、満月の光を浴び輝く勾玉を見ると、その胎児に封印されし神の力が宿るとされておる。実際のところその言い伝えが本当か

どうかは分からんのじゃが、驚くことにこのクローンの勾玉は、その封印された【神の力】までコピーしているということじゃ」

「!?!?」

話の内容が読み込めていない二人に対し、ウォラストンが言った。「あなた方は【ヤツ】と呼ばれる人外の化け物をご存じでしょうか?」

「噂うわさくらいは耳みみにしている。だが実際にそれがどういった化け物なのかは知るところではないっ」

的まを得えぬ話に、デイラックは少し苛いら立たっていた。

「ヤツとはこのアダムズ王国にて二十年ほど前より度々たびたびその姿を現しては、そのおぞましい姿と粗暴そぼさによって人心を恐怖せしめていた化け物です。現在までに十体ほどのヤツが確認されていますが、ヤツについては未知な部分が多過ぎ、どこから現れどこに行ったのか、まったく分からなかった。だが私たちは手に入れたクローンの勾玉を調査する過程で、ヤツに秘められた謎を解き明かすことができました」

「どういうことですか?」

ハイゼンベルクは博士に視線を向け、冷静に尋ねた。

「ヤツとは、このクローンの勾玉に備わった【偽りの神の力】によって生きた人間を強制的に【獣神の姿】に変異させたものなのじゃ。国王はこの偽にせ勾玉の研究過程において、生きた人間による人体実験を度々実施し、その時生まれたのが今までに確認されたヤツじゃったのじゃ。未完成の勾玉の力によって生まれたヤツは、自分自身を制御することができずに暴れ、それを見た人々を恐怖おそに陥おれた」

「なぜアルベルト国王はそんな事を」

「忘れたか、国王はすでに国王に非あらずじゃ。獅子にその身を奪われた国王は、軍事技術の研究に重きを置くようになりおった。その中で王は、神話に謳うたわれる神の力まで武力に変えようと試こみていたのじゃ。当然じゃろ、ヤツ一体で百人の兵に匹敵するほどの戦力になるのじゃからのう」

「……………」

話を聞くハイゼンベルクは、何となく嫌な予感がした。

「ただ幸いなことに偽勾玉の研究は暗礁に乗り上げ、現在は凍結しているらしい。神の力を人の身に備えることなど、そもそも不可能なのじゃからのう。人は人、神は神なのじゃ。バイクにジェットエンジン付けてどうするっていうのじゃ。考えずとも身を滅ぼすだけなのは明白なのじゃがのう」

博士は哀しそうに言った。

「この目の前にある勾玉に、まだ神の力は宿っているのですか」

ハイゼンベルクは博士の目をじっと見つめながら聞いた。

博士は黙って頷いた。

「副将、まさかあなたその勾玉の力を使って鏡を手に入れるつもりですか！」

ディラックはハイゼンベルクの考えを察した。

「たとえ偽りであろうとそんな神の力を利用しない限り、わずか三人でコルベットから鏡を奪うことなど出来るわけなからう」

「しかし」

ハイゼンベルクの意見に、ディラックは返す言葉を見つけることが出来なかった。

博士は重い口を開いた。

「確かにこのクローンの勾玉に秘められた偽りの神の力を利用すれば、コルベットを相手にしても三人で十分事足りるであろう。じゃが本当の問題はそこではない。問題なのはこの石の力を使った者は、確実に【死ぬ】事なのじゃよ」

「えっ……………」

ハイゼンベルクとディラックは息を飲んだ。

そんな二人の表情に気づきながらも、ウォラストンは博士の話の続きをした。

「ヤツは人の数十倍という身体機能を有しています。ではその力は一体どこから得られているものなのか。答えは【命】です。石に秘

められた力とは、ベースとなった人の命を凝縮し、その命を驚異的な身体能力に変える力なのです。協会内に残されていたデータを確認したところ、石の力でヤツに変化した者の命は通常で約3〜4ヶ月とされ、屈強な肉体を持つ者であったとしても、長くて半年程度だと報告されています。本来であれば六、七十年あるはずの寿命が、わずか半年にも満たないスピードでその命を消費する。それがこのクローンの勾玉の力であり、ヤツの力の正体なのです」

「さらに付け加えるとじゃ、ヤツになったときに自我を保っているかの保証は無い。たとえ意識を繋ぎ止めたとしても、一度ヤツの姿に変化した者は死ぬまで元の姿には戻れん。ゆえに縁有る者たちはもう二度と、会うことも話す事もできんじゃろ」

「……」
ハイゼンベルクはパーシヴァルに残した愛する家族の顔が脳裏に浮かび黙り込んだ。

「ヤツがこの石の力で生まれたことは言ったが、どこに消えたかは言っただけだったな。ヤツはその短い寿命を全うし命尽きると、元の体に戻るのじゃよ。ヤツの死骸が見つからないのは、そんな理由からじゃ。誰からも忌み嫌われる存在となり、誰に知られることなく死んで行く。それが【ヤツ】になるといふことなのじゃ」
グラム博士は悲痛な表情を浮かべつつも、覚悟を決め二人に言った。

「そんなものに誰がなれと命令できよう。待っているのは悲惨な現実と耐え難い苦痛のみじゃ。それでもわしはおぬしに頼みたい。わしの為に死んでくれぬか。そして茨の道を歩んでくれぬか。わしを恨むなら好きなだけ恨むが良い、殺したいなら殺しても構わん。じゃがわしにはおぬし以外にもう、頼む術が無い」
「そう言うなり、博士は額を床に押し付け土下座をした。」

「博士……」
ハイゼンベルクとディラックは、小さく背を丸める博士の姿をただ見ている事しかできなかった。

ルーゼニア教主しゅう催ひの展覧会が、ルヴェリエ美術館にて開催された。著名な絵画や彫刻などに紛れ、海の鏡は美術館の中でもあまり目立たない位置に展示されていた。

2週間の日程のうち、すでに半分が経過していたが、博士たちは未だ計画を実行できずにいた。

ウォラストンとエルステッドは交代で鏡の状況を見て回った。

有名な美術品とは違い、海の鏡の警備はそれほど厳重ではないように見受けられたが、二人は細心の注意を払った。

美術館の駐車場にはファラデーとハイゼンベルク、それにディラックを乗せたトラックが止まっていた。

ハイゼンベルクとディラックは、クローンの勾玉の力を使うべきか迷っていた。

二人は拘置所を脱走した脱獄囚だつごくしゅうとして指名手配されていたため、表だって動くことが出来ない状態であり、そんな自由の利かない息の詰まるような状況が、余計に二人の気持ちを鈍にぶらせていた。

エルステッドと見回りを交代したウォラストンが戻ってきた。

ファラデーはウォラストンに鏡の状況を聞いたが、特に変化の無いことを彼は伝えた。

変わり映はえのない状況に、ディラックはたまらず叫んだ。

「我はこの目で海の鏡とやらを見てくるぞ！　そこで何か感じることがあるれば、自分の気持ちに決心がつくやもしれぬ！」

「待てディラック！　早まるな！」

ハイゼンベルクの制止を無視し、ディラックはトラックを飛び出した。

「バカ野郎っ」

ハイゼンベルクとファラデー、それにウォラストンは急ぎ彼の後を追った。

展覧会は入場無料であったこともあり、込み合うほどに人が溢あふれていた。

ディラックは人込みを掻き分け鏡のもとにたどり着いた。

「これが伝説の天照の鏡なのか」
「ディラックの立つ目の前には、竜の彫刻が施された紫色の鏡が展示されていた。」

決して雅やかとは言えないまでもその鏡には、なぜか見る者を引き付ける不思議な力があることをディラックは感じた。

そんな彼のもとに、血相を変えたエルステッドが駆け寄ってきた。「あんた何しに来たんだ！ こんな場所にいたらすぐに通報されちまう。早く戻ってくれ！」

エルステッドはディラックの腕を掴み、強引に引き返そうとしたが、それを彼は拒んだ。

そこにフラデーたちが駆け付けた。

「戻るんだディラック！ ここは危険だ。コルベットに見つかれば逃げ場はないぞ！」

戦場で培った勘が働いたハイゼンベルクは、ただならぬ気配を感じ全身に鳥肌が立っていた。

ハイゼンベルクとフラデーは必死にディラックの体を押し戻そうとたが、怪力の彼に逆に投げ飛ばされた。

「何事ですか！」

騒ぎに気付いた一般の警備員が駆け寄ってきた。

「何でもありません。ご迷惑をおかけして済みませんが、もう私たちは帰りますので」

ウォラストンは警備員にそう言いながら、その場を切り抜けようとした。

「美術館内では静粛にお願いしますよ。他のお客様もいることですし……………ん!?」

警備員は起き上がるハイゼンベルクの顔を見て気付いた。

「き、貴様！ 脱獄囚の元パーシヴァル王国の兵士だな！ こんな場所に現れるとは、グハツ！」

無線機を手に取り応援を呼ぼうとした警備員を、ディラックは殴

り飛ばした。

「キヤアア！」

吹き飛んだ警備員を見た観客が悲鳴を上げた。

「お、おい。どこに行くんだ！」

騒ぎの中ウオラストンはファラデーの腕を無理やり引つ張りながら、急いで美術館の非常口の扉を開けた。

「ファラデー、君は軍人だ！ 脱獄囚と共にいることが知れば、君の立場も危ぶまれるし、ただでさえ困難な計画がさらに難しくなってしまう。ここは私に任せしてくれっ」

そう言うなり、ウオラストンはファラデーにスタンガン突きつけた。

電撃を打ち込まれ倒れるファラデー。

そんな彼の懐より、ウオラストンは【小さな石】を取り出した。

「ちよっ、ウオラストン。な、何をするつもりだ」

ファラデーはウオラストンを止めようと必死にもがいたが、体か言うことを聞かなかった。

「もし私が自我を失ったときは、容赦なく殺してくれ。どうせ討たれるなら、君に殺してもらいたい」

「なっ、バ、バカな……。早まるな、お前のその体では……。たとえば意識を保てたとしても……。長く……。は……」

ファラデーは気を失った。

「ありがとうファラデー。君と友になれて本当に良かった。さよなら……」

ウオラストンは騒ぎ立つ美術館に戻って行った。

美術館の中は騒然としていた。

黒い制服に身を包んだコルベットに、ハイゼンベルクとディラック、それにエルステッドは囲まれていた。

「へっ、そろそろゴキブリの様に現れやがった。王国最高の集団とやらは、じめじめした所に潜んでいるのが得意なようだ」

デイルックは吐き捨てるように言った。

「餌えさに食いついたのはパーシヴァルの二人だけか。できることなら【首謀者】であるグラム博士を捕とえたかったが、さすがにそれは虫が良過ぎるか。他にも数人いたように思ったが雑魚雑魚に用は無ないゆえ、まあ捨ておいて問題なかるう。その者よ、ご苦労であった。下がって良いぞ」

コルベットの隊長であるトウエインはそう言うつと、腰を抜かし座り込んでいるエルステッドに目配せをした。

「なつ、貴様！ 裏切つたか！」

デイルックは憤怒ふんどの形相ぎようそうをエルステッドに向けた。

「あ、あんた達は国王を殺すつもりなんだろ。お、俺にはそんな、こ、国家に反逆することなんか、出来るわけないだろ！」

「お前は博士から全てを聞いたのではないのか。それにお前は博士の事を崇拜すつぱいしていたのではないのか。それなのにどうしてこんな事をするのだ。お前の博士に対する感情は、決して偽いつはりりでないと我には思えていたのだがな」

ハイゼンベルクは憐あわれみの表情を浮かべながら言った。

「グラム博士を尊敬していたことは事実だ。けど俺の父を殺ころしたのもまた、博士なんだ。俺には博士のことを軍に報告するいわれがある。それに博士の話は信じられないことばかりだ。でも仮に国王が本当に獣神だとしたら、なおの事歯向はむかかうべきじゃないだろつ。人の力ではどうすることもできないんだし、まして神に矛先ほこしなを向けるなんて、ルーゼニア教の信者である俺には到底考えられないことなのだから」

半ベそをかきながら、エルステッドはゆっくりと起き上がった。

「貴様の事は、初めの尋問しんもんの時から虫が好かなんだ！ 国王よりむしろ貴様をここで八つ裂さきにしたいわ！」

吠ほえるデイルックに、周囲を包囲するコルベットの隊士たちは最新式の銃を構えた。

「ここで無理に抵抗したとて、無駄死にするだけだぞ。大人しく降

伏しろ。お前たちは元の拘置所に戻るだけだ。ただ前回その拘置所をどのように抜け出したのか、その方法はいずれ吐いてもらう。素直に答えれば、命だけは保障するぞ」

トウエインは不敵な笑みを浮かべながらそう言った。その時、「ビッキーン！」

突然鼓膜こまくを突き刺すような高周波が、美術館にいる者を襲った。それと同時に美術館内の照明が消えた。

まだ昼間であつたが、照明の消えた美術館内部は暗くなった。「ドンツ！」

吹き抜けの2階から【腐った豚】のような顔をした、体全体を黒い毛で覆った巨大な人型の化け物が現れた。

「グオオオオオ！！！」

巨大な雄叫おたけびは美術館全体を揺るがすほどに感じられた。

「くつ、な、なぜ【ヤツ】がこんなところに！」

突然出現したヤツの存在に、王国最高と呼ばれる隊士たちもさすがに怯こんだ。

「何をしている！ ヤツを討て！ その化け物の姿に騙たまれるな！ 訓練通り冷静に対応すれば、我らの敵ではないぞ！」

「しかし隊長！ 銃が機能しません」

コルベットの装備していた最新式の銃は、その機能を完全に失つていた。

動揺するコルベツトをしり目に、ヤツは美術館中を駆け巡めぐった。しばらく館内を駆け回ったヤツであつたが、刀を抜いたコルベツトの隊士たちを目にすると、突如ガラスを突き破り美術館の外へと逃走した。

「追え！ 絶対に逃がすな！」

そうトウエインが隊士たちに命じた時、すでにヤツの姿は消えていた。

そして包囲されていたハイゼンベルクとディラックの姿も消えていた。

あまりに唐突に起きた事態に、美術館は騒然となっていた。ただ海の鏡に施された竜の彫刻の目は、そんな事態を静かに見つめているようであった。

数日が経過したが、ヤツへとその姿を変えたウオラストンの行方ゆくえは一向に分からなかった。

不意を突かれたとはいえ、ウオラストンにクローンの勾玉を奪われたフラデーは悔やみきっていた。

そんな彼にハイゼンベルクは言った。

「我らが無事に美術館から逃げられたのは、ウオラストンがヤツになつて暴れてくれたおかげだ。そうでなければ今頃お前も含めて皆拘束こくすくされていたことだろう。ウオラストンが咄嗟とつとに考えた最良の策だったのだ。彼は自分の命を懸けることで、我らを助けたのだ」

「そんな事は言われなくても分かつてる！ 分かつてるけど、俺の気持ちきもちがそれを許ゆるそうとしないんだ！ あいつは俺たちとは比べられないほどひ弱な体ていをしている。ヤツの力に耐えられるわけがない」
自責じせきの念ねんに駆かられるフラデーの心は、今にも張り裂けそうだった。

「恐らくウオラストンは自我を失った場合、わしらを傷つける恐れがあると考えたため姿を消したのであるう。あやつは誰よりも優しい男おとこじゃからう」

「だからこそ、あいつは人であつてほしかった。ヤツの姿なんて、ウオラストンには一番似つかわしくない姿のはずだ。それなのにどうして……」

フラデーは壁を背にたたずむディラックを睨にらんだ。

その目には明らかに殺気に近い感情が込められていた。

「ちよつと勘弁かんべん願ねがいたい。確かに我がお前たちの制止を聞かず、鏡のもとに向かったことの非は認める。だがそれでもエルステッドの裏切りがあつた以上、遅かれ早かれこうなることは決まつてたんじゃないのか」

「何だと！」

ファラデーはディラックの胸ぐらを掴み、拳を振り上げた。

「やめるんじゃファラデー！　今ここで言い争ったとして、すでに起きてしまった事、ウォラストンは戻って来ぬのじゃ。大切なのはこれからどうするかを考えることじゃ。それがウォラストンの決死の覚悟に報いることに繋がろうて」

「くそつたれがっ！」

ファラデーは振り上げた拳を、渾身の力で壁にめり込ませた。

「少し俺は作戦を外れます。今は何も考えられない」
そう言つてファラデーは博士らのもとより離れて行った。

そのすぐ後のことだ。

今度はディラックがクローンの勾玉の力を使った。

あまりに突然であつたため、博士とハイゼンベルクは事態を把握するのに手間取つた。

その風貌や言葉使いからは想像できないが、ディラックは誰よりも仲間の絆を大切にする男であつた。

そんな彼は突然自分たちを裏切つたエルステッドを許すことができなかつた。

牛顔のヤツの姿となつたディラックは、エルステッドを殺すためエクレイデス研究所に単身殴り込みをかけた。

自己防衛機能による激しい攻撃を掻い潜つたディラックは、研究所にいたエルステッドを見つけ出し、彼を蹴り飛ばした。

瀕死のエルステッドにとどめの一撃を浴びせようとした時、たままその場に居合わせたトウエイン将軍によつて、彼は撃退されてしまつた。

天乃尾刃張によるトウエイン将軍の攻撃は、ディラックを窮地に追い込んだ。

だがそこに、今度は羊顔のヤツになつたハイゼンベルクが現れる。ハイゼンベルクの尋常でない強さに、今度はトウエインが後退を

余儀よぎなくされた。

そして一瞬すきの隙をつき、ハイゼンベルクはディラックを強引に引き連れ、エクレイデス研究所をあとにした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8317w/>

月読の奏

2011年11月12日03時26分発行